

本報告書は、文部科学省の教育政策推進事業委託費による委託事業として、学校法人西野学園が実施した令和4年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の成果をとりまとめたものです。

文部科学省委託事業
令和4年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

地域活性化のための農福連携人材育成事業

成果報告書

令和5年3月

学校法人西野学園

札幌心療福祉専門学校

目次

第1章 事業の概要

- 第1節 事業名
- 第2節 事業の概要
- 第3節 事業の実施期間
- 第4節 事業の推進体制

第2章 実施概要

- 第1節 実施経緯
- 第2節 実施体制図
- 第3節 会議議事録
 - 第1項 コンソーシアム会議
 - 第2項 カリキュラム会議

第3章 今年度の事業及び教育プログラムの内容

- 第1節 北海道余市紅志高等学校との連携(令和4年度)
 - 第1項 連携内容
 - 第2項 成果
- 第2節 札幌圏域の高等学校等との連携(令和4年度)
 - 第1項 連携内容
 - 第2項 成果
- 第3節 その他
 - 第1項 報道関係 (農業新聞)

第4章 全体の振り返り

第5章 まとめ

第1章 事業の概要

第1節 事業名

令和4年度「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証

「地域活性化のための農福連携人材育成事業」

第2節 事業の概要

・名称

『「農福連携」による地域活性化をテーマに高等学校と専門学校の連携による先取り履修を取り入れた高専一貫カリキュラムの編成・構築』

・内容

(1) 開発する高・専一貫の教育プログラムの全体像

社会福祉士と精神保健福祉士の養成校である本校では、近年多くの地方自治体で取り組みが進んでいる「農福連携事業」を学ぶことで、障がい者や高齢者に対して、農業の知識を身に付けたソーシャルワーカーが相談業務を行うとともに農作業のアドバイスをすることができる人材を育成することを目指している。その目的を達成するために、高校生の段階からソーシャルスキルや社会人基礎力を養い、福祉の基礎的な知識や考え方に少しずつ触れながら、専門学校へ進学後に現場での実習経験を積み、社会福祉主事や社会福祉士の資格取得を余裕のあるカリキュラムで目指す教育プログラムを構築する。この高専一貫プログラムで、進学後のミスマッチを避け、途中で退学する学生の減少にもつなげ、農福連携に取り組む地方自治体に就労することにより、若者の地域への定着と地域の活性化を図ることを目的としている。

(2) 新たな教育プログラムを開発する理由

新たな教育プログラムを開発する背景としては、以下の点が挙げられる。

- ①学習習慣を身に付ける環境がなかった学生がいる。
- ②それまでの学校生活が合わず、いわゆる「不登校経験」を持つ学生がいる。
- ③「社会的貢献ができる仕事に就きたい」という気持ちが強い。
- ④精神疾患や発達障害の診断を受けている学生がいる。
- ⑤他者とのコミュニケーション等に悩み、卒業後、国家試験受験に必要な実務経験1年を積むのに苦労する学生がいる。
- ⑥遠方からの入学者の内、地元に戻って就労する学生が少ない。
- ⑦専門学校が地域社会に関わる機会がこれまでの実践では少なかった。
- ⑧特別支援学校高等部を卒業した生徒の進学先が求められている。

様々な背景を持つ学生に対し、専任教員は教員自身のソーシャルワーカーという専門性を生かし、学生が卒業し就労していけるよう努力している。しかし、専門学校3年間だけで対応することは学生にとっても負担になっており、中途退学者や資格取得できない者もあり、現時点でも各学年2名ほどの休学者が存在している。これらの課題解決のためには、高等学校・特別支援学校・行政・企業の連携協力が必要である。

(3) 開発する教育プログラムがどのような点で課題を解決することが可能であるのか。

上記のこれまでの教育内容では対応できない課題を次の3つに分類することができる。

A: 地域活性化に取り組む高校との連携(①、②、③、⑥、⑦)

- ・農業実習を行う連携農園がある余市町唯一の公立高校と連携する。
〔北海道余市紅志高等学校(全日制総合学科)〕
- ・地元の余市町にもコンソーシアムに参加していただき、高専民公で地域活性化を目指す教育課程と企画を実行していく。

B: 不登校・発達障がい積極的に取り組んでいる高校との連携(①、②、③、④、⑤)

- ・本校に進学実績があり、農福連携ソーシャルワークコースへの入学希望者がいる。
〔市立札幌大通高等学校(定時制・午前午後夜の3部制)〕
- ・通級指導教室がある札幌市唯一の高校における専門学校教員による早期からの授業参加

C: 高等支援学校との連携(①、②、③、④、⑤、⑧)

- ・高等支援学校には、発達に偏りがあるものの知的には高い生徒も在籍している。
〔北海道札幌あいの里高等支援学校〕

これらの学校と高専一貫カリキュラムで連携することで、早い段階から SST(ソーシャルスキルトレーニング)や社会人基礎力の育成ができ、高専6年間または7年間の一貫教育で持続可能な社会に貢献する人材を育てることができる。

第3節 事業の実施期間

令和4年7月5日から令和5年3月1日まで

第4節 事業の推進体制

本事業の推進体制につきまして、四者によるコンソーシアムの構築と高等学校の連携協力校、行政機関の支援協力、企業の連携協力を含め16箇所との推進体制を整えた。

構成機関及び構成員

(1) 高等学校

	名称	役割等	都道府県名
1	北海道余市紅志高等学校	コンソーシアム参加	北海道
2	市立札幌大通高等学校	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道余市養護学校	連携協力校	北海道
4	市立札幌豊明高等支援学校	連携協力校	北海道
5	市立札幌みなみの杜高等支援学校	連携協力校	北海道
6	北海道札幌あいの里高等支援学校	連携協力校	北海道

(2) 行政機関

	名称	役割等	都道府県名
1	北海道余市町	コンソーシアム参加	北海道
2	北海道教育庁高校教育課	コンソーシアム参加	北海道
3	北海道総務部学事課	支援協力	北海道
4	北海道農政部農業経営課	支援協力	北海道

(3) 専門学校

	名称	役割等	都道府県名
1	学校法人西野学園 札幌心療福祉専門学校	コンソーシアム参加 プロジェクト代表校	北海道

(4) 企業

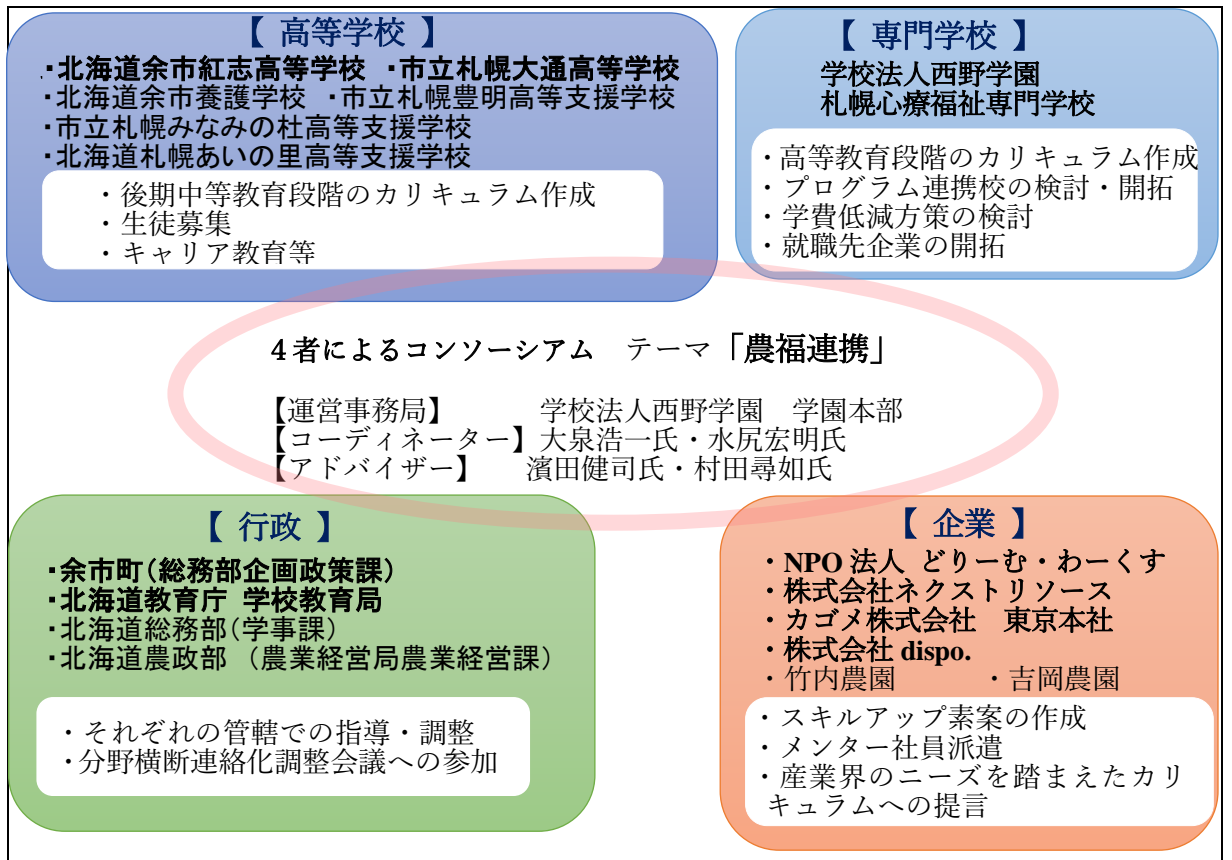
	名称	役割等	都道府県名
1	特定非営利活動法人どりーむ・わーくす (就労継続支援B型事業所/水尻農園)	コンソーシアム参加	北海道
2	株式会社ネクストリソース	コンソーシアム参加	北海道
3	株式会社 dispo.(就労継続支援 B 型事業所)	コンソーシアム参加	北海道
4	カゴメ株式会社 東京本社	コンソーシアム参加	東京都
5	竹内農園	連携協力	北海道
6	吉岡農園	連携協力	北海道

第2章 実施概要

第1節 実施経緯

- ・本事業では、令和4年7月～令和5年2月までに「コンソーシアム会議」「カリキュラム会議」を含む、関係機関との会議及び打ち合わせを行い、当該事業の目標達成のための体制整備や、具体的なプログラム開発を行った。
- ・「就業人口減少・高齢化」という課題を抱える農業界と、障がい者や高齢者の社会貢献の場の創出という課題を抱える福祉業界が連携することで、両業界の課題を解決するとともに、そのことによって地域の活性化を目指す取り組みである「農福連携」が国や各地方自治体等によって推進されているが、両業界が互いのことを知らないことで両者のマッチングが難しい現状にある。そのことから両業界の橋渡しができるコーディネーターの役割を担える人材の育成が求められており、福祉専門職養成校の立場から、「農福連携の知識や技術を持った」福祉専門職の育成を目指すための体制づくり、カリキュラム開発を行った。来年度以降も、より多くの農業関連団体や福祉関連団体、行政等を協力機関として迎え、より実効性の高いカリキュラム開発を行っていく予定。

第2節 実施体制図



第3節 会議議事録

第1項 コンソーシアム会議

第1回コンソーシアム会議 議事録

日時:令和4年7月5日(火) 15:00~16:30

場所:学校法人西野学園 札幌医学技術福祉歯科専門学校 2Fコミュニティルーム

参加者:23名…詳細別紙(欠席2名)

司会進行:岡積義雄(学校法人西野学園)

開会宣言

司会(岡積)より開会が宣言された.web 会議であることから質疑応答に関して諸留意事項が伝えられた。

1.理事長あいさつ(前鼻英蔵)

…参加者全員に対し、昨年度までの御礼と今年度の事業開始に先立ち協力の依頼がなされた。

2.令和3年度の活動報告について(飯島英幸)

…令和3年度の活動報告がなされた。

3.今後の事業予定について

(1)5年間の全体像について(飯島)

…5年間の全体像について説明がなされた。

また、新しく「(仮称)農福マイスター」資格創設の構想を視野に入れた旨、説明があった。

(2)令和4年度の取り組みについて

…今年度の取り組みについて説明がなされた。

・北海道農政部(井出氏)より農福連携事業に関する以下の補足説明があった。

…農政部より農福連携に関する研修事業を実施するにあたり、研修事業について福祉事業所向けと農業関係者向けの座学研修を1回ずつ予定している。11月の農業関係者向けには西野学園の協力(講師派遣)の下、「障がい者と障害者福祉サービスについて」を実施予定。実践農場を使用したフィールドワーク研修(収穫体験、農作業の細分化など)を企画している。

参加者は農福関連に取り組む初心者を対象にしている。

(3)「地域活性化のための農福連携人材育成事業」アンケートの実施について(飯島)

…高校生対象および福祉事業所を対象として実施予定。

(4)連携授業について

1)余市紅志高校との連携について(佐藤誉匡)

…余市紅志高校との連携について説明がなされた。

ミニバリアフリー農園を試験演習的に作成し、高齢者に実際使用してもらい、課題を再検討する試みを行っている。

2)札幌大通高校等との連携について(幡直人)

…札幌大通高校等との連携についてに説明がなされた。

ワークショップとして背景の違う者同士がひとつの物を共同制作する試みを初回に実施し、一作業の大切さ、共同作業の大切さを体験。2回目以降は、実際の農園で農作業の難しさ、分割された作業の特性を体験し、分割作業のマッチングにより共同作業が成立することを学習した。学生自身の気づきから「みんなの得意分野を集めることで何を得的のかが大事」との実感を得た。

司会より会議が予定時間を延長していることから、次の議題4に移行して最後に質疑応答とする旨の説明

がなされた。

4.参加団体からの意見

○株式会社 dispo.(三上氏)

…昨年度の報告がなされ、事業活動がより具体的に進行している状況が理解できた。今後、リアルタイムで情報共有できると良いと思う。

○北海道教育庁教育局高校教育課(田原氏)

…本日の事業報告は、当課において今年度に「新しい高校作りに対する指針」をつくるにあたり、とても参考になる。また、地域別検討会議も予定されており、このような事例を共有できれば参考とするところである。

○北海道農政部農業経営局(井出氏代理)

…人材育成研修では西野学園にお願いしている。農福関連事業を進めるにあたり、どのような人材を育成すればよいかなどは共通の課題と思うところであり、西野学園でのフィールドワークコースや農福マイスターなどの取り組みは、広報する上でとても心強く感じている。道として協力できる事は実践していきたい。

○余市紅志高校(生田氏)

…本校の課題として農福連携に取り組んできたが、今回は大がかりな事業の一環として参加した。本校では、地域で障がいを持つ人が、どのように働き、どのように生活していくのかという北後志の地域課題に取り組んできた。この課題に地域やの地域の養護学校とも連携し、取り組んでいくことが本校の存在意味でもあるので今後も協力していきたい。

○余市町総務部企画政策課(芳賀氏)

…異分野の交流は難しいところがあるが、よく実践していると思う。今後も地域からサポートしていきたい。

○みなみの杜高等支援学校(田中氏)

…本校の役目として、働く側の支援として心療校の生徒が支援策を考えられる、感じるなどの実践の場として活用してもらいたい。

○余市養護学校(出口氏)

…本校の生徒たちは一般的には、できないことも多く支援されることが多いが、得意分野を生かして、共生の中で発揮できる地域のなかで理解しあえる社会を目指したいと思う。

…今後、取り組みたい事について

相互的な探求の時間として、多様な人々との共同の中から物の見方、考え方を学ぶ姿を具現化していきたいと考える。学習の成果が2校間に終始することなく地域社会に貢献できる(だれでも参加できる地域社会の創成を目指したい。

○札幌豊明高等支援学校(小山氏)

…具体的な内容から全体像が見えてきた。今後、参加することで生徒にプラスになることやこの事業に高校側からプラスになる事を提供出来るかが問われる。

○札幌あいの里高等支援学校(西牧氏)

…本校を卒業後、農業について学ぶことで、選択肢の一つに、お世話をしてもらおう立場からお世話する側に回ることは、大変意義が深い。全国的なモデルとなる事を期待する。

○コーディネーター(水尻氏)

…農業に関わる人のワクワク感を工夫することが本事業にコーディネーターとしてかかわることが大事な要素と考える。

○コーディネーター(大泉氏)

…ネットワーク作りが肝要、行政関係、学校関係に加え、今後は農業関係、企業関係と連携していくことが必。特にビジネスとしてもものを作る、物を売るといった体験から学びの機会を提供したい。

5.次回予定

…次回については事務局から後日連絡とする。

司会より本会議進行に関する謝辞と閉会の宣言をもって終了。

(別紙)参加者名簿

組織	所属	氏名(敬称略)	備考
コンソーシアム会議(コーディネーター)	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻 宏明	対面
//	株式会社ネクストリソース	大泉 浩一	対面
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上 智史	対面
//	北海道教育庁学校教育局	田原 勇人	代理 web
//	北海道農政部農業経営局	井出 恵子 他1名	Web
//	北海道余市紅志高等学校	生田 仁志	Web
//	余市町総務部企画政策課	芳賀 昌史	Web
カリキュラム会議	市立札幌みなみの杜高等支援学校	田中 進一	Web
//	北海道余市養護学校	出口 博昭 他1名	代理 web
//	市立札幌大通高等学校	三関 直樹	欠席
//	市立札幌豊明高等支援学校	小山 学	Web
協力機関	北海道札幌あいの里高等支援学校	西牧 孝徳	Web
//	いきいきファーム	吉岡 宏直	欠席
事業代表機関	学校法人西野学園	前鼻 英蔵	
事業責任者	//	熊谷 修司	
事務担当者	//	岡積、市川、万行、長井	
事業担当者	//	飯島、佐藤、幡、酒井	

令和4年度 第2回コンソーシアム会議 議事録

日 時: 令和4年11月9日(水) 15:30~16:45

場 所: 学校法人西野学園 札幌医学技術福祉歯科専門学校 2Fコミュニティルーム

司会進行: 岡積義雄(学校法人西野学園)

出席者: 対面 17 名、web 7 名、計 24 名(詳細別紙)

1. 校長あいさつ

熊谷修司(札幌心療福祉専門学校校長)

2. 令和4年度の活動報告

(1) 連携授業について

1) 余市紅志高校との連携について

佐藤誉匡(精神保健福祉科)

2) 札幌大通高校等との連携について

幡 直人(精神保健福祉科)

上記、1)2)について各担当者より説明がなされた。

▷濱田氏(アドバイザー: 東海大学 教授)

・支援学校生への効果はいかがか。

(幡)グループワークの中で支援学校生が自己の役割を果たすことで自信獲得に繋がった様子が見られた。

▷濱田氏

・高齢者への呼びかけ方法はいかがか。

(酒井)通所利用者と高校側の連携が元々あったので円滑に導入できた。利用者は要支援レベルの虚弱高齢者である。

・園芸療法では、大阪高槻市で通所利用者の試みがある。その中では力仕事を男性陣が主役の活躍を見せていた。厚生省も介護予防を主眼に高齢者に対する農福連携を始めている。今後モデルとして各自治体と協働しておこなうことで高校生を媒介した内容が生きてくる。

(2) 参考となる取り組みの報告(現地視察)

1) よこすか・みうら工房

2) カゴメ野菜生活ファーム

飯島英幸(精神保健福祉科)

3) 京都府庁障害支援課

4) さんさん山城(就労継続支援 B 型)

酒井 啓(精神保健福祉科)

上記、1)~4)について各担当者より説明がなされた。

(3) 有識者会議代表の視察訪問について

高津尚悟(日経 BP 総合研究所)

・専門学校と高校がコミュニティを形成して授業を行っている点を高く評価している。

・アドバイザーから意見があったように専門学校生や高校生への効果検証はとても良い。

・事業開始から 2 年目であるが広くひろめてほしい。その際カリキュラムを選択式にするのか必修にするのかという検討をおこなってもらい、他高校へも、各自治体へも働きかけてほしい。

・12/5 のセミナーでは、実証授業の成果報告とともに、どのようなケースでどんな効果があったのかについて伝達していただきたい。

(4) 高校生向けのアンケート報告について

大泉浩一(コーディネーター)

高校生向けのアンケート説明がなされた。

▷結果の概況としては、社会福祉への興味関心は 35.9%、社会福祉士への興味関心は 17.3%、農福連携の認知度は全くわからないが 89.0%、興味ありが 19.9%であった。卒業後の進路について複数回答だが、大学進学が 91.4%、専門学校進学が 16.1%。職業選択では医療従事者 30.5%、公務員が 26.2%、教育機関が 18.4%と高く、福祉従事者は 3.3%と低い結果である。以降クロス集計を加味しながら、報告書をまとめる。

(5) 今後の取り組みについて

飯島英幸(精神保健福祉科)

① 連携授業の振り返りと来年度の計画を立案

② フィールドワークコースの開講準備、カリキュラム検討

③ 施設・事業所向けアンケート実施

上記①~③について説明がなされた。

3. 参加団体から

…コンソーシアム会議参加団体からのご意見

▷水尻氏(コーディネーター)

・高校生、専門学校生がいかにワクワクできるか、楽

しんで学習できるかがキーポイントとなる。

▷大泉氏(コーディネーター)

・札幌圏域の連携授業で流通～販売についてマルシェの活動を支援しているが、水尻氏と同様にいかに楽しんで行なうことができるかを重要にしている。また高校生の意識調査結果を基に高校生が求めるニーズについて検討したい。

▷三上氏((株)dispo 代表)

・B 型事業所運営/八百屋を運営している。大泉氏同様、マルシェで協力している。この経緯から良い経験を共有した。リアルタイムに情報共有できると良いと思う。今後の展開ではマルシェを通して学生が農業のインプットとアウトプットを体験することができるよう協力したい。

▷山城氏(北海道教育庁学校教育局高校教育課)

・イベントに終わらずことなく、この事業の本質である教育プログラムの開発の意味では事前指導の徹底や授業のねらいの明確化、振り返りとその後の活用方法など教育的視点をもって取り組んでほしい。

…カリキュラム会議参加(連携校)からのご意見

▷三関氏(市立大通高等学校 副校長)

・参加数は少ないが、本校の生徒が参加している場面を見せてもらい、緊張から最初こわばっていた生徒の表情が和らぎ楽しく参加できている事が実感できた。本校生徒の背景には様々な背景があり、指導ではなかなか難しい側面もあるが、専門学校と連携していくなかで社会への間口の確保について検討していきたい。

▷生田氏(余市紅志高校 校長)

・高齢者が生きがいを持つこと、地域で卒業した高校生が地域に貢献できることを主に考えている。
・このことを専門学校と連携協力することで改善できることはないか模索している。

▷西牧氏(北海道あいの里高等支援学校 校長)

・生徒へ呼びかけ、積極的に参加できている事をうれしく思う。将来の見通しを持つ事が難しい生徒に対して専門学校の学生を含め、社会的なインクルーシブな支援が生まれることに期待している。

…行政機関からのご意見

▷井出氏代理(北海道農政部農業経営課 各務氏)

・コンソーシアム会議のメンバーには農福連携の強化事業に協力をお願いしている。また、他県の取り組みについては視察研修報告から得られたが、本道で実施可能なことについては検討していきたい。

…アドバイザーからのご意見

▷濱田氏

・日頃の事業運営に敬意を表す。

・農福連携について、それぞれ農の広がり、福の広がりがあるが、本日は教育分野にも広がりを持たせた農福教-教連携が伺い知れた。特に教育機関同士のつながりに期待する。

・農水省ではユニバーサル農園推進事業が展開されている。この事業はいかに多様な人が農園を取り巻いて共生できるかが課題である。今回ここに教育分野も含めた新しい事例として考えられる。

・北海道独自の農福教連携モデルが創成されることを期待する。

4. 次回予定

2月上旬位に予定

～終了

(別紙)参加者名簿

組織	所属	氏名	備考
コンソーシアム会議(コーディネーター)	特定非営利法人どりーむ・わーくす	水尻 宏明	
//	株式会社ネクストリソース	大泉 浩一	
コンソーシアム会議	株式会社 dispo.	三上 智史	
	カゴメ株式会社 東京本社	鈴木 隆之	リモート参加
//	北海道教育庁学校教育局	山城 宏一	リモート参加
//	北海道余市紅志高等学校	生田 仁志	
// (アドバイザー)	東海大学 文理融合学部経営学科	濱田 健司	
カリキュラム会議	市立札幌みなみの杜高等支援学校	田中 進一	
//	北海道余市養護学校	辻山 しのぶ	リモート参加
//	市立札幌大通高等学校	三関 直樹	
//	市立札幌豊明高等支援学校	小山 学	リモート参加
協力機関	北海道農政部農業経営局	井出 恵子	リモート参加
	北海道あいの里高等支援学校	西牧 孝則	リモート参加
//	いきいきファーム	吉岡 宏直	リモート参加
事業代表機関	学校法人西野学園	前鼻 英蔵	
事業責任者	//	熊谷 修司	
事務担当者	//	岡積、市川、万行、長井	
事業担当者	//	飯島、佐藤、幡、酒井	

第2項 カリキュラム会議

会議名	カリキュラム会議	
開催日時	令和4年12月 14日(水) 9時30分 ~ 16時00分	
会場	札幌心療福祉専門学校	
参加者	委員	大泉 浩一(コーディネーター) 水尻 宏明(コーディネーター) 熊谷 修司(札幌心療福祉専門学校) 佐藤 誉匡(札幌心療福祉専門学校) 幡 直人(札幌心療福祉専門学校) 酒井 啓(札幌心療福祉専門学校) 飯島 英幸(札幌心療福祉専門学校)
		参加者 7名
会議概要	<p>農福連携ソーシャルワークコース(文部科学省委託事業)」の方向性について 全体コンセプト 「農×福が君の未来のフィールドを拡げていく！」 ・楽しい学び→グループ学習・現場実習でみんなで楽しく学ぶ →プロフェッショナルたちから学べる授業 ・目指せる資格→社会福祉士(国家資格)をはじめ目指す資格多数 ・多彩な未来→農福連携を支えるプロフェッショナルたちが未来の君</p> <p>1. 誰に ①札幌市立高校(大通高校以外にも、連携授業参加者(キャリア探求の授業)を募る) まずは、個別に藻岩高校、開成高校にあたる。 ②農業高校、総合学科がある高校の女子 調査・分析していただいた農業高校へのアンケート調査から、農業高校在籍者にも福祉に興味がある生徒や、農家だけでなく加工業等に興味がある生徒が多い事が分かり、「ペルソナ」として女子生徒を設定したため。 ③母子世帯等の低所得世帯 ※本校在籍中の学生の家庭で、母子世帯が多い状況が見られ、本校が3年制で学費が少なくすむこともあり、低所得世帯が本校を志望する傾向にあると思われることから。</p> <p>2. 何を ①本校の授業や農福連携の楽しさ ②農福連携の幅広さ</p>	

③学費助成制度など(※できるか否かをまずは要検討・要相談)

3. どのように

①学園のオープンキャンパスとは別に、2～3回/年の農福連携ソーシャルワークコースに特化したオープンキャンパスを実施する。「楽しい」「おいしい」などを感じられる体験メニューを用意するとともに、本校校舎内に留まらず、積極的に外部の現場に行く内容。

②大通高校や余市紅志、あいの里高等支援等の連携高校等出身者ということではなく、①のオープンキャンパスをスタンプラリー制とし、3つのスタンプを集めて入学し、農福連携ソーシャルワークコースを選択した学生には学費の助成を行うなどの制度創設を検討する。

4. 北海道庁との連携について

今年度、北海道農政部が行った「農福連携スタートアップ研修」に本学科教員が講師として協力した実績もある。

今回の「農福連携スタートアップ研修」は上記の農業版ジョブコーチに対する準備の意味合いもあつての今年度限りの開催予定のものであるが、農福連携の周知を行ったり、適切な相談窓口へのつなぎ役等を担うようなイメージの「農福連携サポーター(仮)」というようなものの養成を本校のカリキュラムで行い、その修了証を北海道農政部からもらえないかを相談していく。現在の農政部担当者は個人的に前向きな印象もあるため、異動してしまう前に形作っていく必要があるか。今回の札幌圏域連携授業(科目名:フィールドワーク演習Ⅰ)を一般にも公開し、それを農福連携ソーシャルワークコースの学生と一緒に受講してもらえる形とするか。

5. 今後の検討事項

①農福ソーシャルワークコースの授業について、受講者を一般や他学年にも広げることができるか。

来年度と同コース選択者は現在1名のみである。仮にその学生が欠席した場合、その日の授業自体ができなくなってしまう。

また、「皆でわいわい楽しく」という全体像にも合致しないものとなってしまう。

全ての授業ではないかもしれないが、複数名での受講が望ましい科目について、どう受講者を広げていくか。

②農福連携ソーシャルワークコースの細かい調整役について

外部講師等をお願いしていく科目も多くあり、また、授業を外部の農園に出向いて行うことも多くなる予定のことから、送迎や細かい調整等を現状の専任教員だけでは全てを賄えない。講師依頼や授業内容の調整等は文科事業コーディネーターのお二人に頼る部分が多くなるが、謝礼金支払い、日程調整等の細かい調整業務を含め、コーデ

	<p>イナーターの指示を受けて実働する人員が必要となる。</p> <p>この人材を雇うことができるか。</p> <p>以前、農業高校 OB の教員を雇用する話が挙がっていたが、その代わりとして上記人材を雇うことが可能か。</p> <p style="text-align: right;">(文責 飯島 英幸)</p>
--	---

第 3 章 今年度の事業及び教育プログラムの内容

第 1 節 北海道余市紅志高等学校等との連携(令和 4 年度)

第 1 項 連携内容

授業テーマ:誰もが安心安全に作物を育てることができる農園を作る(バリアフリー農園の造園)

授業回数:合計 15 回(高等学校の科目『総合的な探究の時間』2 時間連続授業(100 分)で実施)

受講学生:高等学校生 4 名(3 年生)、専門学校生 15 名(総数)

月 日	授業内容	場所	授業担当(役割分担)
4 月 1 9 日 ① 4 月 2 6 日 ② 5 月 1 0 日 ③ 5 月 1 7 日 ④ 5 月 2 4 日 ⑤ 5 月 3 1 日 ⑥ 6 月 1 4 日 ⑦ 6 月 2 1 日 ⑧	<ul style="list-style-type: none"> ・バリアフリー農園と育てる作物の検討 ・農園づくり(路面整備、装置作り、看板作り) ・土づくり、種まき、定植、作物の手入れ ・収穫した作物の調理を検討 	余市紅志高等学校・農場	札幌心療福祉専門学校 専任教員 1 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
6 月 2 8 日 ⑨	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者を招き収穫体験 1 回目 ～ 感想と課題抽出 高齢者参加者:18 名 施設職員:4 名 	余市紅志高等学校・農場	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 2 名
7 月 1 2 日 ⑩ 7 月 1 9 日 ⑪ 8 月 3 0 日 ⑫ 9 月 1 3 日 ⑬ 9 月 2 0 日 ⑭	<ul style="list-style-type: none"> ・バリアフリー農園の改善検討 ・農園の改修(路面整備、新たな装置作り) ・土づくり、種まき、作物の手入れ 	余市紅志高等学校・農場	札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 2 名

<p>9月21日 ⑮</p>	<p>・高齢者を招き収穫体験 2 回目 ～ 感想と課題抽出 高齢者参加者：17 名 施設職員：4 名</p>	<p>余市紅志高等学校・農場</p>	<p>札幌心療福祉専門学校 専任教員 2 名 余市紅志高等学校 教員 2 名</p>
----------------	---	--------------------	---

完成したバリアフリー農園



高齢者を招き収穫体験 2 回目



第 2 項 成果

連携授業の開始前に一度交流授業を実施したことにより、学生同士が打ち解け合い協力し共に学ぼうとする姿勢が確立されていたため、特別支障なく開始することができた。また、下記の目標を掲げ授業を展開した。

- ① 本授業に参加した高等学校生および専門学校生の成長
 - ・バリアフリー農園の研究を通して、地域の現状とニーズを理解し、地域貢献や地域の活性化を目指す姿勢を身に付ける。
 - ・「農福連携」を軸とした共生社会実現に向けての課題抽出と、必要とされる取り組みの提案を行える力を培う。
 - ・「農福連携」の多様性について、自主的に考察できるようになる。
 - ・失敗や成功体験を通して、目標達成に向けて取り組むうえで自分の考えを伝えることや他者と協働する重要性を理解する。
- ② 本授業に参加した高等学校生が福祉に関心を持ち、本校への入学を目指し、高等学校から連続した学習を進め、専門職を目指す者が現れること。

①に関して、生徒および学生の成長が十分にうかがえた。特にバリアフリー農園の協同造園の過程において、高等学校生は専門学校生や地域住民などとの交流により、自分の考えを分かりやすく話すコミュニケーション能力や協調性が向上された。また、専門学校生との直接的な関わりにより、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像を深めることもできた。専門学校生は、特にリーダーシップ力が向上された。高等学校生、専門学校生共に、課題を発見し解決する能力や、計画性を高めいつまでに何をどのような形にしていなければならないのか見通しを持った自主的な行動、地域貢献や共生社会の実現を意識し自分ができることは粘り強く取り組もうとする使命感や責任感が向上された。

②に関して、本校への入学には至らなかったが、高等学校生 4 名 (3 年生) の内 2 名が本校への入学を検討している。1 名は本校のオープンキャンパスに参加、もう 1 名は入学を強く希望していたが家族の反対で断念となった。

課題として、専門学校生の疲労の増大により参加学生を固定化できなかつた点があげられる。毎週片道、約 1 時間のバス移動が想定していた以上に学生の負担となり、次年度はリモート授業を活用し改善する予定である。

教員間においては良好な関係性を築くことができ、授業実施日以外においても適宜連絡を取り合い、共通認識を持ち授業展開することができた。また、高校側から次年度の連携授業に関して『総合的な探究の時間』での連携だけでなく、他科目での連携の依頼もあり実施する運びとなっている。

次年度の『総合的な探究の時間』における連携授業については、今年度製造した装置を高齢者施設に持ち込む『出張型バリアフリー農園の造園』をテーマに掲げ展開する予定である。連携授業回数は前述に記載した新たに実施する他科目での連携授業を含み、今年度同様、合計 15 回である。

第2節 札幌圏域の高等学校等との連携(令和4年度)

第1項 連携内容

授業テーマ:農業の栽培から収穫、加工、販売までの流れを体験するとともに、各工程において誰もが力を発揮できる環境を整える視点を養う

授業回数:合計 7 回(市立札幌大通高等学校は「キャリア探求」の科目として単位認定を行う)

受講学生:市立札幌大通高等学校生 3~7 名、北海道札幌あいの里高等支援学校生 1~3 名、本専門学校生 3~7 名(各回)

月 日	授業内容	場所	授業担当(役割分担)
5月21日	・オリエンテーション ・演劇ワークショップ	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 専任教員2名 北海道演劇財団 演出家 1名
6月18日	・農作業体験(畑作業) ・農作業の細分化と各参加者とのマッチング	農場	札幌心療福祉専門学校 専任教員2名 合同会社竹内農園 代表 社員1名
7月2日	・農作業体験(発送作業) ・流通についての理解 ・魅力的な売り場づくり	農場 札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 専任教員2名 合同会社竹内農園 代表 社員1名 株式会社感動いちば 社 員1名 市立札幌大通高等学校 教員1名
9月3日	・利益の出し方と、労働者(障害者等)への工賃の関係について ・魅力的な売り場づくり(POPなど) ・売り物の仕入れ相談(作りてに魅力を聞き出す)	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 専任教員2名 株式会社ネクストリソー ス代表1名 株式会社dispo. 社員 4名
9月17日	・農福マルシェの開催	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校 専任教員4名

			株式会社ネクストリソース代表 1 名 札幌市中央区社会福祉協議会職員 2 名 市立札幌大通高等学校教員 1 名
11月5日	・農福商工連携について (野菜の加工、マーケティング、商品企画など)	札幌心療福祉専門学校	札幌心療福祉専門学校専任教員 2 名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長 1 名 株式会社ネクストリソース代表 1 名 株式会社カゴメ 社員 3 名 市立札幌大通高等学校教員 1 名
12月10日	・農福連携の6次化について (6次化の実践者からの講義、ピザを作って食べる)	札幌医学技術福祉歯科専門学校	札幌心療福祉専門学校専任教員 4 名 NPO 法人どりーむ・わーくす理事長 1 名 株式会社ネクストリソース代表 1 名 Pay forward 職員 1 名 ペルル(飲食店) 店長 1 名 市立札幌大通高等学校教員 1 名

第2項 成果

各授業終了時に振り返りを兼ねた学生・生徒へのインタビュー、教員からの観察で見えてきた成果について、市立札幌大通高等学校の生徒については、①福祉に関する理解の向上、②自身のキャリア形成についての選択肢の拡大、③身近なキャリアモデルの獲得などが認められた。

次に北海道あいの里高等支援学校の生徒については、④他者との関わりに前向きになった、⑤自信を持って自分の意見を言えるようになったなどが認められた。

最後に本校、札幌心療福祉専門学校の学生については、⑥リーダーシップの向上、⑦

人前での発表に対する積極性の向上、⑧ミクロな「福祉」に留まらない広い視野の獲得などが認められた。

以下、それぞれの成果について詳細を記載する。

①福祉に関する理解の向上

本授業参加前に高校生らに「福祉」や「福祉の仕事」に対するイメージを聞いた所、「介護」や「お年寄りを助ける」などの意見が大部分であった。本授業を受講している中で、「利用者さんの助けになるように働きかける」や、「幅広い仕事」「対象者の得意なことを見つけて、その力を発揮できる場を調整したり、苦手な面はフォローしたりする仕事」などといった意見が聞かれるようになり、福祉の仕事に対する理解の深まり、福祉援助職の視点の獲得等に繋がった。

また別の生徒からは、「元々、福祉職の人は「怖い」というイメージがあったが、この授業を通してすごい「良い人たちなんだ」「自分も目指したい」と思えるようになった」と言う生徒もあり、福祉職に対するイメージがポジティブなものに変わった生徒もいた。

②自身のキャリア形成についての選択肢の拡大

本授業では福祉専門職の他に、演劇演出家、農家、問屋、企業コンサルタント、食品加工会社職員、料理人など、様々な職種の方にそれぞれがどんな経緯で今の仕事をしているのか、現在どんな思いを持って、どんな業務をしているのか等についてもご講義いただいた。

そのような話を聞いたことで、「農家は畑作業だけでなく、経理からトラクターの整備、売場場所の確保まで色々仕事しているのが分かった」「(株式会社カゴメのトマトジュースを授業内で飲み比べして)同じトマトジュースでも、そのターゲットや意図でこんなに味が変わることに驚いた」「プロの料理人がかっこいい。ピザ最高。」などの声が聞かれた。実際に、近くで様々な社会人の「生」の声を聞く、技を見るなどの機会は、具体的な職業イメージの定着に繋がり、自身のキャリア形成について考える良い材料になったと思われる。

③身近なキャリアモデルの獲得などが認められた

今回の連携高校である市立大通高等学校出身者が本専門学校に在籍しており、その学生と同高校の生徒らが本授業を通して関係性を築いていき、休憩時間や移動のバス車中などで様々な会話をするようになっていった。高校の先輩として、高校の授業についてアドバイスをするなどの他、どのようにして進学先を選んだのか、どんな専門学校生活なのか、どんな勉強をしているのか等を専門学生が後輩である高校生に伝えている場面が見られ、高校生からも専門学校生に学生生活等について質問をするようなこともあった。高校生らにとって、例えば教員等の「大人」より身近な「先輩」と接する中で、当面のモデルケースを得ることに繋がったと思われる。

④他者との関わりに前向きになった(※高等支援学校生についての本授業の成果については、「高等支援学校生」というよりも、参加した個々の生徒に見られた成果という意味合いが強い)

ある生徒は、母親と一緒に授業に参加していた(初回の演劇ワークショップ)。演劇ワークショップでは、様々な方法でのコミュニケーションを試みたが(参加者が円になり、イメージ上の風船を受け渡すことや、相手の名前を言ってからイメージのボールをその相手に投げ渡すなど)、当初はその生徒は母親にやり方などを伺うようにしながら参加しており、他参加者とのコミュニケーションに、一旦母親を挟むような形となっていた。しかし、徐々にワークショップが進むにつれ、集団の凝集性が高まったこともあってか、本専門学校生と直接やりとりをするようになり、その学生からのアドバイスを受けながらワークショップに参加するようになっていった。

上記生徒については、1 回目の演劇ワークショップのみの参加となったことから、この授業内の変化がその他の生活面等まで般化されたかは不明であるが、授業開始前と開始後の他者との関わり方に、母親を介するか否かの変化は大きいものがあった。

全 7 回の授業に継続して参加した別の生徒のケースでは(途中 1 回は体調不良で欠席)、授業のプログラム内の他者との関わりを極端に避ける様子は無いものの、休憩時間等は一人になることを望む生徒がいた。昼食時などは、他の生徒・学生らがいくつかのグループで一緒に食べていたものの、この生徒は一人になれる場所を探して少し離れて食べる様子があり、我々教員側も一人になれる場所を確保できるよう配慮していた。2 回目の授業(農場での農業体験)時に、最後のまとめを行う前に、生徒・学生だけで雑談している時間帯があった。そこで上記生徒は会話に参加する様子は見られていなかったものの、後で本人に話を聞いたところ、「周りの人たちが話しているのを聞いていて楽しかった。久しぶりに人と一緒にいるのが楽しいと思えた」という声が聞かれた。

その後(3~6 回目の授業)も休憩時間等、一人で過ごす様子が見られ経過していたが、最後の 7 回目の授業では、本人から「今日で最後なので、お昼ご飯を皆で一緒に食べたい」という声が本人から聞かれ、他生徒・学生と昼食を共にした。

さらには、昼食を共にした学生とは別の本専門学校生に対して「先輩」として相談事なども一部するようになっていたようである。

以上のことから、今回本授業に参加した特別支援学校生にとって、他者との関わりに前向きに取り組めるようになる一つのきっかけとなったと推察される。

⑤自信を持って自分の意見を言えるようになった

授業回数を重ね、高校生や専門学校生と同じ班でグループワークを行う中で、自分が役割を担い、意見を言い、それが班の中で認められる経験を持つことで、自信を持って自分の意見を言えるようになっていった様子が見られた。

通算 5 回目の授業(農福マルシェ)の際には、当初指示待ち傾向にあった生徒が、専門

学校生らと一緒に商品の POP 作成を行う中で、「見やすい」「うまい」などのフィードバックを周りからもらう中で、進んで POP 作成を行う様子が見られるようになった。

さらに、通算 6 回目の授業(商品開発)のグループワークの際には、「トマト専門店」を企画した班で、その店名を考えていた際に、特別支援学校の生徒が午前の講義の中でトマトの原産地を聞き、その原産地の言語をスマホで調べ、その言語でトマトに関連した言葉を店名とすることを提案し、それが他班員にも認められ採用されることとなった。さらに、その店名を商品企画の発表用模造紙にレタリングすることも担当することとなった。

生き生きと自分の意見を他者に伝え、レタリングなどもする姿は、授業当初ではなかなか見られなかった姿であった。

⑥リーダーシップの向上

本専門学校では、日常の授業の中でも多くのグループワークを取り入れ実践している。その中で、グループワークの進行や発表など、誰がリーダーシップを発揮するのが曖昧なまま進み、進行がスムーズにいかないことも多い。また、進行する者がある程度はつきりする場合も、特定の学生が行うことが多い状況である。

しかし、今回の連携授業を行う中で、高校生や高等支援学校生と一緒に作業やグループワークを行うとなった際には、やはり「年長者」や「先輩」という立場になることもあってか、やはり「自分がやらなければ」という意識が働く場面が多く、リーダーシップを発揮する学生が多かった。

普段の専門学校生同士のグループではなかなか表立った発言等はない学生も、積極的に発言や周りの生徒・学生へ声掛けをし、気配りを見せる様子は、我々教員から見てもその学生の新たな一面を知る一つの場面でもあった。また、ソーシャルワーカーという対人援助の専門職として、他者に積極的に関わっていくという態度は必須であるが、そういったことから考えても非常に良い訓練の場になったと思われる。

⑦人前での発表に対する積極性の向上

本専門学校生の中には、⑥とも通ずるが、グループワーク等で話した内容を全体に対して発表することなど、「人前で発表すること」に対して苦手意識を持つ学生は多い。

本専門学校では、ソーシャルワーカーの現場実習を終えた後、そこで何を学んだかを報告書にまとめ、それを学生や教員の前で発表するという「実習報告会」が行われている。その報告会は学生らもスーツを着用し、発表時間も計測してオーバーするようならチャイムで知らせるなど、普段の学校の雰囲気と違い、フォーマルな雰囲気のものである。そんな緊張感のある報告会で人前で発表するということができず、別日に個別で行うこととなった学生もいた。

しかし、そんな人前で話をするに苦手意識を持つ学生も、高校生らと一緒にの班となった際には、「自分が発表するしかない」という意識を持ち、プレッシャーに打ち勝ち発表を行

うことができた。この発表は通算 6 回目 (商品企画) の際の話であるが、ここでは発表内容に対してプロである株式会社カゴメの職員の方などからも質問が出るような場となったが、その学生は対応できていた。

上記学生はその後、別日に設定した実習報告会にて、教員等の前で無事に発表を終えることができた。本人は「連携授業で人前で発表した経験があつて本当に良かった」と話した。連携授業の際に、プロの前で発表することに比べれば、顔見知りばかりの専門学校内での報告の方が楽だとも話すようにまでなっていた。

⑧マイクロな「福祉」に留まらない広い視野の獲得

本専門学校は、社会福祉士等の国家資格取得を目指す、ソーシャルワーカーを養成する専門学校であり、学生らもソーシャルワーカーとなることを目指して入学してきている者が大半である。大半は 10 代という若い年代で、様々な経験から (自分や周りの人などがつらい経験をした等) ソーシャルワーカーを目指すこととなった者がほとんどだが、つらい経験をしている「個人」に焦点を当てて支援をしていくという、いわば「マイクロ」な視点に関心が強いことが多い。

むしろマイクロな視点は必須であり重要な視点であるが、ソーシャルワークはマイクロのみならず、組織的な視点のメゾレベル、より広い地域的な視点のマクロレベルも重要な視点となってくる。

例えば、障害者の就労支援を考える際、その個人がどのような苦勞 (障害特性や環境) にあり、どのような希望 (どんな生活・仕事をしたいか) を持っているかなど面談等を通して把握しながら関わっていく。これがマイクロレベルの介入である。

一方で、障害者が働いて得る収入をどう上げていくかなどを考えることも非常に重要な視点となる。収入が低いと就労の意欲が上がらず、生活も立ち行かなくなるからだ。障害者が得る収入を上げるためには、障害者が働く事業所全体で利益を上げていく必要がある。これがメゾレベルの介入である。ただ、福祉業界の一部では、利益を追求することは福祉に反することという意識を持つ者もいる。しかし、上記の通り、福祉の観点からも経営などについてしっかりと考えている意義は非常に大きい。

そういった観点から考えた際に、本連携授業の中で、福祉専門職ばかりでなく様々な立場の方のお話を聞き、「福祉」に偏っていない高校生や高等支援学校生のそれに対する意見等も聞く中で、本専門学校生から、「就労継続支援 B 型 (障害者の就労支援を行う障害者総合支援法に基づくサービスの一つ) の全国平均賃金が低いことを知った」「どう障害者の工賃を上げていくのかを考えることも重要だと感じた」等の声が聞かれ、マイクロな視点のみならず、より広い視点の獲得に繋がったと思われる変化が見られたことの意義は大きい。

上記視点の獲得は、通常の本専門学校のカリキュラム内でも当然目指されているものではあるが、「福祉」の専門職である教員やそれを目指す学生という良くも悪くも偏った者たちだけでなく、様々な立場の人間が集まって学ぶ場であるからこそ、より強く意識できた部分

であると思われる。

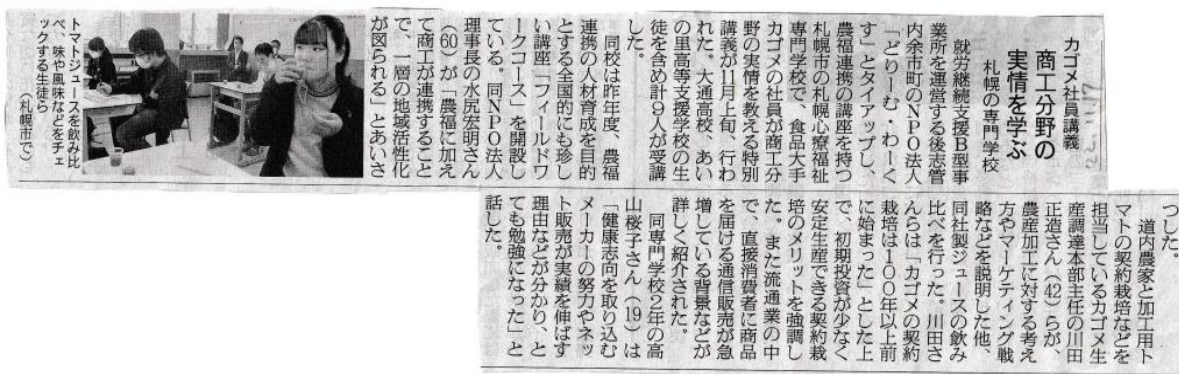
以上の大きく7点が、本札幌圏域連携授業での成果である。

第3節 その他

第1項 農業新聞

本事業を進めていく中で、農業新聞様から問い合わせがあり、取材・紙面への掲載がされた。詳細は下記の通り。

日本農業新聞朝刊(令和4年11月17日掲載)



11月5日(土)に実施した札幌圏域の連携授業で株式会社カゴメの社員様から農福商工連携のテーマにおいてマーケティング、商品企画などを学ぶ。

第4章 全体の振り返り

今年度、取り組みをした現地視察や高校生対象・施設事業所対象のアンケート、日経BPとの会議、北海道農政部と連携につきまして、時系列に報告する。

・6月下旬から7月中旬アンケート調査の実施

高等学校生における「社会福祉全般」に関する基礎的な認知度を調査する。

528名の生徒から回答を得ることができた

【別紙1】社会福祉に関する【高等学校生】の意識調査報告書

・7月26日(火) 16:00-17:00 web 会議

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R4 第1回ヒアリング(日経BP)議事録

【参加者】

文科省:小江

日経BP:高津(議事進行)、高橋、相山

心療校:熊谷校長、飯島学科長、佐藤、幡、酒井、市川事務局長、万行事務次長、長井

《あいさつ》

文科省担当者(小江氏)より、平素から本事業への協力に感謝する辞および進捗確認をとおして協力体制として貢献したい旨の発言あり。

《昨年度からの進捗状況確認》

《今年度計画、年間スケジュールの確認》

飯島より

資料に沿って、今年度計画の概要を説明。

幡より

札幌圏域の連携授業について、これまでの進捗と今後の予定について説明。

I-II期まで実施した経緯からグループ学習では高校生と専門学校生の協調性の深化が垣間見えたことを報告。また、今後のII-III期にかけては流通～製品加工(調理)の過程を学習する予定であることに加え、販売(マルシェ実施)までを予定していることを報告。

高津氏より、マルシェ実施のタイミングが適しているが、有識者数名と視察来校したい旨の要望。

佐藤より

余市圏域の連携授業について、これまでの進捗と今後の予定について説明。

高校生を巻き込んでいるとか連携しているとのアピールには達していないかもしれないが、

バリアフリー農園を制作する過程で地域の高齢者との関わりの中から実体験を得ることができた。

高津氏より、メモで良いがこれらの予定が欲しい。また、実地検証の前に模擬的(リハーサル)検証段階からの修正プロセスも大事な部分と考える。ぜひ、挑戦してみてください。

高津氏より

経過は順調と思われる。一点確認したいところでは、社会福祉士の理解度調査について、調査段階が現状把握から始めるのか、アナウンス活動等の入力により変化があるのかを調査するかについて知りたい。

飯島より、現状把握から始めると回答。

《今後の展開に向けて》

高橋氏より

KPIは網羅されていると思われる。参加人数は限られる(少ない)だろうか、%表記よりも実人数表記は実務的である。また数的な変化と合わせ態度変容的(形成的)な情報因子も探っても良いと思う。

高津氏より

生徒・学生だけでなく、関連表に載っている全ての人にどのような効果あるのか。多くの人に農業体験してもらうことが、その効果につながる可能性を感じる。

小江氏より

地域課題として取り組んでほしいと考えている。その意味では、高校から連携授業に参加している人数よりも参加していなかった人へのアプローチも検討してほしい。

高津氏より

多くの関係者がいる中、ファンを作るような広報的な視野からの KPI 策定も一案。

《今後のスケジュールについて》

9月位に視察をしたいと考えている。可能であれば、余市紅志高校と大通高校のⅡ期を視察したい。視察日のリクエストも可能。また、合同会議を9.11.2月に予定、2月は15分程度のプレゼンをお願いします。

このような機会(BPの広報)を上手く利用して、本事業の広報に活かしてほしい。

・8月2日(火) 14:00～16:30 神奈川県立津久井浜高等学校へ視察

神奈川県教育委員会 教育局 インクルーシブ教育推進課指導グループ 指導主事
栗原氏

津久井浜高校 森谷先生 稲崎先生

札幌心療福祉専門学校 幡 直人 飯島 英幸

栗原氏から神奈川県のインクルーシブ教育が平成28年度から知的障がいのある生徒を
高校教育で受ける機会を拡大するために3校から取り組みを始め、令和2年度4月から県
内すべての地域から通えるように実践推進校について新たに11校を指定し、全部で14校
になったなど概要の説明をしていただく。

森谷先生と稲崎先生からは学校生活全般・教科等の学習・キャリア教育などについて実
際の取り組みについて説明をしていただく。

40名程度の同じクラスに知的障がいのある学生が2～3名と一緒に授業を受けている。
教科等の学習、学校行事、生徒会活動、部活動なども参加している。その他にキャリア教
育を「Being」という名称で1週間に2時間 通常の授業とは別に時間を設けており、知的
障がいのある生徒のみの授業で、接遇や障害者雇用・福祉サービスなどを学び、卒業後の
自立と社会参加をめざした内容にしている。

キャリア教育以外の授業は他の生徒と一緒に授業を受けることになり、学力的に理解力
が劣るため、ティームティーティングで対応している。また、個別教育計画を生活面、学習
面において作成し、その計画書を学生ごとにファイルに綴り、教員間の情報共有につなげ
ている。この情報共有について日頃から本校においても全教員が関わることから重要な部
分と考えているところであり参考になる部分である。そして、インクルーシブ教育実践推進校
に指定されて28から、高校の職員室内にて教員同士の情報交換や情報共有する場面が
増え、教員の意識が少しずつ変わってきているとのことであった。

個別に教育計画が作成され、成長がどの程度されたのかを評価にしており、その生徒に
合わせた関わり実践しており、インクルーシブ担当の教員の他にインクルーシブ支援員(教
員免許必要)を採用している。これは神奈川県の単独の予算に盛り込んでいる。

インクルーシブ教育を実践する際にはティームティーティングが有効であることやその生徒
の個別にどの部分が成長できたなどに着目することを改めて学ぶことができた視察であった。

・8月3日(水) 8:30～12:00 パーソナルサンクス株式会社 よこすか・みうら岬工房(特 例子会社) へ視察

神奈川事業部マネジャー 岩崎氏

札幌心療福祉専門学校 幡 直人 飯島 英幸

パーソナルサンクス株式会社 よこすか・みうら岬工房はパーソナルホールディングス株
式会社の特例子会社である。パーソナルホールディングス株式会社は人材派遣や転職・

就職の DODA などを運営している。

今回の視察では3箇所の農場へ見学する。3箇所とも別々の農家さんと契約している農家さんの意向により作業内容や雰囲気は違ってくるところを理解する。

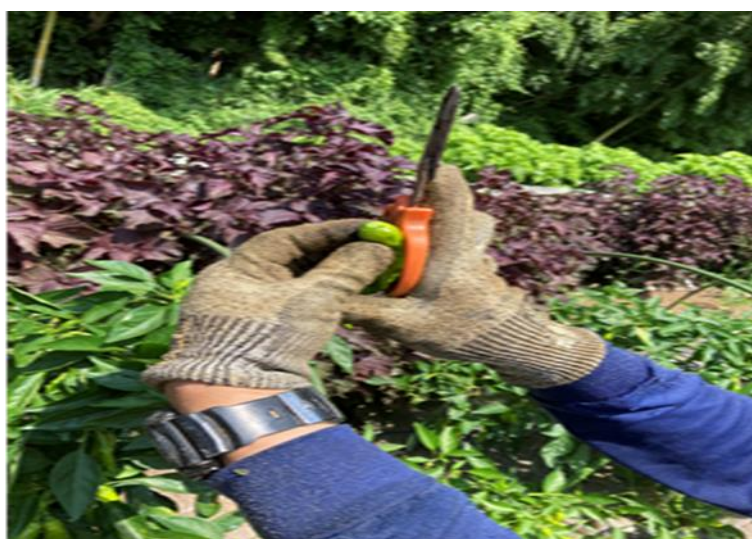
見学後、事務所に戻り、パーソルサンクス株式会社の取り組み等について説明を受ける。

事業目的は障害者雇用を通じて、横須賀市における農業分野の課題解決・発展に寄与し、地域の活性化を目指すとし、2018年10月に開設し、サポートする社員は12名、障害のある社員は29名(手帳あり)受諾農作内容は圃場整備、定植、収穫、出荷調整、販売補助など実施している。

説明の中で特例子会社の単独で利益をあげているところはほとんどないのではないかと。特例子会社は赤字のところが多いとのこと。特例子会社のため、この会社で利益を上げるというより、親会社の障がい者の雇用率の確保を優先している印象を受ける。この親会社にはよこすか・みうら岬工房の他に2箇所、特例子会社を作っており、この3箇所で親会社の障がい者雇用率を保っている。

この会社では障がいのある職員3人に対し、サポートする職員1人が担当として付いている。このサポートする職員が本校のフィールドワークコースのイメージに近い役割を担っているのではないかと。障がいのある職員の能力に応じて、作業内容を伝えたり、現場での農家さんとの窓口となり連携を図っている。障がいのある職員の能力に応じて作業内容を決めていくことなど個々の能力の把握や関係性づくりはソーシャルワークの技術が求められる。農業に関する知識も必要であるが、障がい者の特性を理解し継続して仕事が行えるよう、ソーシャルワークの視点が大切であることを認識し、今後のフィールドワークコースに反映していきたい。

ハサミの手の持つ（オレンジ色）部分より長いものを収穫



誰が見ても分かるように印を付けて工夫をしています。



**・8月18日(月) 10:00~12:00 社会福祉法人 京都聴覚言語障害者福祉協会
さんさん山城 へ視察**

施設長 新免 修 氏

札幌心療福祉専門学校 幡 直人 酒井 啓

施設長に同事業所の取り組みについてご説明、施設見学をご対応いただき、同施設で運営しているカフェにて昼食をいただいた。

同事業所は、先駆的に農福連携に取り組んでいる B 型事業所で、政府の「農福連携等推進会議」に有識者としての参加や、国連の「SDGs 済州国際会議」にて実践報告をするなど活躍されている事業所である。

同法人は昭和 44 年から聴覚障害者を主とした対象として様々な福祉活動を行っており、現在においても複数の事業所で多くの事業を行っている。

「さんさん山城」は、管理者が京田辺市職員であったころ、現在の「さんさん山城」近隣の茶畑農家から畑作業を継承して欲しいという話があり、早期退職して 2011 年に現事業所を立ち上げたところから始まった。

つまり、障害者が事業所内で行う作業として農業を始めたわけではなく、逆に農家側から話があつて始めたという経緯で、その成り立ちが興味深かった。

上記茶畑以外にも、近隣農家から畑作を継承した畑が点在しており、唐辛子、茄子等多くの作物を作っていた。そのことで、1 年間畑作業がない時期はない。

都道府県の農業専門職員が、農業技術・経営に関する支援を直接農業者に行う「農業

普及センター」が全国にあるが、京田辺市管轄の同センターが農福連携に対しても積極的であり、専門の農家ではない「さんさん山城」に対してもかなり熱心に指導してくれているとのこと。「さんさん山城」の畑だけでなく、管轄内の畑を専門職員が巡回し、「栄養が足りていないので、肥料を」等のアドバイスを置手紙として畑に置いていくなどしてくれており、継承した農家からの技術継承だけでなく、多くの支えがあって農業を営んでいるとのことであった。

「さんさん山城」では、単に農産物を作るだけでなく、農産物に関して独自の強みを作ること、加工、販売等の6次化まで積極的に進め、結果、利用者の工賃向上に留まらず、地域の活性化や、事業所やその利用者が地域に溶け込んでいくことを実現していた。

まず、お茶に関しては、専門農家は通常機械で刈り取っているらしい。しかし「さんさん山城」では、専門農家よりも多い人であることを利用して、手摘みをしているとのこと。そのことによって、お茶の品質が一定水準のものに統一されるとのこと。また、そのお茶に関してもただ単純に売るだけでなく、お菓子に利用していた。クッキーと大福を食べさせて頂いたが、「福祉事業所としては」等ではなく、他の一般企業のお菓子と比べても本当に美味しい物で、魅力を感じた。この商品開発には、外部からコンサルタントを招くなどはしておらず、全てを事業所職員と利用者で行ったとのこと。

就労支援事業所では、商品開発を支援者と利用者が共同で行うことは珍しくないが、開発された商品のレベルが、「福祉事業所として」でなく、他の一般企業とも勝負できるレベルというのは珍しいと感じた。

事業所内で運営しているカフェも、近隣住民や近隣の会社員等でにぎわっていた。同事業所で採れた野菜を使った丼ぶりが500円で食べられるカフェだったが、非常に美味しかった。

・8月18日(月) 15:00～17:00 京都府 健康福祉部 障害者支援課へ視察

京都府健康福祉部 障害者支援課 主査 副主事

札幌心療福祉専門学校 幡 直人 酒井 啓

主事と副主査にご対応いただき、主に京都式農福連携事業についてご説明いただいた。京都府では、「京都式農福連携事業」を平成29年から進めている。ご対応いただいた職員の方は立ち上げ当時は別の部署だったので、どういった経緯で事業が開始されたかは不明とのことであったが、先に訪問した「さんさん山城」の施設長のお話では、当時の京都府知事が農福連携を推進する立場であったこと、当時の障害者支援課の課長が厚労省からの出向者でかなり、戻る前はかなり事業を形にしていたことなど、いくつかの要因が重なった結果だろうとのことであった。

同事業は、ご対応いただいた府庁の障害者支援課が「きょうと農福連携センター」となり、府内に三か所のサテライトを設置し、農福連携推進を行っている。なお、その内の一つを先

に視察した「さんさん山城」が受託している。

具体的な事業内容は大きく4点で、

- ①京都式農福連携補助金事業
 - ②障害福祉事業所への技術指導・アドバイザー等派遣
 - ③農福連携キャリアパス制度の運用(当事者向け)
 - ④ノウフクマルシェ等の開催、大学連携事業
- である。

①の補助金については国庫負担はなく、全て京都府独自に財源を確保しているとのことである。いくつか補助金の種類はあるが、例えば先の「さんさん山城」が事業所内でカフェを始める際に、建物内を改装するなど同補助金を利用している。これから農福連携に取り組もうと考える事業所や規模を拡大しようと考えている事業所にとっては、かなり有難いものである(上限 333 万円の 2/3 まで補助される)。

②はセンター(本部)に福祉専門家、農業専門家、共生社会の専門家(大学教員や企業取締役など)などが配置されており、希望する事業所に派遣する形となっている。

③については、サテライトで行っている農業講座(30 時間)を、農福連携に取り組んでいる(取り組む予定の)福祉事業所に通所している利用者が受講することにより、修了証を発行する事業である。このことで、利用者自身の農業知識や技術向上を図ると同時に、修了証には「何の作業を修得しているか」「どんな作業が得意か」なども記載することによって、元の通所先に戻った際にも作業のマッチングがしやすいようになるものである。

④マルシェについては、イオン等でコロナ前は行うなどしていたとのこと。普及啓発等にも繋がる活動である。

大きく上記のような事業であることが理解できた。

田辺なす畑



加工場



チャレンジアグリ



田辺なす井



・8月22日(月) 15:00~17:00 カゴメ野菜生活ファームへ視察

カゴメ野菜生活ファーム 片岡氏

札幌心療福祉専門学校 酒井 啓 飯島 英幸

カゴメ野菜生活ファームは体験型のテーマパークであるが、野菜の収穫に障害福祉サービス事業所が係っていたり、地域の小学生が作成した看板を立てたり地域貢献を意識した取り組みを行っていた。

収穫体験や「野菜生活 100」の歴史、畑づくりから店頭までの流れを AR 映像を使った説明に関しては、農福連携に携わる人材として有意義になるものと感じることができた。また、最新のビジネスモデルから地域貢献に至る仕組みを理解することや体験型で行えることは貴重な機会であると感じた。フィールドワークコースの学生が学ぶにはよい機会となると感じた。

ここでは、常時ではないけれど、農福連携も実施している。カゴメ野菜生活ファーム内の畑で、収穫時に地域にある就労継続支援B型事業所の2箇所と社会福祉協議会を通じて障害者が収穫の作業を実施している。賃金は収穫した量に応じて支払いをしているとのこと。(時給ではなく、出来高にしている)

カゴメ野菜生活ファームの建物



地元の小学校の児童が野菜ごとに問題を作成し掲示。



・9月14日(火) 13:00~16:00

令和4年度 農福連携スタートアップ研修

場所:公益財団法人 道央農業振興公社

本校専任教員1名が派遣し福祉的な視点から細分化について講義する。

【別紙2】令和4年度農福連携スタートアップ研修

・9月15日(月)web 会議

令和4年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整業務

第1回合同会議

新規2団体事業概要紹介

有識者会議からの指摘事項について（テーマごとに受託団体、有識者よりコメント）

- ・事業の継続性を見据えた、連携協同
- ・専門学校の機能と役割の再確認と情報発信
- ・ビジョン、ゴールの設定

受託団体間の情報共有（オンライン講座の活性化）

今後のスケジュール案について

議事録【別紙3】

・9月26日(月)～10月21日(金) アンケート調査の実施

北海道管内で農業科を設置する高等学科12校に農福連携に関する意識についてのアンケートを実施しました。設問は、農業分野に進学した理由や課題、福祉分野に関するイメージなどを把握するため、【農業関連の学びについて】【農業分野の課題や魅力について】【社会福祉に関する興味・関心度について】【農福連携に関する認知度・関心度について】の4つの観点から構成されています。520名の生徒から回答を得られました。

【別紙4】地域活性化のための農福連携人材育成事業アンケート報告書

・10月24日(月) 15:00-15:40 web 会議

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R4 第2回ヒアリング(日経 BP) 議事録

【参加者】

文科省:出席なし

日経 BP: 高津(議事進行)、高橋、相山、事務局

心療校:飯島学科長、佐藤、幡、酒井、事務局:長井

《あいさつ》

日経 BP(高津氏)より、余市圏域連携授業の視察訪問について謝辞。今回のヒアリングは、今年度のセミナー(12/5、年度末)の予定概要について説明。

《今年度のセミナー実施概要》

高津氏より

・12/5 は実証授業の取り組みについて説明してほしい。高専接続をメインにして画像や動画等

を多用しての説明を要望したい。

・序盤では高専接続の概要に加え、現段階の進捗位置と今年度末までにどの程度まで進むのかを説明してもらい、本題では余市圏域・札幌圏域の連携授業風景の画像等を用いて行ってほしい。

《11/9 コンソーシアム会議での報告について》

高津氏より

・基本的に他団体の取り組みよりも動きが良いことを伝えたい。特に高校生と専門学校の学生が一緒に行っている学習環境は素晴らしいと感じている。他校を見ていると専門学校側から高校側に働きかけるケースはこの中では少ない。特に高校生の中に入っていく上級学生(専門学校生)の位置づけはとても良い。

《その他》

日経 BP(高橋氏)より

・マルシェの取り組みは良い例。高校生をどのように巻き込むのか、実体験を報告してもらい、効果は〇〇だったとしてくれればよい。

・上級学校から高校への働きでは、先生だけが出向するいわゆる出前授業となるケースが散見され良くない。今回は、高校生を巻き込んで学生も出向してコミュニケーションを取っている。専門学校2年生と高校1年生では5年間の差があるがそこを埋める視点やリーダーシップを養成し発揮している。このような状況をコメントとして残したいと思う。

また、この連携授業で得られたこと、改善したいことなどのポイントを説明してもらえると良い。

高津氏より

- ・11/14は有識者委員に簡単に見せてアピールできると良い。
- ・今年度新たに参加協力の連携校があるなら、12/5のセミナーにweb参加案内してもらって興味を深めても良い。できるだけ仲間を増やすことは良い効果につながる。

《本学から》

飯島より

・文科省で言うところの実証講座について、次年度予定しているカリキュラムについて実証講座として成立するのか確認したい。

高津より

・実際は直接確認してほしいが、私見では十分成立している。事業費としても支出可能。ただし、計画書の中へなぜ必要なのか反映(理由書)させることは必要。

《最後に》

高津より

・今年度中の連携授業(11/5、12/10)について、有識者や文科省から視察訪問の要望があるかもしれないが対応をお願いします。

・11月14日(月)web会議

令和4年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整業務

第2回合同会議

内容:「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」のセミナーに向けて

12月5日日経BP主催の「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」のセミナーについての日経BPからの説明と団体ごとに発表内容のポイントについて説明する。

・11月22日(火) 13:00~16:00

令和4年度 農福連携スタートアップ研修

場所 ヤマチコーポレーション セミナールーム

農業者向けに障害者福祉について本校の専任教員が講義を行う。

・12月5日(月) 15:00-17:05 webセミナー

テーマ:「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」

主 催:日経BP

地域活性化のための農福連携人材育成事業の趣旨・目的と実際に取り組んでいる高等学校等と専門学校の連携授業について発表する。

・1月20日(金)~2月15日(木) アンケート調査の実施

病院・福祉施設・事業所を対象に農福連携に関する意識や職員の採用活動について調査する。
アンケート用紙を回収し集計中。

・1月25日(月) 15:00-15:40 web会議

「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」

～R4 第3回ヒアリング(日経BP)議事録

【参加者】

文科省:小江

日経BP:高橋(議事進行)、高津

心療校:熊谷校長、飯島学科長、佐藤、幡、酒井

事務局(長井)

《あいさつ》

日経 BP(高橋氏)より、札幌圏域連携授業の視察訪問について謝辞。今回のヒアリングは、今年度のセミナー(年度末)の予定概要の確認。

①今年度のセミナー内容の確認

佐藤より

- ・余市圏域連携の説明

幡より

- ・札幌圏域連携の説明

高橋氏より

(連携授業から)

- ・高校生と専門学校生との共同は全国的に稀。
- ・授業後の振り返りはとても良い。

高津氏より

- ・今年度の振り返りから次年度へ転嫁する方策の立案が欲しい。
- ・西野学園内にとどまらず水平展開として他事業者への巻き込み方があれば提示してほしい。

小江氏より

- ・農福連携について農水省からも確認があり、ホットなキーワードであることを再認識した。
- ・近い未来像として、生徒のそばに専門学校生がいるようなカリキュラム連携が生徒-学生間の連携はとても効果的と感じる。

②合同会議について

高橋氏より

- ・発表の場から議論の場にしたい

テーマ: 専門学校と高校で vision が一致しているか

- ・高校種別、学年別で変わるかもしれないが高校側にどの程度伝わっているか。
- ・高校側にも参加してもらいたいと思う

(案内状も用意している)

高津氏より

- ・少し上のお兄さん・お姉さんの位置づけが特徴的
 - ・授業を通して生徒の到達先がどこなのか
 - ・高専接続をキャリア教育で進めるだけでなく、生き方の教育環境、ライフデザイン教育にも派生しているかもと感じる。
- ➡ これらを vision に落とし込めれば良いのではと思う。

高橋氏より

- ・実はお兄さん・お姉さんも悩みを抱えながら学習しているという、いわゆる教材として高校生にFB しているかと感じる。

佐藤より

・高校生の将来像について高校側から相談を受けた。

参加した生徒から2名ほど本校への希望者がいたが、経済的に断念した経緯がある。

高橋氏より

・KPIには表れないが、大事な成果となる。親御さんへの教育にも携われればと思う。

高津氏

・そもそも高専接続の原点理解が大事。

《本学から》

幡より

・連携授業での個別FB前後の変容を数値化したいが、支援をお願いしたい。

高橋氏より

・構わない。当初は事務局経由でのメールとなるが、以降は個人メールでもZoomでも良いので声がけ願う。

・大事なものは実施前に相談して決めておくこと。

以上

・1月30日(月)web会議

令和4年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整業務

第3回合同会議

有識者から(浦崎氏:「高専接続事業の意義」)についての講義

高校との接続状況 現状報告について

議事録【別紙5】

・2月6日(月) 15:00-17:00 webセミナー

テーマ:「専門学校と高校を接続し中核的人材育成」

主催:日経BP

地域活性化のための農福連携人材育成事業の今年度、取り組んできた高等学校等と専門学校の連携授業について報告とそれに対する成果と課題について発表する。

第5章 まとめ

令和4年度、本格的に「農福連携」がスタートした。本学は「精神保健福祉士」「社会福祉士」の養成校であり、農業に関する授業は今まで開講したことがなかった。また「農業」を指導できるスタッフもおらず、全く未知のものへ手探り状態で始まった農福連携であった。1年が終了しようとしている今思うことは、「よくここまで来た」という感覚である。

この1年の活動についてはそれぞれの項目で言及しているので、それらを取り上げることは割愛させていただくことにしたい。「まとめ」として記しておきたいのは、高専接続の難しさ・大切さとこの事業にかかわって下さったすべての皆様への感謝の思いである。コーディネーターの大泉氏・水尻氏のアドバイスがなければ、この1年の事業は成果を上げられずに終わっていただろう。本校職員と何度もディカッションする中で「農福連携は何を目指しているのか」「何をすることが農福連携なのか」という目的や方向性が次第に明確になってきたのだった。大泉氏・水尻氏には連携事業での講師としても前面に出ていただいた。両氏の人脈があつてこそカゴメ株式会社の方からレクチャーをいただいたり、「農福マルシェ」など内容の充実した高専接続連携授業が実現したのだった。また、余市紅志高校との連携では余市紅志高校生田仁志校長先生をはじめ、太田教諭、大野教諭から多大なご協力をいただいて目的とする「バリアフリー農園」が完成したのだった。高校生と専門学校生が一つの目的に対し、一緒に考え学び成長する姿にこそ高専接続の意義があると感じた。札幌圏連携では、竹内農園の農園主竹内氏に全面的なご協力をいただいたことに、心より感謝申し上げたい。

農園で高校生・特別支援学校生・専門学校生が「雑草を効率的に取るには」という課題に対して考えながらチームで作業を進めていたが、その姿が「農福連携」の原点なのであろう。

私たち本校の教員も学ぶことが多い「農福連携」である。本事業コンサルティングの日経BPからは「専門学校生と高校生が同じ学びに取り組んでいる事業は西野学園だけであり、西野学園の高専接続は高く評価されている」という賛辞をいただけたことは、大変ありがたい。

次年度はいよいよ「農福連携コース1期生」が誕生する。教育課程・教育内容を編成するためコーディネーターと議論を重ねながらそれらの形を作ってきた。その中から「育成すべき学生像」が明確になってきた。学生に対し興味関心のある教育内容を提供するとともに、高校や企業には「農福連携コース」をアピールし農福連携の浸透を図っていききたい。農業人口の減少、農業の担い手の高齢化、障がい者の就労先の拡大が北海道の大きな課題である。それらの解決策の一つが農福連携である。社会の課題解決のため、専門学校が果たすべき役割は社会の幸福に寄与する人材の育成である。今年度の成果と課題を基に、次年度も農福連携に取り組んでゆく。ぜひ、西野学園札幌心療福祉専門学校の取り組みにご支援をお願いしたい。今年1年の感謝とともに、まとめの言葉とさせていただきます。

【別紙1】

2022年度 専修学校による地域産業中核的人材養成事業
社会福祉に関する【高等学校生】の意識調査報告書

目次

目次.....	2
1. はじめに.....	3
1) 調査の概要.....	3
2. アンケート調査結果.....	4
1) 回答者に関する内容.....	4
2) 「社会福祉」に関する興味・関心についての回答内容.....	5
3) 医療・福祉に関する資格についての回答内容.....	7
4) 農福連携に関する認知度・関心度についての回答内容.....	9
5) 地域福祉に関する経験についての回答内容.....	10
6) あなたの将来についての回答内容.....	14
7) ご意見・ご要望に関する回答内容.....	17
3. クロス集計分析.....	18
1) 【高等学校の生徒】の意向と各設問の関係.....	18
4. まとめ.....	19
1) 本調査における回答内容.....	19
2) 社会福祉に関する高等学校生の意識概要.....	21
<添付資料> 調査票.....	22

1. はじめに

1) 調査の概要

①調査内容：

本校に入学する学生は、社会に貢献したい気持ちが強い。しかし、意欲はあるが学力が伴わない者やコミュニケーションや対人スキルに課題を抱える学生も存在する。さらに、精神保健福祉士と心理士の業務を混同して理解している学生も多く、入学後に進路変更を考えるものも存在する。また、仕事内容は理解していても、大学進学が叶わなかった学生が入学していることも多い。本調査では、高等学校生における「社会福祉全般」に関する基礎的な認知度を調査し、卒業後の進路選択における福祉分野への興味・関心を測定することで、仕事に価値を見出し、誇りをもって社会貢献ができる人材を育成するための基礎的なデータとする。

②調査対象：

●北海道内の公立高等学校の生徒

③調査方法：郵送法（但し、教員へ一括送付し配布及び回収についてご協力頂いた）

●配布方法：郵送発送（学内配布）

●回収方法：郵送回収（学内回収）

④実施時期：配布 2022 年 6 月下旬 回収 2022 年 7 月中旬迄

⑤総回収数：528 件

⑥設問概要：○在校名、学年、年齢

- 社会福祉に関するイメージ、興味・関心
- 資格の認知度、社会福祉士への興味・関心
- 農福連携に関する認知度、興味・関心
- 日常経験（障がい者、高齢者との関り）
- 高校卒業後の進路、職業選択

回答数

名称	回答数
札幌市立新川高等学校	495
北海道余市紅志高等学校	33
合計	528

学校・学年の回答状況

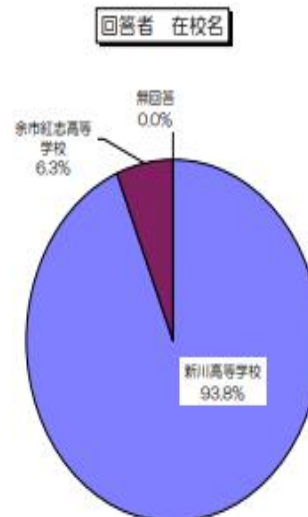
地区名称	件数
新川高校（1年生）	310
新川高校（2年生）	185
余市紅志高校（2年生）	1
余市紅志高校（3年生）	32
回答者不明	0
合計	528

2. アンケート調査結果

1) 回答者に関する内容

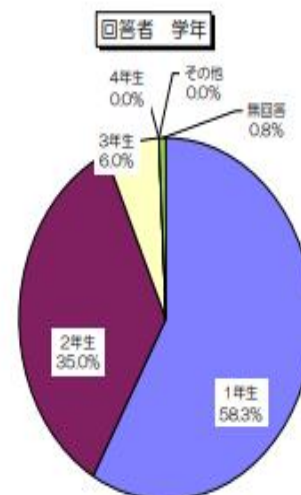
① 在校名

選択項目	件数	構成比
新川高等学校	495	93.8%
余市紅志高等学校	33	6.3%
無回答	0	0.0%
合計	528	100.0%



② 学年

選択項目	件数	構成比
1年生	310	58.3%
2年生	186	35.0%
3年生	32	6.0%
4年生	0	0.0%
その他	0	0.0%
無回答	4	0.8%
合計	532	100.0%



●回答者における在校名では、【新川高等学校】が93.8%、【余市紅志高等学校】が6.3%、の合計528名となっている。

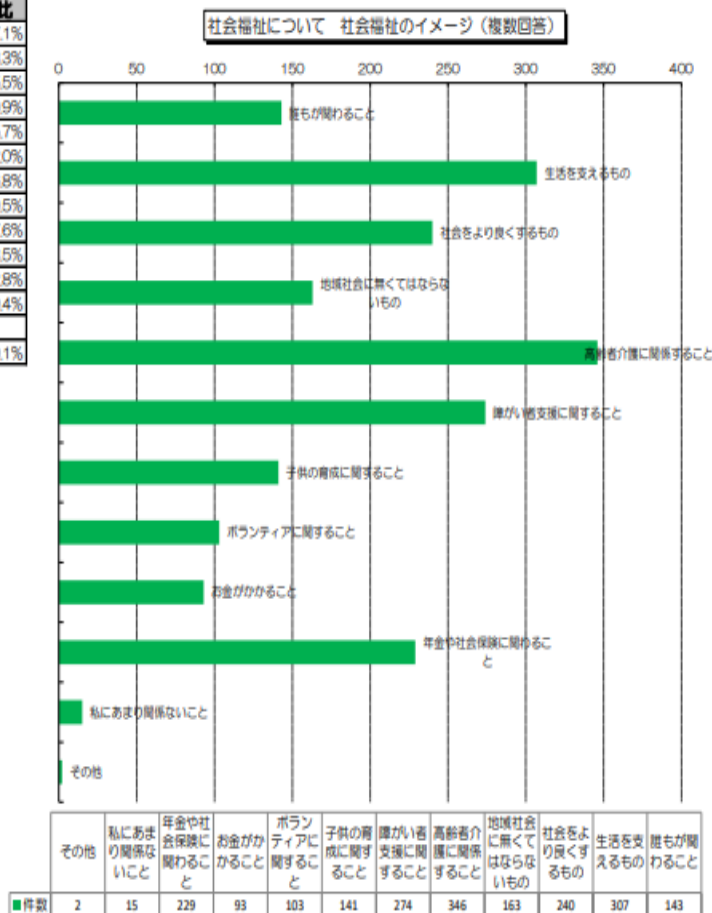
●学年では、【1年生】が最も高く58.3%、【2年生】が35.0%、【3年生】が6.0%で続いている。

2) 「社会福祉」に関する興味・関心についての回答内容

①社会福祉のイメージ（複数回答）

n=528

選択項目	件数	構成比
誰かが関わること	143	27.1%
生活を支えるもの	307	58.3%
社会をより良くするもの	240	45.5%
地域社会に無くてはならないもの	163	30.9%
高齢者介護に関係すること	346	65.7%
障がい者支援に関すること	274	52.0%
子供の育成に関すること	141	26.8%
ボランティアに関すること	103	19.5%
お金がかかること	93	17.6%
年金や社会保険に関すること	229	43.5%
私にあまり関係ないこと	15	2.8%
その他	2	0.4%
無回答	1	-
総回答件数	2057	390.1%



<その他の記述回答>

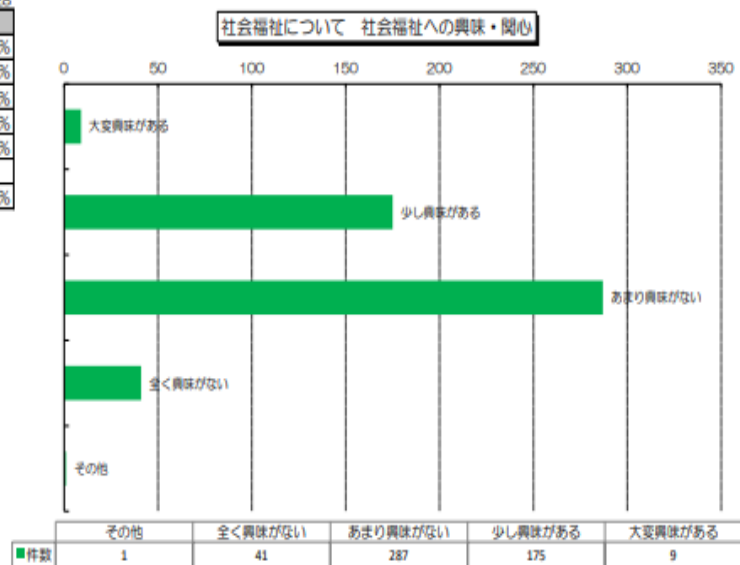
記述回答	調査（在校生、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
わからない	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
完璧にできない	（新川高等学校、大変興味がある、あまり興味がない）

●次に、社会福祉に関する設問を実施した。まず、社会福祉のイメージでは、【高齢者介護に関すること】が65.7%、【生活を支えるもの】が58.3%、【障がい者支援に関すること】が52.0%と、それぞれ半数を超え、続く【社会を良くするもの】が45.5%、【年金や社会保険に関すること】が43.5%と、上位となったため、高校生における主要なイメージは、上記に集約されるのではないだろうか。中でも、【誰かが関わること】が27.1%と低くなったため、年長的にもあまり自分に関係する分野では無いイメージとなっているようだ。

②社会福祉への興味・関心

n=528

選択項目	件数	構成比
大変興味がある	9	1.8%
少し興味がある	175	34.1%
あまり興味がない	287	55.9%
全く興味がない	41	8.0%
その他	1	0.2%
無回答	15	-
総回答件数	528	100.0%



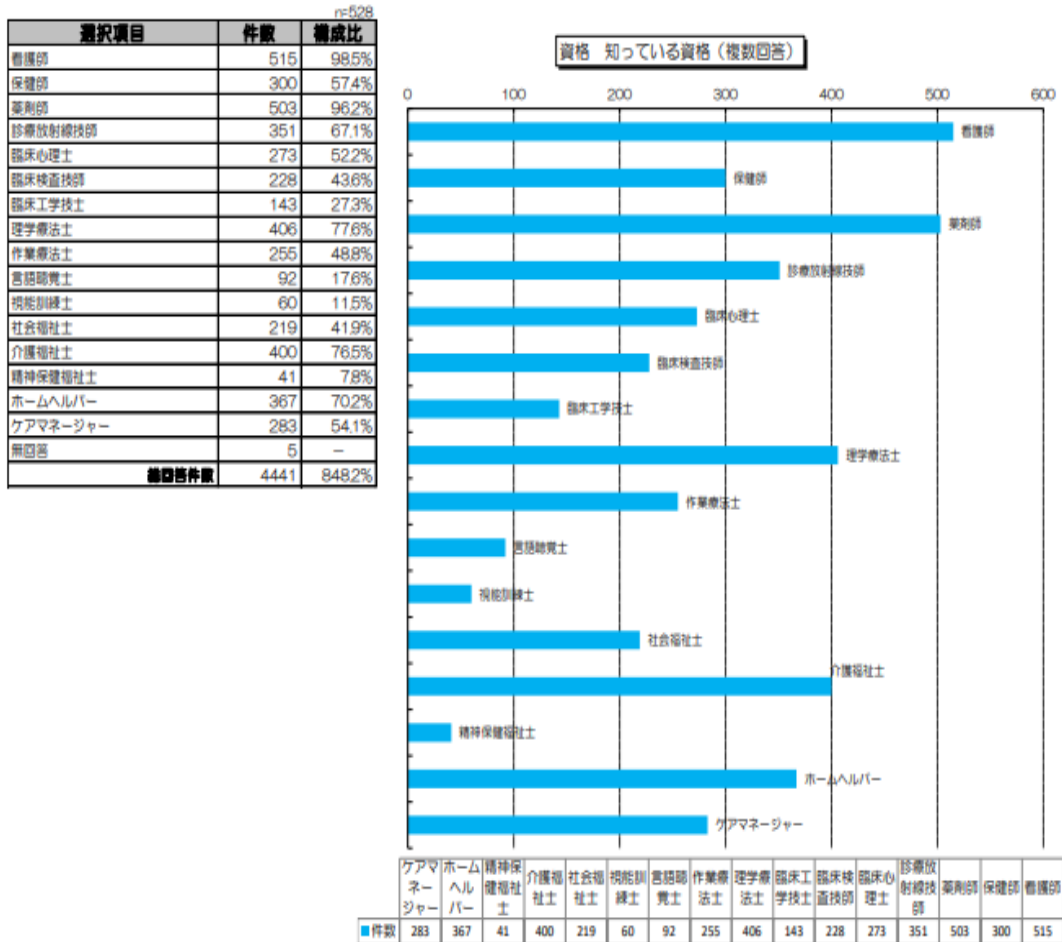
<その他の記述回答>

記述回答	属性（在校名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
どちらでもない	(余市紅志高等学校、その他、その他)

●社会福祉への興味・関心では、【あまり興味がない】が55.9%と、最も高くなった。一方、逆に【大変興味がある】が1.8%、【少し興味がある】が34.1%と、全体の35.9%は、興味を持っていることが確認出来る。

3) 医療・福祉に関する資格についての回答内容

①知っている資格（複数回答）

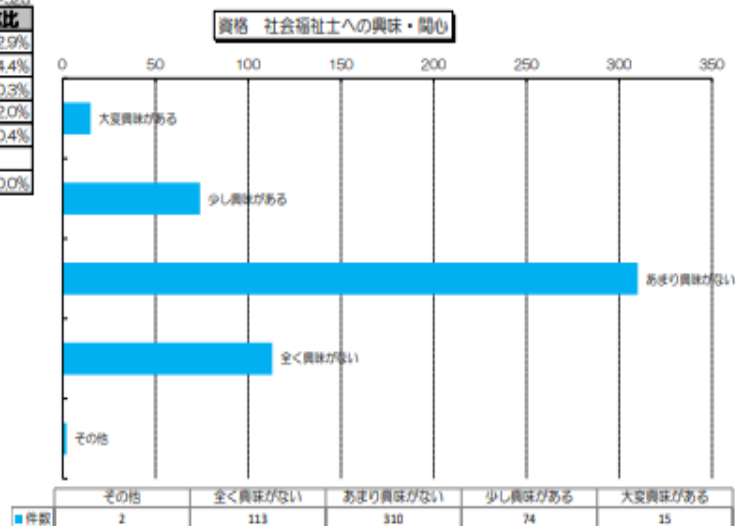


●次に、医療・福祉関連の資格についての知識を聞いたところ、【看護師】が98.5%、【薬剤師】が96.2%と、ともに9割を超えた。また、【理学療法士】が77.6%、【介護福祉士】が76.5%、【ホームヘルパー】が70.2%と7割以上、続く【診療放射線技師】が67.1%、【保健師】が57.4%、【ケアマネージャー】が54.1%、と続いた。【社会福祉士】は41.9%となったが、高校生の認知度がまだまだ高くないため、出前授業などで、社会的な役割を知ってもらう機会を増やすべきである。

②社会福祉士への興味・関心

n=528

選択項目	件数	構成比
大変興味がある	15	2.9%
少し興味がある	74	14.4%
あまり興味がない	310	60.3%
全く興味がない	113	22.0%
その他	2	0.4%
無回答	14	—
有効件数	528	100.0%



<その他の記述回答>

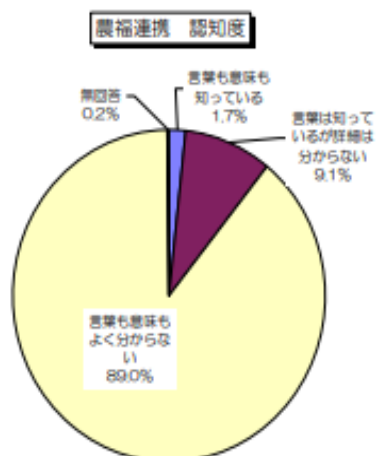
記述回答	所属（住設名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
どういものか分からない	(新川高等学校、少し興味がある、その他)
どちらでもない	(糸市紅志高等学校、その他、その他)

- 社会福祉士への興味・関心では、【あまり興味がない】が60.3%、【全く興味がない】が22.0%と、約8割の学生は関心を抱いていない。一方、【大変興味がある】が2.9%、【少し興味がある】が14.4%と、全体の17.3%は「社会福祉士」という資格に興味を持っていることが分かった。

4) 農福連携に関する認知度・関心度についての回答内容

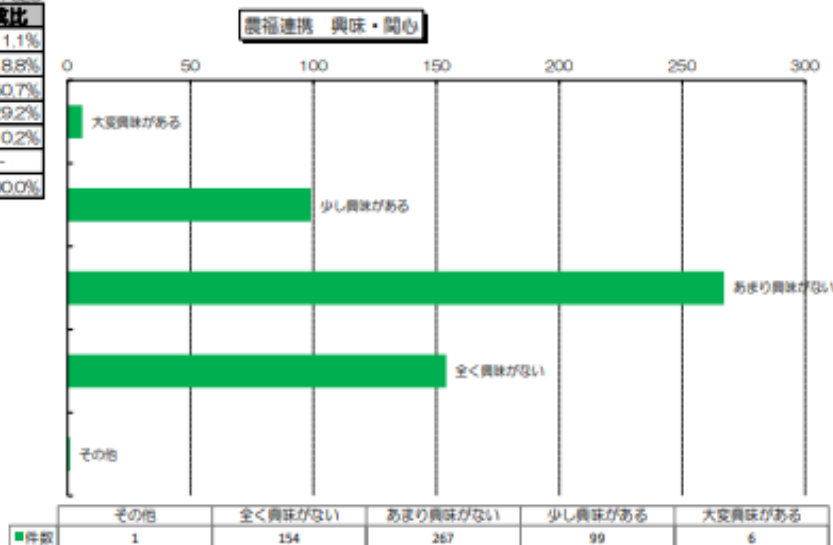
①農福連携の認知度

選択項目	件数	構成比
言葉も意味も知っている	9	1.7%
言葉は知っているが詳細は分からない	48	9.1%
言葉も意味もよく分からない	470	89.0%
無回答	1	0.2%
合計	528	100.0%



②農福連携への興味・関心

選択項目	件数	構成比
大変興味がある	6	1.1%
少し興味がある	99	18.8%
あまり興味がない	267	50.7%
全く興味がない	154	29.2%
その他	1	0.2%
無回答	1	—
無回答件数	528	100.0%



<その他の記述回答>

記述内容	属性（校名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
よく分からない	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）

●農福連携の認知度では、【言葉も意味もよく分からない】が89.0%と、約9割を占めた。ただ、全体の9名、1.7%は【言葉も意味も知っている】と回答しており、詳細データを確認すると、「新川高校」4名、「余市紅志高校」5名となっている。

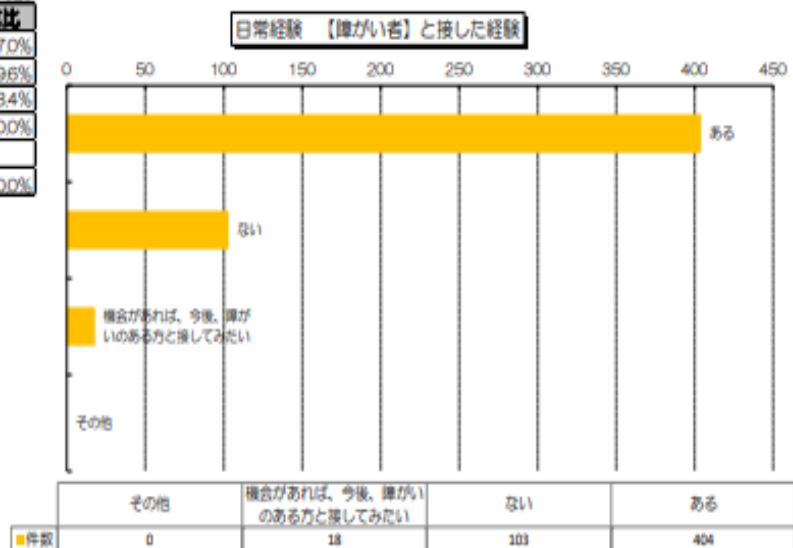
●農福連携への興味・関心では、【大変興味がある】が6名で1.1%、【少し興味がある】が99名で18.8%と、全体の約2割が興味を持っていることが分かった。

5) 地域福祉に関する経験についての回答内容

①障がい者と接した経験

n=528

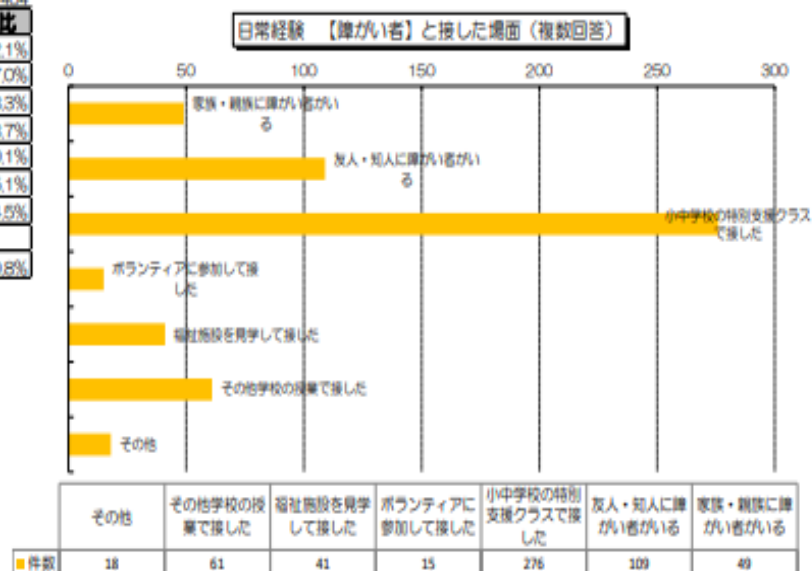
選択項目	件数	割合
ある	404	77.0%
ない	103	19.6%
機会があれば、今後、障がいのある方と接してみたい	18	3.4%
その他	0	0.0%
無回答	3	-
合計	528	100.0%



②障がい者と接した場面（複数回答）

n=404

選択項目	件数	割合
家族・親族に障がい者がいる	49	12.1%
友人・知人に障がい者がいる	109	27.0%
小中学校の特別支援クラスで接した	276	68.3%
ボランティアに参加して接した	15	3.7%
福祉施設を見学して接した	41	10.1%
その他学校の授業で接した	61	15.1%
その他	18	4.5%
無回答	124	-
合計	693	140.8%



<その他の記述回答>

記述回答	属性（学校名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
社会福祉の授業で接しました。	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
幼稚園の園庭した。	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
公共施設を利用した際に関わった	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
亡くなった祖父が脳に障がいをもっていた（後天的）	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
スノーの姉	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
ラーメン屋さんを経営してた	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
（2層と推測はありますが）私の住むマンションに障がいをもった方がいます。	（新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある）
地蔵近所に行った	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
社会福祉の授業で接しました。	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
しょうがい者の方が働いているお店に行った。	（新川高等学校、少し興味がある、全く興味がない）
アパートが同じで小さい時よく遊んでいた。（今は会っていない。）	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
社会福祉の授業で接しました。	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
保育園の隣、保育園の近くにあった施設にあそびに行く機会があった	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
私自身が障がい者	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
お店で働いていた	（新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある）
家にいました	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
道で困っていたので話かけた	（新川高等学校、少し興味がある、大変興味がある）
社会福祉の授業で接しました	（余市紅志高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
バイト	（余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
バイトで同級生	（余市紅志高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
同じ班に件んでいる人と会話しただけ（障がいのある方）	（余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
見たことはある	（余市紅志高等学校、少し興味がある、大変興味がある）
自分の件んでいる班に大きな福祉施設があるので小さいころから少し関わりの？がありました。	（余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）

●次に、日常接点のある地域福祉について聞いた。障がい者と接した経験では、【ある】が77.0%、【ない】が19.6%、【機会があれば接してみたい】が3.4%となった。

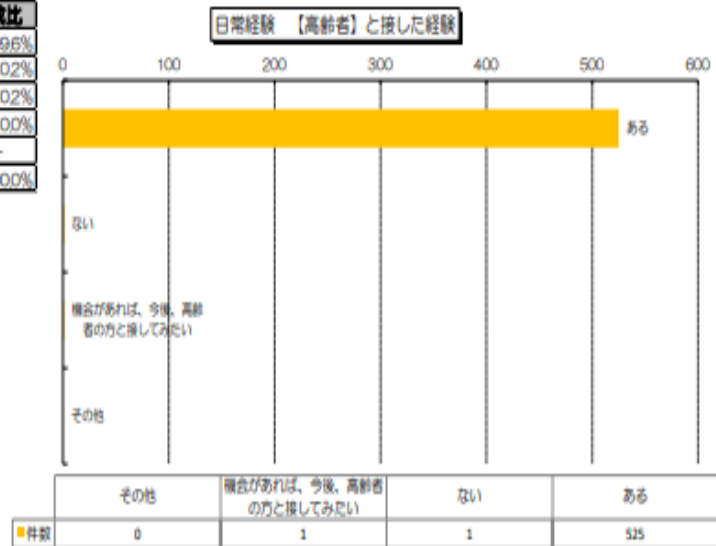
●障害者と接した場面では、前項で【ある】とした404名の回答となっているが、約7割の68.3%が【小中学校の特別支援クラスで接した】と回答している。一方、【友人・知人に障がい者がいる】が27.0%、【家族・親族に障がい者がいる】が12.1%と身近な環境を挙げた他、【福祉施設を見学して接した】が10.1%、【その他学校の授業で接した】が15.1%と、これまでの教育環境の中での機会も挙げられていた。

●記述回答では、「社会福祉の授業で接しました」が数件確認できる他、「私の住むマンションに障がいを持った方がいます」、「障がい者の方が働くお店に行った」、「道で困っていたので話しかけた」など、日常的に接しており、地域移行が進んでいる状況が垣間見える。

③高齢者と接した経験

n=528

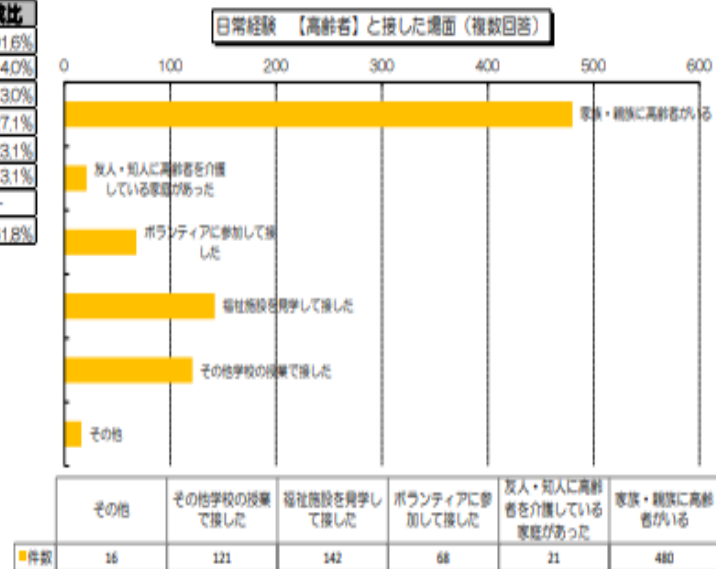
選択項目	件数	構成比
ある	525	99.6%
ない	1	0.2%
機会があれば、今後、高齢者の方と接してみたい	1	0.2%
その他	0	0.0%
無回答	1	—
合計	528	100.0%



④高齢者と接した場面（複数回答）

n=524

選択項目	件数	構成比
家族・親族に高齢者がいる	480	91.6%
友人・知人に高齢者を介護している家庭があった	21	4.0%
ボランティアに参加して接した	68	13.0%
福祉施設を見学して接した	142	27.1%
その他学校の授業で接した	121	23.1%
その他	16	3.1%
無回答	4	—
合計	852	161.8%



<その他の記述回答>

記述回答	所属（学校名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
アルバイト	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
家で話しかけてもらったとき	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
母の職場の介護施設で手伝いをした	（新川高等学校、少し興味がある、全く興味がない）
マンションで会い話した	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
おばあちゃん、おじいちゃん、ひいおばあちゃん、近所のにしのめさん	（新川高等学校、全く興味がない、あまり興味がない）
亡くなった祖父、祖母と接していた。	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
近所のおばあさんにおいさつした	（新川高等学校、あまり興味がない、少し興味がある）
たまに歩いてて声をかけられたりすることがあります。	（新川高等学校、無回答、無回答）
地域近所に行った	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
道で話しかけられた。	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
アルバイト	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
近所の方ね	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
近所に高齢者の方が住んでいる。母の職場で（介護関係の仕事）	（新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある）
アルバイト	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
近所の人	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
アルバイト	（余市紅志高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
バイト	（余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
アルバイト先で(老人ホーム)	（余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
アルバイト	（余市紅志高等学校、少し興味がある、全く興味がない）

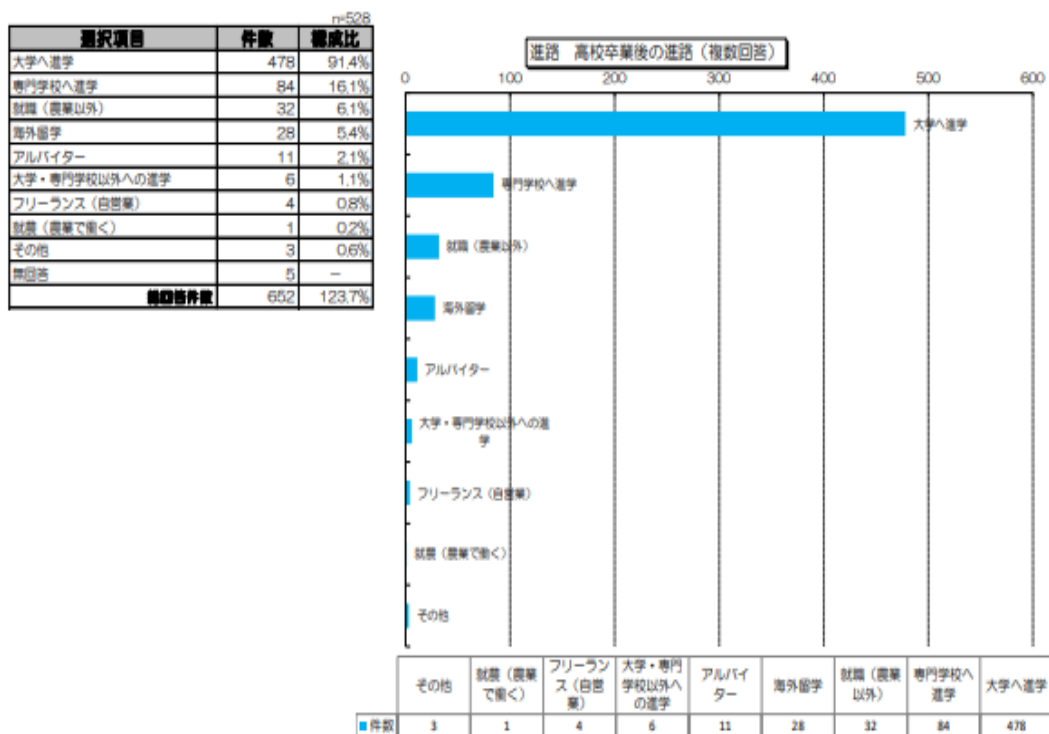
●高齢者と接した経験では、【ある】が 99.6%、【ない】が 0.2%、【機会があれば接してみたい】が 0.2%となった。歳を取ると誰もが高齢者になるため、接点が多い。

●高齢者と接した場面では、524 名の方の回答となっているが、【家族・親族に高齢者がいる】が最も高く 91.6%となった。一方、【福祉施設を見学して接した】が 27.1%、【その他学校の授業で接した】が 23.1%となったが、教育環境の場面では、前項の障がい者との接点よりも多くなっているようだ。

●記述回答では、「アルバイト」での場面が多くなっている。その他では、やはり親族関係が多く挙げられている他、「道で声をかけられた」等が見られる。

6) あなたの将来についての回答内容

①高校卒業後の進路（複数回答）



<その他の記述回答>

記述回答	属性（住校区、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
志望 特に書えていない	（新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある）
フリーター	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
	（赤市町志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）

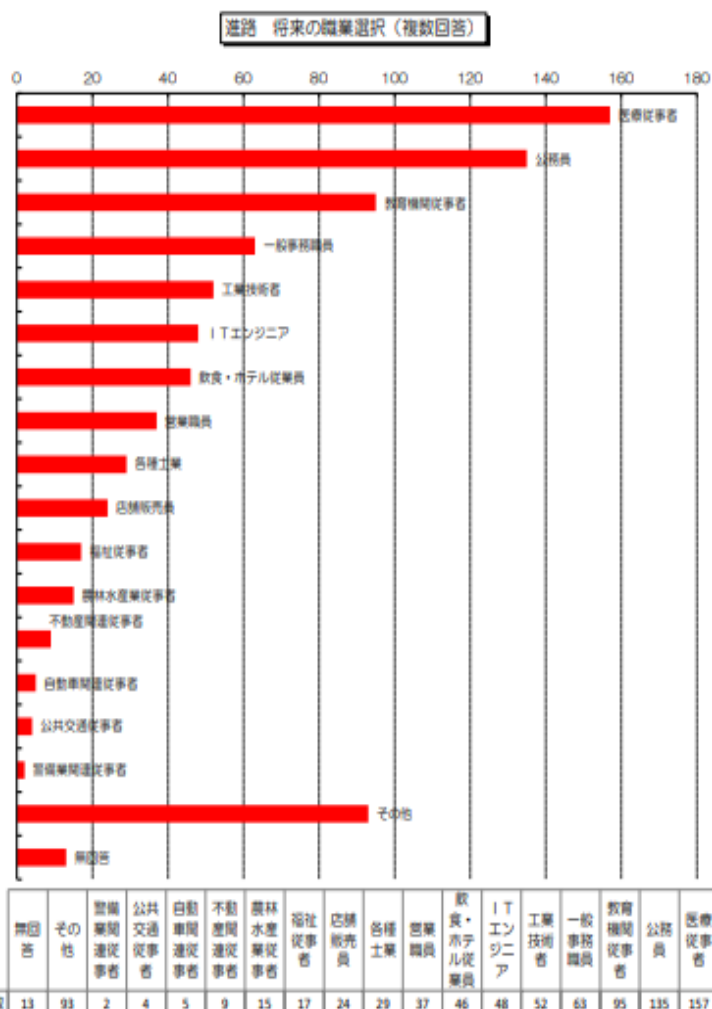
●次に、将来について聞いたところ、高校卒業後の進路では、【大学へ進学】が91.4%と、非常に高くなった。続く【専門学校への進学】は16.1%、【大学・専門学校以外への進学】が1.1%となっている。一方、【就職（農業以外）】は6.1%、【就職（農業で働く）】も1名確認出来た。

②将来の職業選択（複数回答）

n=528

選択項目	件数	割合
医療従事者	157	30.5%
公務員	135	26.2%
教育機関従事者	95	18.4%
一般事務員	63	12.2%
工業技術者	52	10.1%
ITエンジニア	48	9.3%
飲食・ホテル従業員	46	8.9%
営業員	37	7.2%
各種士業	29	5.6%
店舗販売員	24	4.7%
福祉従事者	17	3.3%
農林水産従事者	15	2.9%
不動産関連従事者	9	1.7%
自動車関連従事者	5	1.0%
公共交通従事者	4	0.8%
芸術関連従事者	2	0.4%
その他	93	18.1%
無回答	13	-
合計（無回答除く）	844	161.4%

●将来の職業選択では、【医療従事者】が最も高く30.5%、【公務員】が26.2%、【教育機関従事者】が18.4%、【一般事務員】が12.2%の順となった。【福祉従事者】は17名で3.3%に留まっている。人手不足が深刻化する福祉業界においては、魅力的な職場作り・待遇改善など、早急な対策が求められる状況である。



<その他の記述回答>

記述内容	属性（性別名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
デザイン系の職業	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
まだわかりません。	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
未定	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
決まっていない	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
実業高校	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
音楽関係	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
法人	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
単独店	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
民間関係	（新川高等学校、あまり興味がない、少し興味がある）
メディア関係	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
決まっていない	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
決まっていない	（新川高等学校、あまり興味がない、無回答）
経営者、経営コンサルタント	（新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない）
決まっていない	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
経営者	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
音楽関係	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
特に決めていない	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
まだ未定	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）
経営（イラスト・動画・テレビ・音楽等）	（新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない）
派遣かんぽ	（新川高等学校、全く興味がない、あまり興味がない）
音楽系	（新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある）
特に決まっています	（新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない）
無回答	（新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない）

記述内容	学生（専攻名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
未定	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
音楽関係	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
未定	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
未定	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
航空会社関係	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
美ようし	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
動物看護士	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
美容関係	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
未定	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
ボーカロイドプロデューサー（ボカロP）	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
わからない	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
読書	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
まだ分からないです。	(新川高等学校、無回答、無回答)
編纂者	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
航空業界	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
美容系	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
デザイン系	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
パティシエ	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
栄養関係	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
未定	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
花火師	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
サービス業	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
動物に関わる仕事	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
プライダム関係	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
映像系	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
未定	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
駅店	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
まだ決まっていない	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
まだ決めてない	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
未定	(新川高等学校、全く興味がない、あまり興味がない)
音楽関係	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
未定	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
まだ決まっていない	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
保育士	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
航空業界	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
工学に関わる人	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
薬剤師	(新川高等学校、少し興味がある、全く興味がない)
エンタメ関係	(新川高等学校、少し興味がある、無回答)
美容系の職業	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
デザイナー	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
編纂者等の文章関連業	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
語学（日本語）に関する仕事（研究）	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
化学技術者	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
理学療法士	(新川高等学校、少し興味がある、大々興味がある)
キャビンアテンダント	(新川高等学校、あまり興味がない、少し興味がある)
薬剤師	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
研究者	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
航空機の整備士	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
未定	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
未定	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
美容師	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
決まっていない	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
臨床心理士	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
未定	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
デザイン系	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
インテリアコーディネーター	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
決めていない	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
未決定	(新川高等学校、あまり興味がない、少し興味がある)
管理栄養士	(新川高等学校、無回答、あまり興味がない)
明確に希望する職業がない	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
航空業界	(余市紅志高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
コンカフェ	(余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
スポーツトレーナー	(余市紅志高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
イラストレーター	(余市紅志高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
デザイン系	(余市紅志高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
声優	(余市紅志高等学校、あまり興味がない、無回答)
食品の製造工場	(余市紅志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
セラピードッグハンドラー・動物関係の仕事	(余市紅志高等学校、少し興味がある、全く興味がない)

7) ご意見・ご要望に関する回答内容

①社会福祉に関する意見、札幌心療福祉専門学校への要望等（記述回答） *「特になし」は除外

記述回答	属性（性別名、社会福祉への関心、社会福祉士への興味）
社会福祉について多くの人に知ってもらふ機会が必要だと思う。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
近づく若者へのケア等	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
福祉について、知らないことがたくさんあることに気がきました。気になったことから、調べてみようと思います。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
福祉従事者の賃金を上げるべきだと思う。	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
親を失った子供や親に暴力をふるわれるなど苦しんでいる子供への支援をより活発に行ってほしいです。学習をおさえてほしい。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
社会福祉は言葉としては知っているけど幅が広くてあまり理解しきれないものであまり興味がない感じがします。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
社会福祉についてしっかり知っていることはないのですが、知りたいなと思いました。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
社会福祉はありがたいものだと思う。	(新川高等学校、あまり興味がない、少し興味がある)
社会福祉を充実させるためには、地域や個人での取り組みや積極的に参加することが大切だと思います。なので、自ら機会を作って積極的に参加したいと思いました。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
よく介護施設の前とか通るけど、いつも楽しそうにしているから、これからも頑張っていきたいです。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
社会福祉というものを知らなかったのでも調べてみたいと思った。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
社会福祉について、小さい子にもわかってもらえる取り組みがあると嬉しいなと思いました。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
福祉系の仕事についてられる機会が学校などで増えると嬉しいです。	(新川高等学校、大変興味がある、大変興味がある)
言葉で社会福祉について知ることがあまりないので、学校で知る機会を多くもらってほしいです。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
どんな種類の職業があってどんな資格が必要なのか知りたいです。	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
社会福祉について興味があるような、活動をしてほしい。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
4の①の2を〇すると、障がい者に興味がない人だと思われるため気分を悪した。	(新川高等学校、あまり興味がない、全く興味がない)
高齢者が安心して暮らせる施設にしてほしい。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
お金がかかる。	(新川高等学校、全く興味がない、全く興味がない)
福祉に関わる機会があったらいいと思います。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
社会福祉の恩恵を増やす	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
将来（自分たちが高齢者の代に）年金はもらえますか？	(新川高等学校、少し興味がある、全く興味がない)
高校生のような若者は「福祉には関係ない」と思っている人が多いと思う。	(新川高等学校、少し興味がある、全く興味がない)
学校の授業で福祉施設にいけるようになったら行きたいです。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
自分は理学療法士になりたいと考えています。 障は違えど、社会福祉における役割、必要性は同じだと思います。 自分も社会福祉に興味できるようにしたいと思いました。	(新川高等学校、少し興味がある、少し興味がある)
家族に障がいがある人がいるので、もっと知ってみたいと思いました。	(新川高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
障がい者でも安心して働ける場所を作ってください。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
社会福祉は一見限られた人たちにしか関係のないことだと思っていたが、本当は私たちにも深く関わっているんだなと思いました。	(新川高等学校、あまり興味がない、あまり興味がない)
バリアフリー圏のツアーの本番が近くなってきてドキドキしています・・・！社会福祉士と職業は多分初めてみました。	(余市町志高等学校、少し興味がある、あまり興味がない)
これから、授業で福祉社会福祉について教えてください。	(余市町志高等学校、大変興味がある、少し興味がある)

●社会福祉全般に関する意見、札幌心療福祉専門学校への要望については、

- ・「社会福祉」に関する知識・理解・経験が不足している
 - 情報発信の重要性
 - 日常的な社会福祉と接する機会の増加
 - もっと福祉について学びたい、福祉施設を見学したい
- ・子供、若者への支援を充実して欲しい
- ・将来の年金受給不安 などなど

の意見が寄せられている。冒頭の設問で「社会福祉にあまり興味がない」と回答している生徒達も、知らなかったので調べてみたい等、新たな関心事になっている回答も見られた。その意味では、高等学校までの教育の中で、社会福祉に触れる機会を増やす必要があるのではないだろうか。

3. クロス集計分析

1) 【高等学校の生徒】の意向と各設問の関係

「社会福祉士に興味がありますか?」と「高校卒業後の進路について」の関係

選択項目	総計		大変興味がある		少し興味がある		あまり興味がない		全く興味がない		その他		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
大学へ進学	478	73.3%	13	65.0%	69	70.4%	285	75.6%	101	72.1%	1	33.3%	9	64.3%
専門学校へ進学	84	12.9%	4	20.0%	15	15.3%	44	11.7%	17	12.1%	1	33.3%	3	21.4%
大学・専門学校以外の進学	6	0.9%	0	0.0%	1	1.0%	2	0.5%	3	2.1%	0	0.0%	0	0.0%
就職（農業以外）	32	4.9%	1	5.0%	4	4.1%	19	5.0%	7	5.0%	0	0.0%	1	7.1%
就職（農業で働く）	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
フリーランス（自営業）	4	0.6%	0	0.0%	2	2.0%	0	0.0%	2	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
アルバイト	11	1.7%	1	5.0%	4	4.1%	3	0.8%	3	2.1%	0	0.0%	0	0.0%
海外留学	28	4.3%	1	5.0%	2	2.0%	19	5.0%	5	3.6%	1	33.3%	0	0.0%
その他	3	0.5%	0	0.0%	1	1.0%	1	0.3%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
無回答	5	0.8%	0	0.0%	0	0.0%	3	0.8%	1	0.7%	0	0.0%	1	7.1%
合計	652	100.0%	20	100.0%	98	100.0%	377	100.0%	140	100.0%	3	100.0%	14	100.0%
回答者数（合計-無回答）	647		20		98		374		139		3		13	

「社会福祉士に興味がありますか?」と「将来、どのような職業を希望していますか?」の関係

選択項目	総計		大変興味がある		少し興味がある		あまり興味がない		全く興味がない		その他		無回答	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
工業技術者（建築士・測量士等）	52	6.2%	2	9.1%	5	3.8%	37	7.3%	8	4.9%	0	0.0%	0	0.0%
医療従事者（医師・看護士等）	157	18.6%	11	50.0%	26	20.0%	91	17.9%	26	16.0%	0	0.0%	3	18.8%
福祉従事者（社会福祉士・介護福祉士等）	17	2.0%	3	13.6%	8	6.2%	4	0.8%	1	0.6%	0	0.0%	1	6.3%
教育機関従事者（保育士・教員等）	95	11.3%	0	0.0%	16	12.3%	59	11.6%	19	11.7%	1	16.7%	0	0.0%
各種士業（弁護士・税理士等）	29	3.4%	1	4.5%	5	3.8%	17	3.3%	5	3.1%	1	16.7%	0	0.0%
ITエンジニア	48	5.7%	1	4.5%	6	4.6%	31	6.1%	9	5.6%	1	16.7%	0	0.0%
一般事務職員	63	7.5%	0	0.0%	13	10.0%	38	7.5%	11	6.8%	0	0.0%	1	6.3%
農業職員	37	4.4%	0	0.0%	7	5.4%	25	4.9%	5	3.1%	0	0.0%	0	0.0%
店舗販売員	24	2.8%	0	0.0%	0	0.0%	18	3.5%	6	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
飲食・ホテル従業員	46	5.5%	0	0.0%	7	5.4%	27	5.3%	10	6.2%	0	0.0%	2	12.5%
自動車関連従事者	5	0.6%	0	0.0%	0	0.0%	4	0.8%	0	0.0%	1	16.7%	0	0.0%
公共交通従事者	4	0.5%	0	0.0%	1	0.8%	2	0.4%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
不動産関連従事者	9	1.1%	0	0.0%	1	0.8%	7	1.4%	0	0.0%	1	16.7%	0	0.0%
警備関連従事者	2	0.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	0.2%	1	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
農林水産業従事者	15	1.8%	0	0.0%	1	0.8%	10	2.0%	3	1.9%	0	0.0%	1	6.3%
公務員	135	16.0%	2	9.1%	25	19.2%	79	15.6%	27	16.7%	1	16.7%	1	6.3%
その他	93	11.0%	2	9.1%	8	6.2%	51	10.0%	28	17.3%	0	0.0%	4	25.0%
無回答	13	1.5%	0	0.0%	1	0.8%	7	1.4%	2	1.2%	0	0.0%	3	18.8%
合計	844	100.0%	22	100.0%	130	100.0%	508	100.0%	162	100.0%	6	100.0%	16	100.0%
回答者数（合計-無回答）	831		22		129		501		160		6		13	

●「社会福祉士への関心」と「高校卒業後の進路」をクロス集計したところ、興味のある19名が専門学校への進学も検討している状況であった。

●更に、「社会福祉士への関心」と「将来の職業選択」のクロス集計では、11名が【福祉従事者】を検討している状況である。また、【医療従事者】志望の37名、【教育機関従事者】志望の16名、【一般事務員】志望の13名、【公務員】志望の25名などが、社会福祉士の資格に興味を持っていることが分かった。

4. まとめ

1) 本調査における回答内容

①回答者に関する内容

- ・在校名では、【新川高等学校】が93.8%、【余市紅志高等学校】が6.3%、の合計528名となっている。
- ・学年では、【1年生】が最も高く58.3%、【2年生】が35.0%、【3年生】が6.0%で続いている。

②「社会福祉」に関する興味・関心についての回答

- ・社会福祉のイメージでは、【高齢者介護に関すること】が65.7%、【生活を支えるもの】が58.3%、【障がい者支援に関すること】が52.0%と、それぞれ半数を超え、続く【社会を良くするもの】が45.5%、【年金や社会保険に関わること】が43.5%と、上位となったため、高校生における主要なイメージは、上記に集約されるのではないだろうか。中でも、【誰もが関わること】が27.1%と低くなったため、年齢的にもあまり自分に関係する分野では無いイメージとなっているようだ。
- ・社会福祉への興味・関心では、【あまり興味がない】が55.9%と、最も高くなった。一方、逆に【大変興味がある】が1.8%、【少し興味がある】が34.1%と、全体の35.9%は、興味を持っている。

③医療・福祉に関する資格についての回答

- ・医療・福祉関連の資格についての知識では、【看護師】が98.5%、【薬剤師】が96.2%と、ともに9割を超えた。また、【理学療法士】が77.6%、【介護福祉士】が76.5%、【ホームヘルパー】が70.2%と7割以上、続く【診療放射線技師】が67.1%、【保健師】が57.4%、【ケアマネージャー】が54.1%、と続いた。【社会福祉士】は41.9%となったが、高校生の認知度がまだまだ高くないため、出前授業などで、社会的な役割を知ってもらう機会を増やすべきである。
- ・社会福祉士への興味・関心では、【あまり興味がない】が60.3%、【全く興味がない】が22.0%と、約8割の学生は関心を抱いていない。一方、【大変興味がある】が2.9%、【少し興味がある】が14.4%と、全体の17.3%は「社会福祉士」という資格に興味を持っていることが分かった。

④農福連携に関する認知度・関心度についての回答

- ・農福連携の認知度では、【言葉も意味もよく分からない】が89.0%と、約9割を占めた。ただ、全体の9名、1.7%は【言葉も意味も知っている】と回答しており、詳細データを確認すると、「新川高校」4名、「余市紅志高校」5名となっている。
- ・農福連携への興味・関心では、【大変興味がある】が6名で1.1%、【少し興味がある】が99名で18.8%と、全体の約2割が興味を持っていることが分かった。

⑤地域福祉に関する経験についての回答

- ・障がい者と接した経験では、【ある】が77.0%、【ない】が19.6%、【機会があれば接してみたい】が3.4%となった。

- ・障害者と接した場面では、約 7 割の 68.3%が【小中学校の特別支援クラスで接した】と回答している。一方、【友人・知人に障がい者がいる】が 27.0%、【家族・親族に障がい者がいる】が 12.1%と身近な環境を挙げた他、【福祉施設を見学して接した】が 10.1%、【その他学校の授業で接した】が 15.1%と、これまでの教育環境の中での機会も挙げられていた。
- ・記述回答では、「社会福祉の授業で接しました」が数件確認できる他、「私の住むマンションに障がいを持った方がいます」、「障がいの方が働くお店に行った」、「道で困っていたので話しかけた」など、日常的に接しており、地域移行が進んでいる状況が垣間見える。
- ・高齢者と接した経験では、【ある】が 99.6%、【ない】が 0.2%、【機会があれば接してみたい】が 0.2%となった。歳を取ると誰もが高齢者になるため、接点が多い。
- ・高齢者と接した場面では、【家族・親族に高齢者がいる】が最も高く 91.6%となった。一方、【福祉施設を見学して接した】が 27.1%、【その他学校の授業で接した】が 23.1%となったが、教育環境の場面では、前項の障がい者との接点よりも多くなっているようだ。
- ・記述回答では、「アルバイト」での場面が多くなっている。その他では、やはり親族関係が多く挙げられている他、「道で声をかけられた」等が見られる。

⑥あなたの将来についての回答

- ・高校卒業後の進路では、【大学へ進学】が 91.4%と、非常に高くなった。続く【専門学校への進学】は 16.1%、【大学・専門学校以外への進学】が 1.1%となっている。一方、【就職（農業以外）】は 6.1%、【就職（農業で働く）】も 1 名確認出来た。
- ・将来の職業選択では、【医療従事者】が最も高く 30.5%、【公務員】が 26.2%、【教育機関従事者】が 18.4%、【一般事務員】が 12.2%、の順となった。【福祉従事者】は 17 名で 3.3%に留まっている。人手不足が深刻化する福祉業界においては、魅力的な職場作り・待遇改善など、早急な対策が求められる状況である。

⑦ご意見・ご要望等に関する回答

●社会福祉全般に関する意見、札幌心療福祉専門学校への要望については、

- ・「社会福祉」に関する知識・理解・経験の機会が不足している
 - 情報発信の重要性
 - 日常的な社会福祉と接する機会の増加
 - もっと福祉について学びたい、福祉施設を見学したい
- ・子供、若者への支援を充実して欲しい
- ・将来の年金受給不安 などなど

の意見が寄せられている。冒頭の設問で「社会福祉にあまり興味がない」と回答している生徒達も、知らなかったので調べてみたい等、新たな関心事になっている回答も見られた。その意味では、高等学校までの教育課程の中で、社会福祉に触れる機会を増やす必要があるのではないだろうか。

⑧クロス集計分析

- ・「社会福祉士への関心」と「高校卒業後の進路」をクロス集計したところ、興味のある19名が専門学校への進学も検討している状況であった。
- ・更に、「社会福祉士への関心」と「将来の職業選択」のクロス集計では、11名が【福祉従事者】を検討している状況である。また、【医療従事者】志望の37名、【教育機関従事者】志望の16名、【一般事務員】志望の13名、【公務員】志望の25名などが、社会福祉士の資格に興味を持っていることが分かった。

2) 社会福祉に関する高等学校生の意識概要

<社会福祉に関する高等学校生の意識概要>

- 社会福祉に関する高校生のイメージは、【高齢者介護】65.7%、【生活の支え】58.3%、【障がい者支援】52.0%と高く、また、全体の63.9%が【興味がない】と回答していることから、自分達との関りをあまり感じていない傾向が見られる。
- 医療・福祉関連資格の認知度は、【看護師】が98.5%、【薬剤師】が96.2%と高く、以降【理学療法士】【介護福祉士】【ホームヘルパー】が続いている。【社会福祉士】については、全体の17.3%が興味を持っている。
- 農福連携の認知度は、9割以上が【よく分からない】と回答したが、1.7%は【言葉も意味も知っている】と回答した。
- 障がい者と接した経験者は77.0%で、障がい者と接した場面では、【小中学校の特別支援クラス】が約7割と最も高くなったが、【知人・友人・家族・親族に障がい者がいる】とした回答も多かった。また、日常生活の中で「働く障がい者」「同じマンションの住人」など地域移行の進展が確認できる。
- 高齢者と接した経験者は99.6%、高齢者と接した場面では91.6%が【家族・親族に高齢者がいる】と回答した。また、「福祉施設見学」や「授業」において、高齢者の方が、多く取り上げられている。
- 高校卒業後の進路は、9割以上が【大学進学】、16.1%が【専門学校進学】と回答。就職は6%程度。
- 将来の職業選択では、30.5%が【医療機関】、26.2%が【公務員】、18.4%が【教育機関】、12.2%【一般事務】と順に高い。【福祉業界】志望は3.3%に留まった。
- 記述回答では、社会福祉全般に関する知識・理解・経験の機会不足が挙げられており、高等学校までの教育課程で、もっと、多く取上げられることが期待される。

上記のことから、①高等学校生にとっては、【社会福祉】は自分達との関係性が希薄であると感じていること、②「福祉施設見学」や「関連授業」の機会が、社会福祉と触れる貴重な時間となっていること、③普段の生活で関わる看護師、薬剤師などと違って「社会福祉士」は役割が理解されにくいこと、などが挙げられる。その意味では、高校までの教育課程の中で、社会福祉のテーマをもっと多く取り上げて頂くために、連携授業の推進や出張講座の開催など、一層の工夫が必要であることをご指摘申し上げたい。

＜添付資料＞ 調査票

文科科学省委託事業「地域産業中核の人材養成事業」専門学校と高等学校の有機連携プログラムの開発・実証の取り組み

【社会福祉に関するアンケート（高校生向け）】

社会福祉士の養成を目指す札幌心療福祉専門学校では、「地域活性化のための農福連携人材養成事業」が、文科科学省委託事業「地域産業中核の人材養成事業」（6ヵ年事業）に採択されました。本調査では、この社会福祉全般に関する皆様の興味・関心について調査し、文科科学省委託事業への成果物として報告書作成のために活用させていただきます。

是非、気軽な気持ちでリラックスして、率直なご回答をお願いいたします。

【調査票の回答にあたって】

- 本調査につきましては、「在学中の高校生」にご記入をお願い致します。
- 質問は、①該当する選択肢に「○」を付けるもの、②数値を記入するもの、③具体的な内容を記述頂くもの、がございます。
 - 「○」を付けて頂く質問では、回答が明確に分かるように「○印」をご記入願います。
 - 又「○」を付けて頂く質問には、選択肢から「一つだけ選ぶものと「いくつでも（複数）」選んで頂くものがございます。それぞれの指示に従ってご回答をお願い致します。
- 答えにくい質問、答えたくない質問については、記入する必要がありません。答えられる範囲でお願い致します。

0) 【あなたご自身についてお伺いいたします】 *選択肢問には「○」を、記述回答欄には内容をご記入下さい

① 高校何年生ですか？	(1) 1年生	(2) 2年生	(3) 3年生
-------------	---------	---------	---------

1) 【社会福祉に関する興味・関心度について】 *選択肢問には「○」を、記述回答欄には内容をご記入下さい

①	「社会福祉」という言葉のイメージを教えてください <いくつでも>			
	(1) 誰もが関わること	(2) 生活をささえるもの	(3) 社会をより良くするもの	(4) その他(記述) :
②	あなたは「社会福祉」に興味がありますか？ <一つだけ>			
	(1) 大変興味がある	(2) 少し興味がある	(3) あまり興味がない	(4) 全く興味がない
③	以下について知っている(聞いたことがある)資格はどれですか？ <いくつでも>			
	(1) 看護師	(2) 保健師	(3) 薬剤師	(4) 診療放射線技師
	(5) 臨床心理士	(6) 臨床検査技師	(7) 臨床工学技士	(8) 理学療法士
	(9) 作業療法士	(10) 言語聴覚士	(11) 視能訓練士	(12) 社会福祉士
	(13) 介護福祉士	(14) 精神保健福祉士	(15) ホームヘルパー	(16) ケアマネージャー

「社会福祉士」は、地域で暮らす様々なハンディキャップを抱える方々からの相談に応じて課題を解決し、地域の生活基盤を支える重要な役割を担っています。

②	上記「③」のうち、国家資格である「(12)社会福祉士」に興味がありますか？ <一つだけ>			
	(1) 大変興味がある	(2) 少し興味がある	(3) あまり興味がない	(4) 全く興味がない
	(5) その他(記述) :			

2) 【農福連携に関する認知度・関心度について】 *選択肢問には「○」を、記述欄には内容をご記入下さい

北海道内の各地において、農業の人手不足を地域の障がい者がお手伝いする「農福連携」の取組が少しずつ広がっています。基本的な形態は、福祉施設の職員が農場に同行し、作業指示は職員が行うことが一般的です。また、福祉施設の中に作業を持ち込み、箱折・計量・袋詰め等の作業を受託するケースもあります。

①	「農福連携」という言葉や意味をご存知ですか？ <一つだけ>		
	A 言葉も意味も知っている	B 言葉は知っているが詳細は分からない	C 言葉も意味もよく分からない
②	「農福連携」に関して興味はありますか？ <一つだけ>		
	(1) 大変興味がある	(2) 少し興味がある	(3) あまり興味がない
	(4) 全く興味がない		
	(5) その他(記述) :		

3) 【地域福祉に関する経験について】 *選択設問には「〇」を、記述回答欄には内容をご記入下さい

①	あなたは今までに、「障がいのある方」と接したことはありますか？ <1つだけ>		
	(1) ある	(2) ない	(3) 機会があれば、今後、障がいのある方と接してみたい (4) その他(記述)：
2	上記4) -①で「(1) ある」と答えた方は、どのような場面ですか？ <いくつでも>		
	(1) 家族・親族に障がい者がいる (4) ボランティアに参加して接した (7) その他(記述)：	(2) 友人・知人に障がい者がいる (5) 福祉施設を見学して接した	(3) 小中学校の特別支援クラスで接した (6) その他学校の授業で接した
③	あなたは今までに、「高齢者の方」と接したことはありますか？ <1つだけ>		
	(1) ある	(2) ない	(3) 機会があれば、今後、高齢者の方と接してみたい (4) その他(記述)：
4	上記4) -③で「(1) ある」と答えた方は、どのような場面ですか？ <いくつでも>		
	(1) 家族・親族に高齢者がいる (3) ボランティアに参加して接した (6) その他(記述)：	(2) 友人・知人に高齢者を介護している家庭があった (4) 福祉施設を見学して接した	(5) その他学校の授業で接した

4) 【あなたの将来について】 *選択設問には「〇」を、記述回答欄には内容をご記入下さい

①	あなたは高校卒業後の進路についてどのように考えていますか？ <いくつでも>		
	(1) 大学へ進学(道内) (4) 専門学校へ進学(道外) (7) 高校卒業後、企業へ就職 (10) 職人等の修行 (13) その他(記述)：	(2) 大学へ進学(道外) (5) 大学・専門学校以外への進学 (8) 自営業で開業 (11) 親の家業を継ぐ	(3) 専門学校への進学(道内) (6) 海外留学 (9) 高校卒業後、アルバイトになる (12) まだ分からない
2	あなたは、将来、どのような職業を希望していますか？ <いくつでも>		
	(1) 工業技術者(建築士・測量士等) (3) 福祉従事者(社会福祉士・介護福祉士等) (5) 各種士業(弁護士・税理士等) (8) 営業職員 (11) 自動車関連従事者 (14) 警備業関連従事者 (17) その他(記述)：	(2) 医療従事者(医師・看護師等) (4) 教育機関従事者(保育士・教員等) (6) ITエンジニア (9) 店舗販売員 (12) 公共交通従事者 (15) 農林水産業従事者	(7) 一般事務職員 (10) 飲食・ホテル従業員 (13) 不動産関連従事者 (16) 公務員
3	あなたは、将来の就職の勤務地は、どのように希望していますか？ <いくつでも>		
	(1) 北海道で働きたい (4) その他(記述)：	(2) 東京など道外で働きたい	(3) 海外で働きたい

5) 【社会福祉全般に関するご意見・要望等】 *ご意見をご記入願います(自由記述)

自由記述	
------	--

～ご協力ありがとうございました～

本調査の内容は、全て調査者の厳重な管理のもとで記号化され、統計的に分析されます。
ご記入頂きました特定情報につきましては、当校の個人情報保護方針に従い、取り扱い致します。

学校法人西野学園 札幌心療福祉専門学校 札幌市中央区北2条西20丁目2-28

TEL011-643-8241 FAX011-643-8292

E-mail : psw-hi@nishino-gac.jp

令和4年度 農福連携 スタートアップ研修

参加費
無料

～これから始める農福連携～

「農福連携に興味があるけれど、よくわからない。」という福祉関係者・農業関係者を対象に、農福連携に対して福祉側・農業側が感じている疑問や不安を解消し、農福連携に対して前向きな意識を持っていただくための基礎研修を開催します！

日時 会場等	①	②	③
	福祉関係者向け 座学研修 ▷ Zoom Meetingsによる配信	フィールドワーク基礎研修 ▷ 公益財団法人道央農業振興公社	農業関係者向け 座学研修 (株)ヤマチコーポレーション6階セミナールーム(詳細裏面) 及びZoom Meetingsによる配信《ハイブリッド開催》
	8月24日(水)	9月14日(水)	11月22日(火) 13:00～16:00
	開催終了! ご参加ありがとうございました。	開催終了! ご参加ありがとうございました。	

対象者 農福連携に関心のある農業関係者
(農業者、JA等農業関係機関職員、市町村農業主務課職員など)

内容 《定員：会場20名、配信制限なし》

●農福連携の概要について	北海道農政部農業経営課
●障がい者と障がい福祉サービスについて	【講師】学校法人西野学園札幌心療福祉専門学校 学科長 飯島 英幸氏
●農業と障がい者について	【講師】合同会社竹内農園 代表 竹内 巧氏
●質疑応答	【進行】一般社団法人れんけい 理事 大泉 浩一氏

各講師紹介

<p>学校法人西野学園 札幌心療福祉専門学校 学科長 飯島 英幸 氏</p> <p>福祉施設のソーシャルワーカー、高齢者のケアマネジャーを経て、平成18年11月から札幌心療福祉専門学校の専任教員としてソーシャルワーカーの人材育成に取り組んでいる。 平成23年～26年まで北海道社会福祉士会の理事を務めた経験もある。</p>	<p>合同会社竹内農園 代表 竹内 巧 氏</p> <p>民間企業、福祉事業所での勤務を経て、平成26年に北広島市で新規参入にて就農。就農当初から農福連携に取り組む。 農林水産省「農福連携技術支援者育成研修」で講師を担当する等、農福連携分野で幅広く活躍している。一般社団法人れんけいの理事も務めている。</p>	<p>一般社団法人れんけい 理事 大泉 浩一 氏</p> <p>平成30年に「農業」と「福祉」を繋ぐための組織「一般社団法人れんけい」を立ち上げ、理事に就任。道内の農福連携の取組に数多く関わっている。 「北海道障がい者就労支援センター」のマッチング事業コーディネーターを長年務めている。</p>
--	--	--

【別紙3】

令和4年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整業務

第1回合同会議議事録

新規2団体事業概要紹介

有識者会議からの指摘事項について（テーマごとに受託団体、有識者よりコメント）

- ・事業の継続性を見据えた、連携協同
- ・専門学校機能と役割の再確認と情報発信
- ・ビジョン、ゴールの設定

受託団体間の情報共有（オンライン講座の活性化）

今後のスケジュール案について

■2022年9月15日（木）

■参加者（敬称略）

<受託団体>

穴吹学園：福田稔、加藤猛、岩澤正俊ほか

穴吹学園コーディネーター：OIKAZE 相原、DaRETO 城石

KBC学園インターナショナルリゾートカレッジ：近藤賢宏、仲宗根真、喜納政一

沖縄専門人材開発研究会：宮里智樹、事務局ほか

KBC学園沖縄ペットワールド専門学校：吉田剛、伊禮嘉本

小山学園専門学校東京工科自動車大学校：佐々木章、影山裕介

日本eスポーツ学会：筧 誠一郎

宮崎総合学院宮崎情報ビジネス医療専門学校：尾崎勝一、富山和年、花盛和也、飯干賢、馬場隆、古川

京都コンピュータ学園京都コンピュータ学院京都駅前校：寺下陽一、谷水肇

国際総合学園新潟会計ビジネス専門学校：川島淳子、藤井貴志

NABIコーディネーター：丸善 CHI ホールディングス 三好晶子

西野学園札幌心療福祉専門学校：飯島英幸、幡直人

仙台北学園仙台リハビリテーション専門学校：根本峰人、小畑陽平、櫻井

智晴学園琉球リハビリテーション学院：福田聡史、井上、天久

福岡歯科衛生専門学校：山本順一

福岡歯科衛生専門学校コーディネーター：原田千賀子

東京リーガルマインド：岡本史子、川崎正人

日本航空大学校北海道：佐々木智

<有識者会議メンバー>

大正大学地域創生学部教授：浦崎太郎

福岡大学人文学部教授：植上一希

専修大学商学部教授：渡邊隆彦

岡山県総合教育センター研修部高校教育班指導主事：川崎好美

地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事：岩本悠

開志専門職大学アニメ・マンガ学部教授：成田兵衛

日経 BP：高津尚悟、高橋健太郎

<文部科学省>

望月香里、新川佑

(事務局) 日経 BP：岩居浩朗ほか

日経 BP・高津——最初に文部科学省から挨拶をお願いしたい。

文部科学省・望月氏——このように一同に介する機会はなかなかない。自分のところだけでは解決できないことや互いの事例、先生方の意見等を伺いながら、事業をより有意義に発展させていってもらいたい。

日経 BP・高津——今年度第1回の合同会議になるが、昨年度末に契約が整い今回から参加の2団体がある。それぞれ自己紹介および、簡単な事業概要を2、3分で話してほしい。

【新規2団体の事業概要紹介】

日本航空大学校・佐々木氏——事業の内容としては、航空業界の人材不足、専門学校での中途退学を解決するという部分で、航空業界に関わる者としてこの事業のプログラムをつくっている。航空業界の団塊の世代による退職や人口減、少子高齢化などによって、以前から人材不足というものが懸念されている。その反面、LCCによるビジネススタイルによって路線が増えた。北海道でいうと、2019年から道内7空港が民営化されており、空港やその施設が充実する中で、やはり人材不足というものが課題となってきている。その辺りを解決できるプログラムを考えている。

もう一つ、入学をしてから理想と現実にギャップを感じて、辞めていく学生が増えている。中途退学者を減らすためにも、高校と専門学校、企業、行政と連携し、高校の段階から航空業界を知ってもらうという部分で、教育カリキュラムをつくり上げていく。

東京リーガルマインド・岡本氏——本事業は電気通信業界での人材育成。電子通信業界では、工事、保守点検、検査、あらゆる分野でIT化している。携帯電話が普及した現代で、電気通信設備というのは生活に不可欠なインフラとなっている。売上高も5兆円規

模の業界。さらにその中で新規通信キャリアの参入、5G 基地局の整備が急がれるといった状況にある。

一方、国土交通省の調査によれば、成長も期待できる分野にもかかわらず、就業人口が減少傾向にある。「建設＝危険」といったイメージが伴うこともあり、就職先として敬遠される。特に 29 歳以下の若年者の割合が減ってきており、人材不足が深刻になってきている状況がある。こういった背景から本事業では、情報系の専門学校と工業高校連携により、新卒人材を業界に輩出するべく、業界企業とコンソーシアムを編成して、人材育成カリキュラムの開発、新卒採用、関連教育のプラットフォームの構築を骨子とする。高校教育から専門学校進学、就職後のキャリアパスを明確にし、入社後の定着支援までを含めた人材育成づくりを、本事業の概要としている。

日経 BP・高津——今年度から新たにこの 2 団体が仲間になる。今後もいろいろなかたちで情報交換等をしつつ、この合同会議を通じて高専接続の事業そのものが、よいかたちになるように進めたい。

【有識者会議からの指摘事項と議論の進め方】

本日のメインの議題。この会議に先立って有識者の先生方に、今年度の皆さんの事業計画書および、第 1 回目のヒアリング内容（今年度の事業内容確認）を見ていただき、その中から、ここはきちんと目線合わせをしておいたほうがいいのではないかという議論のためのテーマをいただいた。それに従って、皆さんから取り組み内容についての話をしていただき、そこに対して有識者の先生方からコメントをいただくかたちで進めていきたい。

最初のテーマは、高専接続の事業を進めていくうえで、主に高等学校との連携をきちんとやっていかないといけない。連携協働の仕方について議論をしたい。

【事業の継続性を見据えた、連携協同】

日経 BP・高橋——すでにヒアリング等でも確認し、受託団体の皆さまもいろいろ悩んでいるのは十分理解しているつもりだ。そのうえで有識者の方々から出てきた意見などをまとめて、議事次第にも書いてある通り。

まず大きく 2 つに分かれる。①高校と専門学校の連携、②企業と行政の連携（出口や強力なバックアップ体制）。

高校との連携のところで、なかなか高校に理解されない。一部、熱心な先生がいるというところはあるが、それが全体に浸透しているかがポイントになる。高校の新学習指導要領という縛りとの兼ね合いをどうするか。専門学校は従来も出前授業のようなかたちで、高校と関わっているところが多いと思われるが、今回の事業ではそれとどまってはいけない。高校の先生方に専門学校のノウハウをどのように伝えていくかがポイントではないか。

また、これは直接連携ではないが継続という観点でいうと、専門学校自体がこの事業をできる体制ができてきているかを気になるという意見もあった。

まずは高校と専門学校の連携に関して、今年から新たな取り組みをしている2校に話を聞きたい。

1校目は琉球リハビリテーション学院。今年度から高校の分科会を設置した。背景や工夫したところ、課題といった辺りを話してほしい。

2校目は仙台北学園。高校というよりも特別支援学校との連携になるが、教員同士や生徒同士、それに加えて特別支援学校間との連携も検討している。取り組みや、その取り組みにあたっての課題、現状を話してほしい。

仙台北学園・根本氏——1点目は教職員との連携。やはり通常指導するのは高校側の現場の教職員の先生。その方々の理解を得るといえるのは重要なことだ。ただ単純に、この事業があるのでぜひ会議に参加してくださいというだけではなかなか現場の先生の理解も難しい。また、上から言われたことをやろうという程度の理解で終わってしまうのが懸念された。

私どもは幸いリハビリテーションの学校なので、先生方とのコミュニケーションを取る一つとして、肩こりや腰痛予防などのリハビリを、高校の先生方に体験してもらった上で、本事業の主旨を理解してもらい取り組みをしている。

2点目は支援学校間。宮城県は高等学園が3つあり、ある程度エリアに分かれている。支援学校もそれぞれ職業教育に力を入れているが、障害を持っている方が自分で高等学校を選ぶという状況の中で、周りと学生数を取り合うとまでは言わないが、やはりある程度その辺の壁がある。

そういった意味ではまだまだ連携がないということだったので、本事業を行う高等学園で実証講座をやる際に、他の支援学校の教職員の先生方を呼び、実際にそこで見てもらう。ほかの支援学校では通常どのような取り組みをしているのか、本事業はどのようなことをやっているのかという授業参観的型のものを本年度実施予定。

日経BP・高橋——2つ目のところは参考になる。本事業は水平展開を最終目的としている。参加している専門学校以外にも展開していくということが目標の一つだ。その際に競合してしまうということもあるかと思うが、何とかそこを乗り越えて実現してほしい。

続いて琉球リハビリテーション学院から、高校の分科会を設置して体制変更した辺りの話を話してほしい。

琉球リハビリテーション学院・福田氏——高校の分科会を設置した理由について。昨年度の実証校と協力校も含め各高校と聞き取りの調査や、教育開発プログラム、ニーズに

ついても話をしながら、今年1年目の教育プログラムの開発はできた。その中で高校の種別（本学院でいうと福祉科、普通科、総合学科）が混在しているという状況があった。高校に福祉科があるところに関しては、同じような流れで教育プログラムをつくっていけるが、各高校のカリキュラムに応じた内容でつくる。まず高校の種別に合わせて分科会を設置し、その中で高校同士共通しているものを情報共有しながら、共通した教育開発プログラムを開発していく。

今後の課題は、福祉科、普通科、総合学科それぞれで、教育プログラム、実証について分科会で進めていき、それを実際に共有しながらプログラムの開発をしていくかということだ。

日経 BP・高橋——学科が混在しているところはほかの専門学校の事例もあるので、その辺りも共有させてほしい。

岡山県総合教育センター・川崎氏——今は岡山県総合教育センターにいるが、昨年まで高等学校、商業高校におり、商業科の教諭として20年ほどやってきた。昨年は高校3年生の担任だったので、全国各地の専門学校に世話になっている。職は変わったが、高校現場の視点で話をさせてほしい。

やはり新しい学習指導要領になり、現場はどの教科についても、どういう授業をすればいいか模索している。それに加えて新しい評価の方法も入ってきている。指導と評価の一体化が、高校の大きなテーマになっている。そのことも踏まえて「今日は5時間これをしたらいい」という考えではなく、単元を通してどういう力を身につけたいかということを中心に高校現場は考えていくべきだ。そんな中で専門学校の先生方の知識や、専門学校の設備などは非常に魅力的だ。高校の教員も勉強させてほしい。また、生徒にどのような資質能力を身につけさせたいかということを中心に、高校の現場と一緒にしっかり考えてほしい。

大正大学・浦崎氏——困っていることの本質は高校の先生たちも一緒だ。学習に対して意欲的になれない、興味を持ってない。その大きな要因は、この先にどんな専門的な学問があるのか、今、目の前にあることが世の中とどうつながっているのか、働くこととどうつながっていくのか。これがイメージできなくて、目の前の学習に意欲を持ってない。特に脱落していった子たちが専門学校に行く傾向が非常に強い。これはとても残念なことだ。世の中に出て行くことが面白い、学ぶことが面白いという子がどんどん専門学校に行って、その先、社会で活躍していくことが健全な社会の在り方ではないか。もっと長期的なスパンで考えると、世の中に関わっていくこと、学ぶこと、学んだことを世の中に活かしていくことが面白いという感覚を高校の時に見つけたら、まず18歳で専門学校に行く。キャリアチェンジは当たり前の世の中なので、何年か経ったら次はこんなこ

とをやってみたいと思って、また専門学校へ行く。また何年か活躍をして、また次の学びをしたいと思い、また専門学校へ行く。そういう学びの受け皿を専門学校がつくる。これがぜひお願いしたいことだ。そこをサポートしていくと、高校にも喜ばれるのではないか。

そのときの一つの観点だが、一つの学校だけだと高校生の多様性に対応できないので、いろいろな専門学校とタッグを組んで、より多様な生徒の興味、関心に応えていくというネットワークを地元につくっていく。これは専門学校同士の奪い合いではなく、専門学校のマーケットそのものを大きくしていくということにつながっていく。現時点でのマーケットを広げるだけでなく、将来的なマーケットも広げていくことになる。高校生に世の中と関わるとこんなに面白い、学ぶことはこんなに面白いということが伝わるような機会を、他の専門学校とタッグを組んで、高校の先生と一緒にやってつくるとよいのではないか。

福岡大学・植上氏——仙台リハビリテーション専門学校の話で共感を持って聞いた。やはり高校の先生たちに、このプログラムの意味を実感してもらうことがすごく大事だ。私が担当している福岡歯科衛生専門学校も、動画を作り、メディアでも紹介されたと聞いている。こうした効果が高校の先生たちに伝わっていくと、こういうプログラムが面白い、やったらいいのではないかなとなる。そういったところからアプローチするのも、非常に大事なのではないか。

日経 BP・高津——穴吹学園の加藤さん、今の浦崎先生の話を受けて先に話してほしい。

穴吹学園・加藤氏——非認知能力の取り組みを紹介した資料を共有する。（画面共有：資料①）

非認知能力養成をどういうふうに汎用的なものにしていくか、というところを（今回の会議の）テーマにいただいた。私たちが初めての取り組みで模索段階ではある。岡山大学の先生から教えていただいている話でいくと、非認知能力も3つのレベルからなっている。訓練などで習得しやすい言葉遣いみたいなものと、価値観、自己認識、行動特性、性格気質、基本特性。この一番深いところを変えようと思ってもなかなか変わらない。一番浅いところはこれまでもやってきており、取り組みとして面白くない。非認知能力という部分で考え、価値観、自己認識、行動特性がどう変わっていくか、というところにフォーカスしてやっていくということで、今取り組みを始めているところだ。非認知能力というのは意識づけがすごく大事だ。押し付けるのではなく、本人が持っている価値観や自己認識行動特性というものを、本人に自覚的になってもらう。それを周りの人が働きかけていくことで、より望ましい行動結果が生まれる。ここを基本的な考え方に進めている。

具体的に行っているのが、まずは学生たちに身につけさせたい非認知能力を言語化、具体化している。これは教員の間で、ミーティングを重ねる中でかたちにしていっていったものだ。学生たちの意識づけというところで、振り返り、リフレクションというのを、頻繁に設けさせるということでやっているその途中の段階だ。身につけさせたい非認知能力というのは、自分と向き合う力、高める力、他者とつながる力、この3つにカテゴリーを大きく分けた。それぞれを5つの項目に分け、それが具体的にどういうふうになれば達成できているのか、というのをアセスメント項目に落とし込んでいっているところだ。

これを一番頻繁にしている学校では、学生たちは毎日、前日のことを次の日のショートホームルームの時間に振り返りをする。多くの学校はだいたい1週間に1回程度。今週どうだったかというので振り返りをしている。

具体的にどういうふうのリフレクションをさせているかという、グーグルフォームのアンケートを作って、15項目について学生が自己評価する。本来であれば、ここに教員からの働きかけもしたほうが良いと考えているのだが、まずはアセスメント項目を学生が毎日、あるいは1週間に一度必ず目にするというところで、こういう能力を私たちは身につけないといけない、というのを意識の中に持ってもらおうというところだけでもよい。

ゴールデンウィークが明けた頃から具体的に始めており、夏休みに入るまでの7月の段階で、赤い部分が非常に意識的にできた、青い部分がまあまあできた、黄色があまりできなかった、黒っぽいのができなかった、このように自己評価をさせている。上がったり下がったり、項目によって多少ばらつきはあるが、概ね2番目の「まあまあできた」までを含めれば、じわじわ上がってきているような傾向もある。一方、折れ線グラフで書いているのがこのアンケートに回答した学生数。最初の頃は教員の指導も行き届いて取り組みが活発だったが、徐々にアンケートに答える学生が減ってきている。これを今後どういうふう継続させていくか、というのは課題としてある。

日経 BP・高橋——西野学園、小山学園の順に、連携についての取り組みについて話してほしい。

西野学園・飯島氏——本校の事業としては、地域活性化のための農福連携人材育成をテーマにしている。福祉に関して、本校は専門職種を養成する学校なのでそちらの知識等はいろいろあるが、農福に関しては、農家の分野の専門的な部分が非常に弱いので、事業が始まる当初から、専門の知識を持っている行政の一つである、北海道庁の農政部にお願いをしている。福祉との連携というのもお互いにイメージが湧かない中で、こちらからまず農業体験ができる場所、札幌市内で農家を紹介してもらえないかというところから始まった。紹介を得て、引き続き情報共有というかたちでつながっている。

今年に入って農政部のほうで、農家や農業団体から、人材の農福連携をやっていきたいという相談を受けることがあり、今年から農福連携のスタートアップ研修というものをスタートさせる。その中で、ぜひ本校に協力してもらえないかということで、講師としてうちの教員が行く。実際にフィールドワークで、研修に参加した農家とも接する機会になる。そこからまた機会があれば、うちにも学生受け入れするというような横のつながり。予想もしていない効果、成果も出てきたということが非常によかった。

11月にも福祉の勉強というかたちで、農家向け、農業者向けに実施予定になっている。今後の課題としては、教育部分において農業に関する知識等を、これからまた詰めていかなければいけないので、このつながりをきっかけに何とかして、いろいろと協力してもらえそうな体制を構築していきたい。

日経 BP・高橋——引き続き、企業間連携というところで小山学園から。

小山学園・影山氏——2点ポイントを伝えたい。一つが、体制として継続性をどうやってつくっていくのか。やはりまずコアになる部分。当校、後援会企業という組織、われわれの理念や教育をよく理解をさせていただいている企業。ここはまずコアにしながらこのプログラム開発を行う体制。そこから拡大という点においては、今回商工会議所にも入っていただいているので、そういったところで広がりを持たせていきたい。

これからの部分としては、高校で定着させていくということが必要になってくる。例えば高校生も、インターンシップ先の企業をリストとして持っている。逆にわれわれの後援会企業から、一部連携を進めている高校に対して企業を紹介する。そういった定着というところも今後、担っていければと考えている。

もう一つの視点が、継続をしていくうえでの企業側から見たときのメリットという点だ。これは気づきの共有になるが、今回われわれは6分野で、分野が横断するほかの企業との情報交換の機会を設けた。それが非常にいい。環境の話を自動車業界の方から聞かれる。ITの話を建築分野の方が聞く。そういう意味ではこの情報交換自体、企業にとっても非常にメリットを感じ始めてもらっているかなというところだ。

余談だが、例えば今回組む蔵前工業高校も、学生たちはARの世界で自分が製図したのを見る。大きな配管の設備を使いながらやっている。一人一台パソコンの話も含めて、高校もいろいろ取り組みが始まっている。こういった取り組みを通じて、企業にも高校の状況や環境を知ってもらえる。その辺のメリットを感じながら、共感してもらえる企業とより進めていきたい。継続性という点では体制的に拡大、定着という視点。それから企業のメリットというところで、少し参考にしてほしい。

日経 BP・高橋——この企業と行政の連携に関して、岩本さん、気づいた点などあれば。

地域・教育魅力化プラットフォーム・岩本氏——連携協働のところに、関係性や信頼関係をつくっていく部分が大切なポイントになってくる。Win-Winになるポイントをどう見つけていくのか、というところの視点は大事だが、すぐに見えないかもしれない。今回の建て付けは結構難易度が高いものが多い。一筋縄でいくものばかりではないだろうが、あまり焦りすぎず本音の対話を重ね、小さくても関係性を積み重ねながら回していく、つくっていくというところが大事だ。

その上で一つ。最初の計画や目標にとらわれすぎないほうがいい。最初に想定した KIP や、その計画をやることに集中してしまうと、それによって関係性が悪化してしまうなど。最初は想定していなかったことや、やっていく中で見えてくるのがすごくあるはずだ。そこは柔軟に、常に計画や、場合によっては目標自体も見直しながらしっかり関係をつくって、お互いにとって Win-Win になるものを生み出していく。そういう柔軟性も許容しながら、しっかり時間をかけて焦らず積み上げていけるような進め方ができるといいだろう。

【専門学校の機能と役割の再確認と情報発信】

日経 BP・高津——2 つ目のテーマとしては、専門学校の機能と役割を再確認して、さらにその部分を情報発信していくといった視点。

高校から専門学校に行くところで、どのような人材育成が図れるのかが、そもそものこの高専接続の事業の骨格になる。これは間違いないが、普通科の高校と連携する場合に、一つの専門分野だけを教えていくというかたちでいくと、生徒からすれば多様性を確保できないというような悩みも出てくる。そういったことも含めて考えていったときに、もっとマーケットを広げる。高校を卒業してすぐというかたちだけではなく、社会人、大学を卒業した人もターゲットになり得る。リカレントという言葉を使うと、学びなおしの時代が今は到来している。常に受け皿になれるような専門学校の機能も見据えた上で、今回の高専接続の事業をうまく活用していく。

ポイントとしては、やはり高校の時にいろいろな道があるということをきちんと認知してもらおう。

また、先ほど穴吹学園からも話があった非認知能力の育成。これは社会に出てもずっと必要なものだ。こういったものを高等学校時代にいかに育てていくのか。それをできるだけ一般化して、社会人に対してもうまく使えるようなプログラムにする。

それぞれの地域の中で、どういった課題があって、そこにどういった人材が必要とされているのか。その地元の意識や、地域の働きかけといった視点も必要だろう。

さらに、連携する関係者をどうやって増やしてネットワークを広げていくのか。どういった情報発信をしていけばいいのかということで、この高専接続のものを核にしなが
ら、もっと視野を広げる。専門学校が強みというものをどういうふうに広げていったら
いいのか。そのためにはどういう情報発信が必要なのか、といった指摘があった。

KBC 学園では、すでに中学生や社会人に対してアプローチをする取り組みをしている。
福岡歯科衛生専門学校では実際に今、高校に対するアプローチだけではなく、地域への
働きかけ、特に情報発信というところではテレビも活用しながらやっている。この点に
ついて簡単に紹介してほしい。

KCB 学園インターナショナルリゾートカレッジ・仲宗根氏——今回のこの高専接続の企画
を出したときは、高校と専門学校が連携することで、地域の産業界を盛り上げる中核的
な人材を育成するというのがメインと考えていた。が、それを確実にするにはまず
業界の裾野を広げるところも避けては通れないだろうと。そこで、観光系について勉強
ができる高校に中学からもなるべくたくさん進学してもらうことが大事ではないかと考
え、まず中学との連携を考えている。

具体的には希望者を増やすというところではあるが、今日の前にある勉強が何のために
必要なのか、どうメリットがあるのかを職業という将来の目標を通して伝えることによ
って、明確な意思を持って高校に入学をしてほしい。そういったカリキュラムを「高校
の魅力発信プログラム」という名前にして、今、構築をしている途中だ。

さらに企業のところについては、そういった形で中学、高校、専門学校を卒業したあと
に活躍できる環境の整備が必要であるという仮説を立てた。具体的には定着率を上げて
いく。われわれの調査によると大体3年以内で30パーセント。業界によっては50パー
セントくらいの離職率、退職率があるというところで、せっかく勉強してきたものが
活かさないことが非常にもったいない。例えば専門学校のほうでリカレント教育のよう
なかたちでさらに新しいスキルを身につけることによって、業界に貢献できるような人
材を育成する。さらには企業と学校がこれまでは壁を越えて情報共有ができていない。
例えば、給与の問題や雇用条件の問題の部分も少しその壁を取り払って、情報共有がで
きるようなプログラムを構築している。具体的なところは、今後報告をしたい。

KCB 学園沖縄ペットワールド専門学校・伊禮氏——私どもは連携先が農林高校で、先週の
土曜日に初めて実証実験を開始した。それによって専門性を高め、のちのち、職業観を
養うためのキャリア教育用の事業展開も考えている。将来的に地域社会での中核的な役
割を担った人材の育成が可能になるかと考えている。

また、高校以外という話があったが、中学校でも3、4校、実際に動物に対してのふれあいみたいなこと、職業体験をやっている。具体的には、ペットワールド専門学校から動物を中学校比較的に扱いやすい爬虫類、ヘビとかトカゲ、場合によっては犬を連れて行って、生徒に触れてもらい、こういう仕事があるのだということにつなげていく。

もう一方は社会人に対して。卒業生が働きながらスキルアップができるような支援として、卒業生対象のセミナーを実施している。大体は動物看護師対象で、具体的には病気、疾患、院内感染、リハビリ等、専門の先生に来てもらってセミナーを開催。今後も続けていきたい。

福岡歯科衛生専門学校・山本氏——歯科衛生士の養成校として、普通科高校の講倫館高校から取り組みを始めている。講倫館高校のオープンスクールのためのオンラインチラシを令和3年に作成した。今年の4月の入学者で、このチラシを見て、これがあるからここに来たという生徒がいたので、令和4年度も中学生向けのオープンスクールに使うチラシを講倫館高校、博多高校で用意した。チラシは福岡市内の中学校、高校にも配布。そういったところでこの事業の周知をはかっている。

地元のテレビ局、RKB テレビの中で、歯科衛生士がお口の健康を担うというところ、また文部科学省の事業として、高専連携を進めていくということも話をした。

メディアの話で言えば、明日の講倫館高校で第2回目のプログラムを行うが、西日本新聞の記者も来る。いろんなメディアからもこの事業を取り上げてもらっている。

いろんなところを巻き込むという意味では、中学校、高校はもちろんだが、親御さんにも歯科衛生士があるということを認知してもらい、この事業の展開をはかりたい。

私たちの事業では、調査分析の部会、プログラム開発、運用する部会、広報部会があるが、広報部会でそういったところを進めているところだ。

日経 BP・高津——渡邊先生と成田先生からリカレントなども含めた形で、マーケットを広げていくためにどういうアプローチをしていったらいいのか、情報発信も含めてコメントをお願いしたい。

専修大学・渡邊氏——KBC 学園、福岡歯科衛生専門学校とも企業サイドとよく連携が取れている。企業という言い方が適切ではないジャンルもあると思うが、世の中に出てからのニーズ、求める人材像をしっかりと意識したうえで、そこからバックキャストでカリキュラムを考えていくということがしっかりとできていると感じた。

そして、リカレントで言うと、今回のこの高専接続プログラムをもって、企業といろいろなルートができていくと思う。自動車の世界でいえば今後も自動車はAI化や自動運転やEVに変わっていく。農福連携にしてもドローンの活用とかいろんなものが出てくる。そうなってくると求められる技術も変わってくるので、高専のプログラムを終えた社会人もまた学ぶために専門学校に戻ってくることは当然考えられる。今回の事業だけにとどまらず、世の中との接続性、企業との接続性は、これを機に継続してもっていくという意識を持ち続けてほしい。

最後に地元のマスコミの活用も含め、情報発信が非常に大事だと思う。関係人口を広げるという意味でもプレゼンスを高めるという意味でもPR効果はもちろんあるが、何よりもやっている当事者の学生が取り上げられることで非常に勇気を得る。注目はプラスに働くので、先ほどの福岡歯科衛生専門学校の取り組みは非常に参考になると思う。

開志専門職大学・成田氏——マーケット情報発信という観点で言うと、餅は餅屋だと思っている。要するに、自分たちの中だけで完結させないで、プロフェッショナルの人たちとやりとりをしながら、各地方のマーケットや、時には全国のマーケットを取り入れながらやっていくほうが早いと思うので、そのような方法のほうがよいのではないかと。また、日本人は匠の技が非常に得意だと思っており、そこにおいて、専門学校の果たす役割は非常に大切だと思う。要するに、専門性をどれだけ出すかということが非常に大切なことではないかと。それがそのリカレントにつながる。例えば、大学なり専門学校を卒業して社会人になって、専門学校に戻ってきたいと思う方というのは、おそらくその専門学校がどういう専門的なことをしているのかということを考えて選ぶ。これまでの話と逆行する部分もあるかもしれないが、深く特殊性を出していくという事業のカリキュラムの組み方もありではないか。

【ビジョン、ゴールの設定】

日経BP・高津——ビジョン、ゴールの設定について各団体に話してもらっているが、育てる人材の明確化をもう少しきちんとやっていったほうがいいのではないかと。最終的にはそれによってどういった人を育てていったらいいのかというのが事業計画書にきちんと明記されていないのではないかと指摘もあった。

成田先生から話があったスペシャリストの養成。こういった形のところを踏まえたうえでどういった人材を育成していくのかというところが一つ課題になってくるのかなと思っている。また、多様な選択肢を高校生に与えていくためにも、専門学校間の連携が重要だというご指摘もあった。ここの部分は私ども分野横断連絡調整会議に求められているところだと認識している。われわれとしては多様な専門学校のネットワーク、本事業

で集まっている方の取り組みから得られたものを産業全体あるいは地域の産業ニーズに応える人材像として、きちんと明確に輩出できる。そういった仕組みをこの分野横断連絡調整会議としてのゴールにしていかなければいけないと再認識している。

日本 e スポーツ学会・笈氏——通信制高校が e スポーツコースを非常にたくさん取り入れて、全国で通信制高校を中心に 40 校近くになり、これからどんどん増えていくというような状況になっている。専門学校も同じく 40 校くらいあるという形で、この高等学校と専門学校をつなぐためにどうしたらいいかというのを通信制高校、専門学校などにリサーチをして、一応プロトタイプの授業を行って、どういった形が一番学生に届くのかを研究した。

その中でわかってきたこととして、通信制高校で当初は 1 年、2 年、3 年というかたちで考えていたが、もう少しイメージを持ってもらうために通信制高校のカリキュラムに合わせるようなかたちとして、一つはキャリア教育、一つは e スポーツ基礎教育、一つは職種別、専門技能基礎教育の 3 つを中心に学生に学んでもらって、その中から自分の特性やスキルを踏まえたキャリアビジョンに沿って、専門学校に進学をしてもらう。例えば、技能を極めたいという学生、プロプレイヤーやストリーマー、それから実況者になりたい人は e スポーツの専門学校に進む道もあるということを提示したい。

ゲームそのものに興味があった人はソフトウェア開発やハードウェア開発を学ぶために進学するのであれば、IT、ゲーム専門学校。それから裏方として、イベント、サービス、もろもろ周辺事業に進みたい人にはビジネス専門学校。こういうところを提示し、体験をしてもらいながら、自分に合った e スポーツ分野でのキャリアビジョンを形成し、進路を選択してもらうことが必要だろうという結論に至った。今年度から通信制高校のカリキュラムを具体化していく。

大きく分けて 3 つの分野の e スポーツ職業事例集のような形で具体的な仕事の事例などを整理して、業界の人の話を聞いたり、会社での体験などを通して、学生には将来の進むべき道を考えてほしいと考えている。

宮崎総合学院・尾崎氏——今の高校 1 年生の段階のビジネス基礎の教育プログラム開発に取り掛かっている。一つの問題意識として、IT 系に進んでいるのが 13 パーセントくらいということで、まず IT の業界がどういうものかということを知ってもらうということが必要じゃないかなということで、去年からのプレ実証も含めて、本年度実証講座をやろうと考えている。

また、実際 IT の技術がどのように社会で使われているかとか、あるいは先輩たちが実際どういうふうに住仕事をしているのか。実際に体験をしてもらうことによって、自分が今学んでいることがどう活かされるかがイメージできて、どう学べばいいか考えられるようになってくるのではないかと。それとデジタル人材として考えたときに、IT 企業に入ることがゴールではなくて、デジタルがわかるとか、あるいはデジタルが読み取れるとか、データを活用できるとか、そういった人材を養成することではないかなという話もあり、当初はシステム系だったらプログラマーとか、クリエイティブ系だったらウェブデザイナーを想定していたが、今は一般企業の中でもデジタルのことを一通り基礎知識を持っていて、いろんなことができる人材も求められてきている。その辺は高校段階、専門学校段階で、どう整理していくのが今からの課題。最終的な人材のイメージについては今後、検討していかないといけないのかなと思っている。

沖縄専門人材開発研究会・事務局——われわれは今、高校 1 年生段階の連携事業をこの 4 月から開始したところ。その連携事業を行っている科目の科目目標というのが大きなゴールになろうかと思う。専門学校卒業段階とか大きなビジョンとしては、各専門学校が掲げているようなゴールが当てはまるのかなとは思っている。ただ今後、2 年生、3 年生と連携授業を進めていく中で、専門学校、進学において、必要となる基礎知識であったりとか、心構えなどが、今後連携事業として行っていくことになろうかと思う。

【受託団体間の情報共有：オンライン講座の活性化】

日経 BP・高津——4 つ目の受託団体間の情報共有について。今回はオンライン講座の活性化を一つテーマとして取り上げ、実際にやってみての悩みなども含めて発表してほしい。ほかのところでも生徒の数が減ってきているというような傾向も示されているが、少し似たような形で、新潟会計ビジネス専門学校について簡単に説明してほしい。

国際総合学園・川島氏——当事業においては、5 月から商業高校 1 年生 143 名を対象に日商簿記 3 級のオンライン講座をスタートしている。

オンライン講座については、高校の先生がやりなさいといったから、素直に受講するという単純なものではなく、また伝わりやすい内容にしたから受講してもらえないということがあった。もっと根本的なところをよく検討する必要があるということを感じている。これは高校、専門学校の両方を俯瞰した立場であるコーディネーターから簡単に説明をしてもらう。

丸善 CHI ホールディングス・三好氏——今、川島校長先生が話した根本的な原因は、今回は日商簿記 3 級の講座からスタートしたが、オンライン講座、さらには上位概念のオンラインスクールを運営していくには、そもそも専門学校、高校、県が自分のところの

機関をどういう方向に持っていきたいかというビジョンが明確になっていないと、システムの設計もうまく行かない。そのシステム設計もビジョンに沿って組み立てられていないと、今度そこに搭載するファイル名の命名規則すら決められない。いろいろ DX といって文部科学省も公募事業をしていて、特定の専門技能のあぶり出しとも言っているが、実際このオンラインスクールをやってみて感じているのは、特定の技能をあぶり出してスモールスタートからスタートする場合は、オンラインスクールの観点からいくと失敗する可能性が高いのではないか、というのが今感じているところ。

高校1年生が140何人も集まってくると結構手ごわいので、小手先ではどうにもうまく行かないというところがわかってきたので、一度専門学校、高校、そして県がどういう方向に行きたいかというビクピクチャーを今年度もう一回見直す。その具体的な手段としては、今まで当たり前やってきたことをオンラインスクールでやる場合にはもう一回見直して再定義する必要があるので、三者集まってやるというところを今年度行う。そうしたうえで、もう一度、今集まってきているデータを見直して、どういうアルゴリズムを入れるかというのを次年度やってきたいと思っている。

京都コンピュータ学院・寺下氏——私どものプロジェクトは、パートナー校として京都府立すばる高校の情報学科と合同でやっている。カリキュラムの検討などを行っているが、今日はオンライン講座に関して話したい。

学校では、コロナが始まってすぐにオンラインに切り替えたのだが、非常に単純なオンライン機能しか使えていない。例えば、今やっているように Zoom でつないで教材を示して先生が説明するのが典型的なやり方だと思うが、このやり方には限度がある。何とかして、従来の教室というものを再現したいということで、米国辺りではコロナから入れているようだが、ハイフレックス教室というのを特別につくって、できるだけ対面の授業を再現できるものを求めていると思う。業界、企業ではポストコロナにおいてもテレワークが発展し続けるであろうという予想が出ているが、学校もこれからはコロナが仮に終わってもどんどんオンラインの授業は発展するだろうと私どもは考えている。

そこでハイフレックス教室を今設計しており、ほぼできて、もう動く状態になっている。関連校を入れると全部で十数教室にハイフレックスの設備が入っている。これは少しお金がかかるが、大きなスクリーンを使って、非常に指向性の強いマイク、そういうものを教室の周りにうまく配置し、それからマイクのスピーカーのほうもうまい形が入ってきていて、オンラインでつながっている学生に対しても、あたかも先生と教室で一緒に勉強しているように、セットアップを再現するということだ。

これからの高校生も当然、世の中へ出ていってもこういう環境は必要なことであろうと
思っている。この秋にとりあえず試験的な形でパートナーの高校の学生たちに対して実
験を実際に体験してもらいたいと思って、今準備をしている。

これは単に、ハードウェアがうまく動くということのほかに、これはうまくなれると最
近よく言われているアクティブラーニングとか、そういうものがオンラインで潤滑に再
現できるという可能性もある。これは来年度のテーマになると思うが、とりあえず今ハ
ードウェアができたということで、年末くらいにかけて高校の学生にも参加してもら
って体験を持ってもらいたいと思っている。

東京リーガルマインド・岡本氏——私たちはこの電気通信業界の部分について、オンラ
イン講座のeラーニングで教材の開発をしている。業界入門、情報学基礎、キャリア教
育という3つのテーマで作成しており、業界入門に関してはまずは電気通信業界を知
ってもらうために、入り口の講座を作成する。そのために必要な項目が有線通信設備、無
線通信設備など6項目がある。わかりやすくシンプルな内容で短めのコンテンツで各項
目ごとに2つずつくらい作成する。

次に情報学基礎。これも工業高校にいろいろヒアリングしていくうちにカリキュラムの
関係もあり、通信制の高校にもヒアリングをした。情報学基礎については、当初は1種
類だけ製作する予定だったが、通信制の高校と工業高校ではやはり内容についての触り
方もまったく違うので、2パターン作成することに今はしている。工夫としては通信制の
高校については短め、あとはクイズのようなテストを入れて興味を持って続けられるよ
うな内容を考えている。工業高校に関しては、高校の授業とかぶる内容だと興味を持た
れないかもしれないので、慎重にヒアリングして進めている。テキストもそれぞれにつ
いて作成する。

最後、3番目のキャリア教育。これはほかとは毛色が異なり、電気通信業界がどういった
業界でどんな仕事をしているかということを実際に見て、興味を持ってもらえるような
教材を作成したいなと思っている。電気通信業界、企業の協力を得て、その企業と関連
会社の社員の方にも出演してもらおう。今はジェンダーの問題もあるので男性、女性とい
うような言い方はよくないのかもしれないが、女子の学生にも興味を持ってもらうた
めに、女性社員の方にも出演してもらっている。映像にすることで、個人でも見られる
し、授業で一部だけ使うこともできるよう工夫していきたいと思っている。

日経BP・高津——やはりeラーニングも含めて、オンラインでやるというときには、ど
うやって興味を引きつけるか、かなり工夫が必要だということが課題としてあがってき
ている。引き続き知恵を出し合って、アイデアを共有しながら進めていきたい。

最後に有識者の先生方からお一人1分程度で今日の総括をお願いしたい。

大正大学・浦崎氏——今日はとてもうれしかった。専門学校が持っている財産はすごく大きいと感じた。小山学園の話聞いて思ったのだが、高校も中学も文化が違いすぎて、企業とつながりたくてもつなげられない。その間に専門学校が入るとうまくつながるのではないかというビジョンが今日とても浮んだ。専門学校が当たり前持っているものをもっと活かしてもらいたい。

穴吹学園について。非認知能力のシートが出てきたが、ああいうのが欲しい。あれがあれば高校の先生も意味がよくわかって、先生も生徒も共鳴しながら、どういうふうに毎日過ごしていこうということができる。とてもいいものを見せてもらった。

岡山県総合教育センター・川崎氏——学校の高校の教員の立場として、例えば指導案と一緒に作るなど、さまざまな共有をしっかりとできたらなと思った。特に単元計画と一緒につくるとか、目指す力。先ほどの非認知能力のこともそうだが、そういう前後の文脈を大切にしたい学びができたらすてきたと思った。前後の文脈を大事にしてストーリー性のある事業展開にできたら非常に夢も広がるいい事業だと思った。

福岡大学・植上氏——先生方の話を伺っていく中で、あらためて専門学校の強み、特に職業教育の強みというのを私自身強く感じた。高校生はじめ生徒たちのさまざまな進路意識、もしくは職業観、キャリア意識みたいなものを強めていくというところ。また、宮崎総合学院、日本eスポーツ学会の話でもあったように、新しい社会の流れに対応していくこと。こうしたところが職業教育の強みなのではないかと思っている。こういった職業教育の強みをこの高専連携の取り組みを通じて、社会に広げていくということ。これを皆さんと一緒にやっていきたいなとあらためて強く感じた次第だ。

地域・教育魅力化プラットフォーム・岩本氏——最後にビジョンの共有とか明確化、ビジュアルという話があったかと思うが、非常に重要な視点だなと思った。そのときに高校の場合、スクールミッション、スクールポリシーとその高校の存在意義や、目指す学校像、育てたい生徒像や資質能力、こういったものを明確に策定して共有をしていくということがどの学校でも必要だとこの4月からなっている。スクールミッションに関しては、最終的には設置者、都道府県教員が最後認めるというか、形をつくる。

スクールポリシーに関しては各学校がというところ。それも関係機関と対話をしながら、連携しながらそれをつくっていくということになっているので、ぜひビジョンとかビジュアルのところとうまくこの高校改革の大きい流れをつながりながら、そういったものを描いて落とし込んでいけるといいのかなと思ったというのが一点。

最後まで一つ非認知能力の部分。今日も話があり、素晴らしいなと思った。あの非認知能力の部分は割りと普遍、ポータブルなスキルというか、誰にも必要な部分が幅広くあったかと思うが。（音声切れのため、チャットで岩本氏から続きのコメントが寄せられた。末尾に掲載）

専修大学・渡邊氏——今日は非常に明確に理解することができた。オンライン講座の活性化のところで一点だけ感想を話したい、私も大学で四苦八苦しなながらオンライン講座をやっているが、オンライン講座で非常に意味のあるところは、一人別の学生記録が取れるところだと思っている。一人別の学習記録はeポートフォリオという言い方もするが、それをしっかり取っていくと、誰がどこの部分で突っかかっているのか、何度も再生しているのかとか分析することによって、効果測定ができる。マクロでの効果測定もできるし、一人別に効果測定をすることによって、ドロップアウトしそうな学生を早期検知しフォローしていくというようなこともきめ細かくできる。さりながらノウハウが難しいところがあるので、こういった全体会議の場で先行している学校がオンライン活用のノウハウを共有していくことが大切ではないか。

開志専門職大学・成田氏——大きく言いたいのが、日本は人口減少だということ。小さなパイを取りに行かずに、こういうことを長期でやっていくことが肝要ではないか。その中で一番大切なのは、各業種でオタクを増やすということではないか。そのときに専門学校が非常に重要な役割を果たす。マスの数は増やせないが、オタクの数は増やせると思う。それによって結果、日本の労働力の強化や、国際力の強化につながるのではないかと思った。

日経 BP・高津——事務連絡だが、会議次第後半にスケジュールが記載してある。日程について確認いただいて、何かあれば事務局に連絡してほしい。

文部科学省・望月氏——本日伺っている中でもポイントが多岐に渡っているということがわかった。高専の接続はもちろんだが、すでに取り組んでもらっているように中学校につながっていったり、連携先の企業からゆくゆくはリカレントという形でまた戻ってくる可能性も大いにある。そういった広がりを持っている事業だと思うので、事業時間はまだまだ長いので、じっくりと腰を据えてやってほしい。

日経 BP・高津——深掘できるテーマが多かったのもっと議論ができればよかったという反省点があるが。引き続き、この事業自体が来年以降もより大きな成果を得られるように有識者の先生方にもご協力いただきながら、受託団体の皆さんと一緒に進めていきたい。

(以上)

(岩本氏から寄せられたコメント)

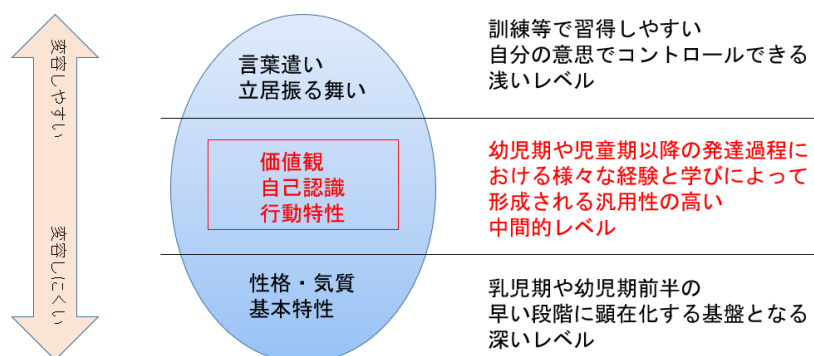
「非認知能力」が一般的で広く普遍的に必要なものと、特にこの連携事業や専門教育・職業教育を通して育てたい資質能力は何か、この連携だからこそ伸ばせるところはどこなのか、明確化して掘り下げていく視点も大事なかなと思いました。

(資料①)

非認知能力養成の取組み

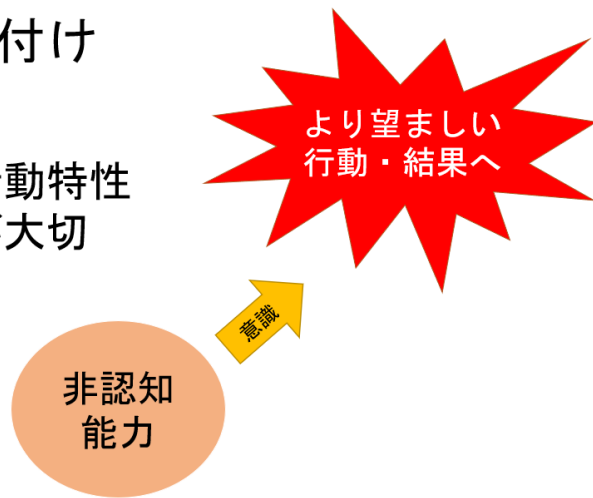
学校法人穴吹学園

3つのレベルから非認知能力をとらえる



非認知能力は意識付け

価値観、自己認識、行動特性
本人が意識することが大切



具体的に行ったこと

- 身につけさせたい「非認知能力」を言語化・具体化
- 学生の振返りの機会を設ける

身につけさせたい非認知能力

目指す非認知能力 カテゴリー	ステータス	アセスメント項目
自分と向き合う力	情緒の安定	辛いことや苦しいことがあってもいつも通りに振舞うことができる
	ストレスコントロール	ストレスがたまらないように発散・相談することができる
	レジリエンス	落ち込むようなことがあっても、立ち直ることができる
	忍耐力	困難にも耐え、難しい課題でも投げ出さない
	自制心	誘惑や衝動に対し、自分の感情・行動をコントロールできる
自分を高める力	あきらめない心	当初の夢に向かって、あきらめずに「日々前進」できる
	意欲	物事に興味を持って取り組める
	積極性	自ら積極的に行動し、成果を出そうと取り組める
	向上心	具体的に目標を設定して、その目標に着実に向かえる
	自分ならできるといふ思い	初めてのことで、自分の可能性を信じて挑戦できる
他者とつながる力	社交性	相手の性格や考えを理解しながら関わることができる
	ルール・マナー	礼儀やマナー、ルールを意識しながら行動できる
	共感的理解	周囲の雰囲気などを感じ取りながら行動できる
	役割認識	集団の中で自分の役割を自覚しながら行動できる
	協調性	相手を尊重しながら、協力できる

学生は週1回程度リフレクション

スマートフォンでゲーグルフォームにアクセス
アセスメント項目について4段階評価（自己評価）



【別紙4】

令和4年度 文部科学省委託事業
「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」
地域活性化のための農福連携人材育成事業アンケート

(北海道内高等学校農業科対象)

2022年11月

学校法人西野学園 札幌心療福祉専門学校

アンケート集計にあたり

学校法人西野学園札幌心療福祉専門学校では、文部科学省委託事業「地域産業中核的人材養成事業」(6ヵ年事業)において、「農福連携」による地域活性化をテーマに高等学校と専修学校の連携による先取り履修を取り入れた高専一貫カリキュラムの編成・構築を目的とした「地域活性化のための農福連携人材育成事業」を実践しています。

北海道では「農業人口の減少と高齢化」「障がい者雇用の受け皿不足」が大きな課題であり、農福連携を進めていくために「農業の知識や技術を持つ福祉職」が求められています。この事業は、これらの諸課題を改善するために、社会福祉士資格と農業知識をあわせ持つ人材を育成し輩出することを目的として展開しています。

そこで、今後の方向性を検討するにあたり、農業関連学科に在籍する高校生を対象とした農福連携に関する意識についてのアンケートを実施しました。設問は、農業分野に進学した理由や課題、福祉分野に関するイメージなどを把握するため、【農業関連の学びについて】【農業分野の課題や魅力について】【社会福祉に関する興味・関心度について】【農福連携に関する認知度・関心度について】の4つの観点から構成されています。

このアンケートは、農福連携人材育成事業コンソーシアムで連携いただいている北海道教育庁学校教育局高校教育課のご協力により令和4年9月26日(月)～10月21日(金)に実施、回答は任意ではありましたが、最終的に北海道管内で農業科を設置する高等学科12校520名の生徒から貴重なご意見をいただくことができました。

今回のアンケート結果を今後の教育課程編成に活かし、農業の知識や技術を持つ福祉専門職育成に役立てていく所存です。

ご協力いただいた北海道教育庁をはじめ、高等学校関係者の皆様、ご回答いただいた生徒の皆様には厚く感謝申し上げます。

高等学校別 学年別 男女別 アンケート回答数

高等学校名	学年	男性	女性	合計
北海道旭川農業高等学校	2年生	53	51	106
	3年生	50	77	127
	合計	103	129	234
北海道岩見沢農業高等学校	2年生	26	7	34
	3年生	16	2	18
	合計	42	9	52
北海道余市紅志高等学校	2年生	20	8	28
	3年生	9	3	12
	合計	29	11	40
北海道富良野緑峰高等学校	2年生	4	12	16
	3年生	7	10	17
	合計	11	22	33
北海道標茶高等学校	2年生	16	9	25
	3年生	3	4	7
	合計	19	13	32
北海道留寿都高等学校	2年生	4	5	9
	3年生	15	8	23
	合計	19	13	32
北海道更別農業高等学校	2年生	24	7	31
	3年生	-	-	-
	合計	24	7	31
北海道真狩高等学校	2年生	2	5	7
	3年生	15	6	21
	合計	17	11	28
北海道大野農業高等学校	2年生	3	4	7
	3年生	6	8	14
	合計	9	12	21
北海道遠別農業高等学校	2年生		2	2
	3年生	7	2	9
	合計	7	4	11
北海道深川東高等高校	2年生	2	1	3
	3年生	-	-	-
	合計	2	1	3
北海道ニセコ高等学校	2年生	-	-	-
	3年生	2		2
	合計	2		2
高等学校不明	2年生	2	1	3
	3年生	1	1	2
	合計	3	2	5
合計 (全12校)	2年生	156	112	268
	3年生	131	121	252
	合計	287	233	520

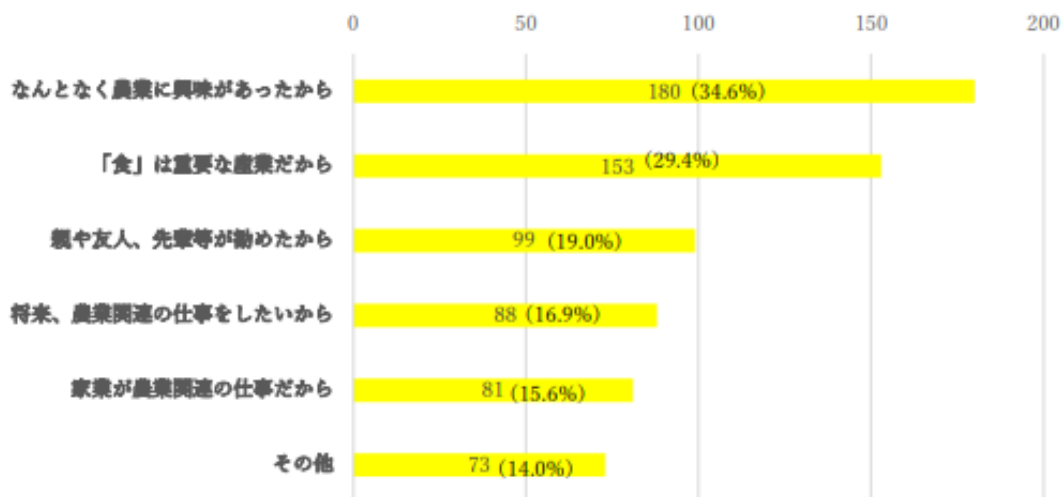
設問項目（目次）

1	【農業関連の学びについて】	
	（1）農業分野を学びたいと思ったきっかけについて教えてください	4
	（2）農業関連の学びの中で、どのような分野に興味がありますか？	5
	（3）高等学校卒業後の進路で考えていることを教えてください	7
2	【農業分野の課題や魅力について】	
	（1）農業分野の課題について感じることを教えてください	9
	（2）農業の担い手が不足している原因について感じることを教えてください	10
	（3）農業分野の仕事の魅力について感じることを教えてください	12
3	【社会福祉に関する興味・関心度について】	
	（1）「社会福祉」という言葉のイメージを教えてください	14
	（2）あなたは「社会福祉」に興味はありますか？	15
	（3）あなたは障がい者の働き先が不足している課題を知っていますか？	16
	（4）障がい者の働き先が不足している原因について感じることを教えてください	17
4	【農福連携に関する認知度・関心度について】	
	（1）「農業の担い手不足」と「障がい者の働き先不足」の課題を解消させる 「農福連携事業」が注目されていることをご存知ですか？	19
	（2）あなたは「農福連携」に関して興味はありますか？	20
	（参考） 振興局別集計	21

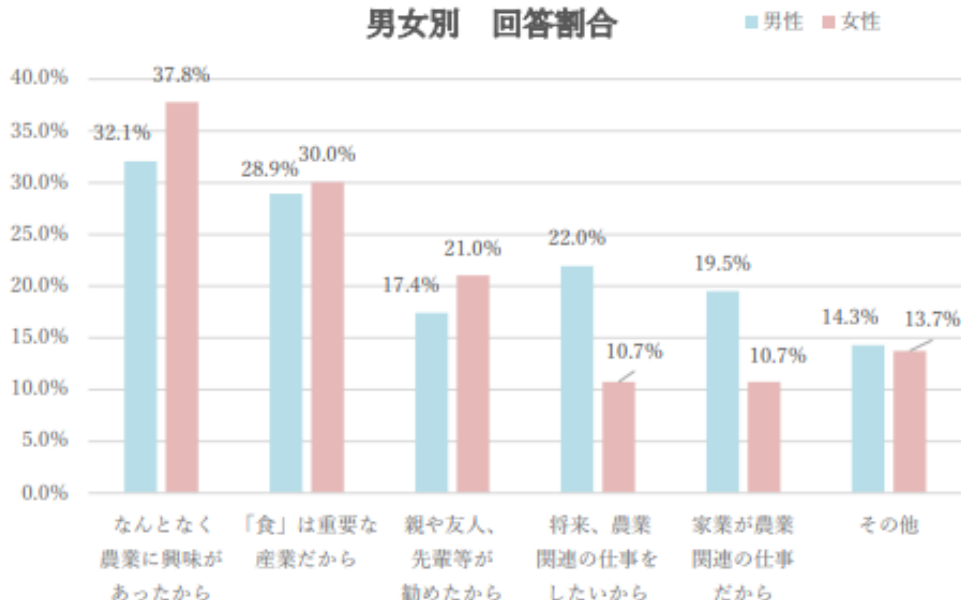
1【農業関連の学びについて】

(1) 農業分野を学びたいと思ったきっかけについて教えてください <複数回答可>

全体回答数 (520名中、複数回答含め647の回答)



男女別 回答割合



高等学校進学の際、「なんとなく農業に興味があったから」という理由で進学する生徒は、若干女性の方の割合が高い結果となった。

また、「将来、農業関連の仕事をしたいため」「家業が農業関連の仕事だから」という理由で進学した生徒は男女で2倍の開きがあり、男性が回答人数の約20%に対して、女性は10%程度という結果であった。

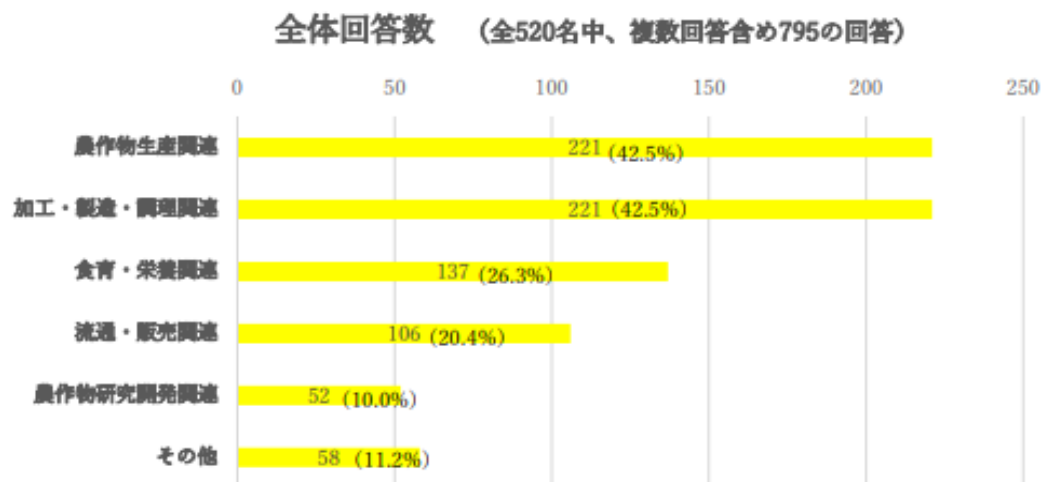
● 「その他」の回答

その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
林業関係を学ぶため	9		9	1		1	10	0	10
動物・畜産関係を学ぶため	3	1	4		3	3	3	4	7
農業には興味がない・理由はない	1		1	6		6	7	0	7
食や食品加工関係を学ぶため		1	1	2	3	5	2	4	6
家から近いから	3	1	4	1		1	4	1	5
調理・製菓を学ぶため		2	2		2	2	0	4	4
学歴・公立高校だから	1	1	2	1		1	2	1	3
人間関係や世代との関わりを学ぶため					3	3	0	3	3
祖父母が農業関連だから				2	1	3	2	1	3
福祉関連を学ぶため					3	3	0	3	3
保育関係を学ぶため		1	1		2	2	0	3	3
花卉関連を学ぶため		1	1		1	1	0	2	2
公務員になりたいため	1	1	2				1	1	2
農業を学ぶため		2	2				0	2	2
園芸を学ぶため				1		1	1	0	1
兄が通っていたから					1	1	0	1	1
自然が好きだから	1		1				1	0	1
車	1		1				1	0	1
色々な事を学ぶため	1		1				1	0	1
寮生活のため				1		1	1	0	1
(未回答)		1	1	5	1	6	5	2	7
総計	21	12	33	20	20	40	41	32	73

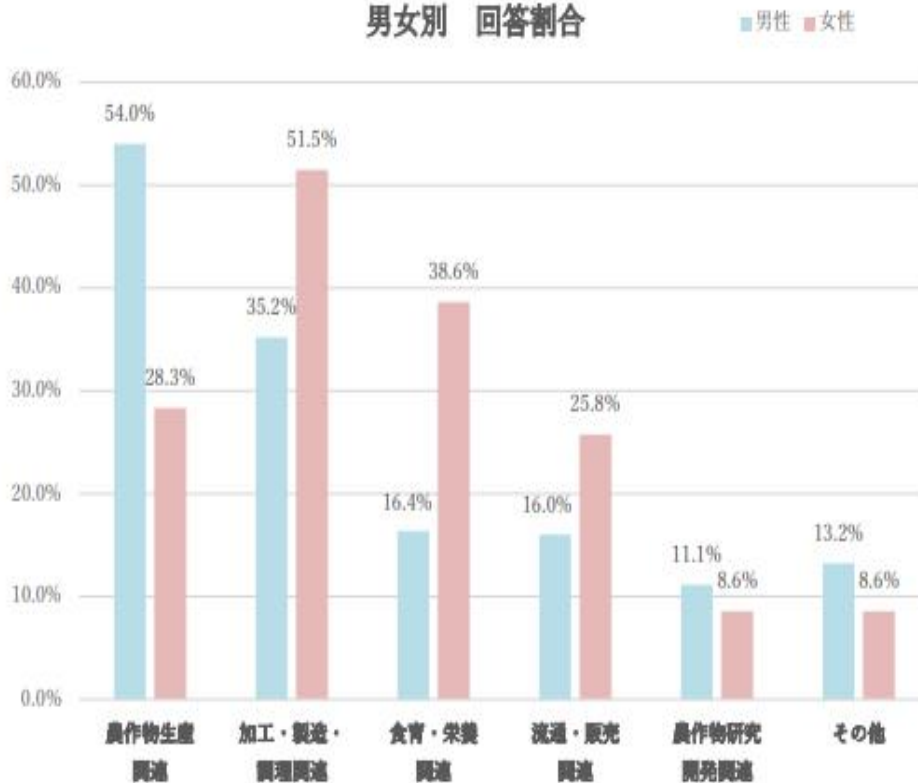
「その他」の回答では、「林業」「畜産」関連が上位となり、特に「林業」は全員が男性という結果であった。

また、「食品加工」「調理」「花卉」「園芸」など農業分野に関連するキーワードも見られた。

(2) 農業関連の学びの中で、どのような分野に興味がありますか <複数回答可>



男女別 回答割合



「農作物生産関連」の学びに興味を持っている生徒は、男性が54%、女性が28%と大きな差があった。反面、「加工・製造・調理関連」の学びに興味を持っている生徒は、男性が35%に対して女性が51%であった。また、「食育・栄養関連」「流通・販売関連」の学びに興味を持っている生徒は女性の方が高く、差が開いた結果となった。

● 「その他」の回答

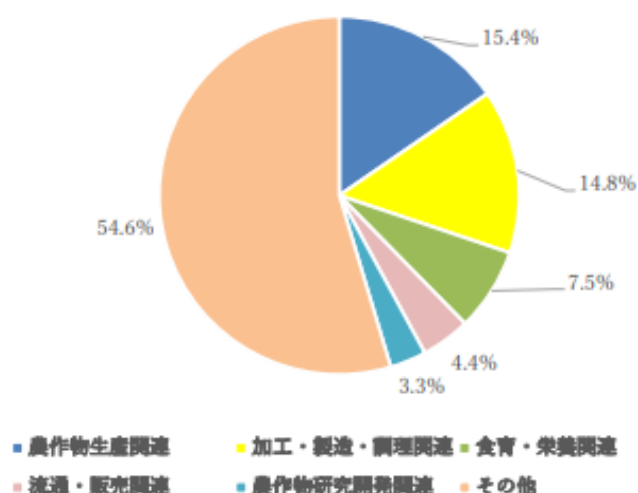
その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
酪農・畜産関連	7	5	12		4	4	7	9	16
林業関連	12	2	14	2		2	14	2	16
特になし	3		3	6	1	7	9	1	10
花卉・園芸		1	1		4	4	0	5	5
スマート農業・農業機械関連	4		4				4	0	4
保育・看護・教員		2	2	1		1	1	2	3
(未回答)		1	1	3		3	3	1	4
総計	26	11	37	12	9	21	38	20	58

「その他」の回答では、「畜産」「林業」関連が上位となり、それぞれ全体の3%（16名/520名中）の結果であった。

また、「花卉・園芸」や「スマート農業・農業機械」などの学びに興味を持っている生徒も見られた。

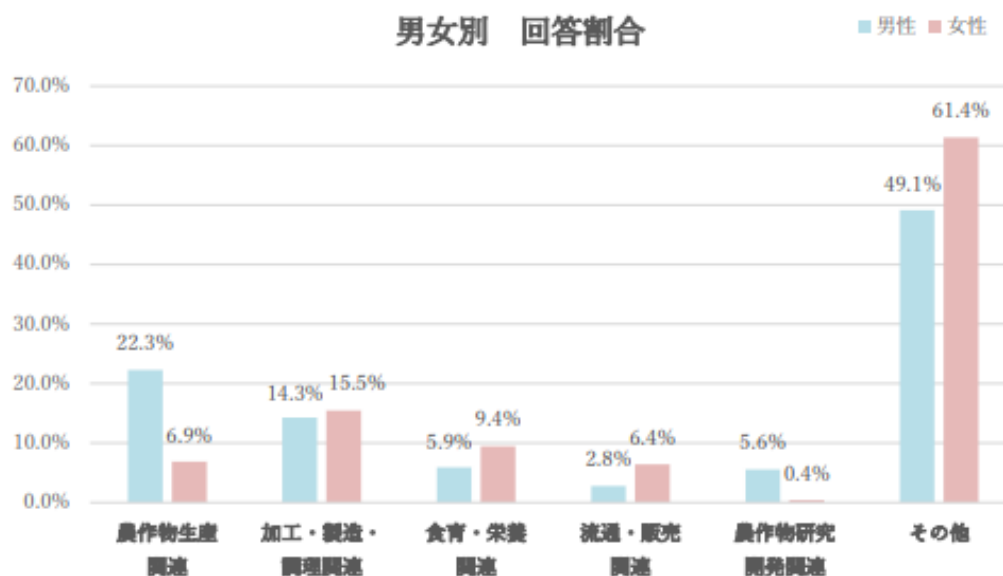
(3) 高等学校卒業後の進路で考えていることを教えてください <1つだけ回答>

全体回答数 (520名)



「その他」では林業や酪農、農業機械関連を進路に考えている生徒が一定数いるものの、半数程度は農業関連に直接関係のない進路を考えている。

男女別 回答割合



卒業後の進路で「農作物生産関連」を考えている生徒の男女比は概ね男性3：女性1だが、「加工・製造・調理関連」に男女差は見られない。

「食育・栄養関連」「流通・販売関連」はそれぞれ全体の10%以下であり、女性の方が多い結果となった。

● 「その他」の回答

その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
教員・消防士等公務員	8	5	13	6	2	8	14	7	21
福祉・介護関連	4	6	10	5	5	10	9	11	20
保育関連		8	8	1	10	11	1	18	19
理容・美容関連	1	5	6		13	13	1	18	19
看護・医療関連	1	2	3	2	13	15	3	15	18
トリマー・動物関連	3	6	9	1	5	6	4	11	15
林業関連	8	1	9	5	5	10	13	1	14
一般企業等就職	2	3	5	2	3	5	4	6	10
自衛隊	1	1	2	8		8	9	1	10
システム・情報・クリエイター関連	3		3	6		6	9	0	9
芸術・イラスト・デザイン・音楽関連	3	4	7	1	1	2	4	5	9
大学進学	3		3	6		6	9	0	9
建築・土木関連	2	1	3	4		4	6	1	7
酪農・畜産関連	3	3	6		1	1	3	4	7
芸術・演劇・作家・声優関連		2	2	1	2	3	1	4	5
自動車・整備士・ガソリンスタンド関連	1		1	3	1	4	4	1	5
進学	4		4	1		1	5	0	5
スポーツ関連	3		3	1		1	4	0	4
事務職・受付・窓口業務		1	1		3	3	0	4	4
専門学校進学	3		3	1		1	4	0	4
ホテル・ブライダル関係		1	1		2	2	0	3	3
金融・経済関連				2	1	3	2	1	3
歯科衛生					3	3	0	3	3
接客業		1	1	1	1	2	1	2	3
調理・製菓関連	1	1	2	1		1	2	1	3
農業関連以外	1		1	1	1	2	2	1	3
農業機械関連	2	1	3				2	1	3
医療事務関連					2	2	0	2	2
海外	1	1	2				1	1	2
空港・運送関連					2	2	0	2	2
フリーター		1	1				0	1	1
出版関連					1	1	0	1	1
測量関係				1		1	1	0	1
知大進学					1	1	0	1	1
未定	17	11	28	3	2	5	20	13	33
(未回答)		2	2	3	1	4	3	3	6
総計	75	67	142	66	76	142	141	143	284

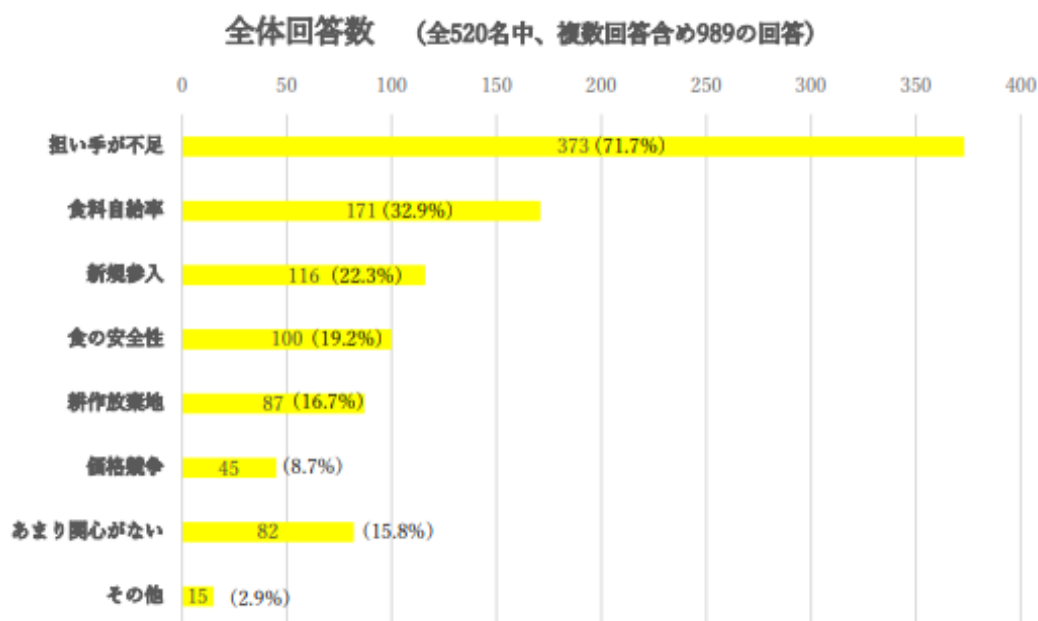
進路希望「その他」の回答では、1番多かった「公務員(21名)」の次に「福祉・介護関連(20名)」が多い結果となった。「社会・介護関連」に学年ごとに10名ずつおり、毎年、一定数の関心を持っている生徒がいると推測できる

また、農業関連では「林業」「酪農・畜産」「農業機械」などの進路を考えている生徒も見られた。

「未定」と回答した生徒は3年生5名(0.9%)に対し、2年生が28名(5.4%)であり、今後の進路がまだ定まっていない2年生を中心に農福連携に関心を持ってもらえる可能性が示唆される。

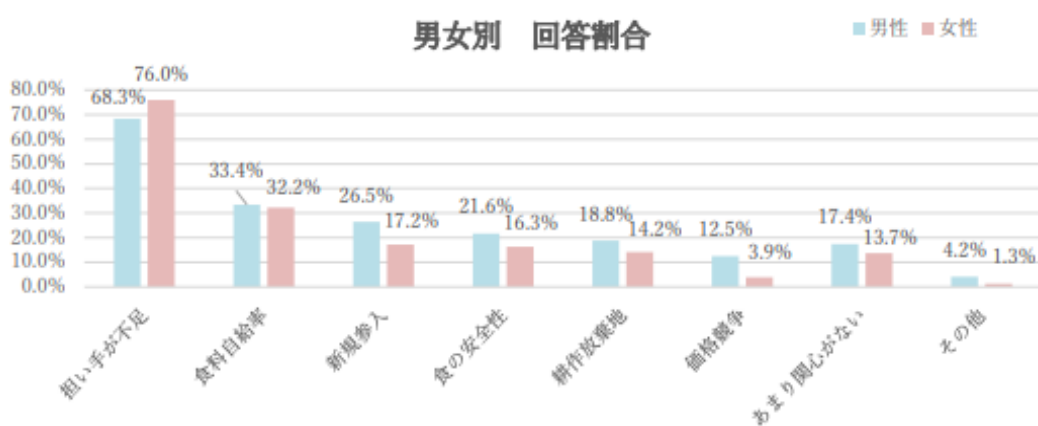
2 【農業関連の課題や魅力について】

(1) 農業分野の課題について感じることを教えてください <複数回答可>



回答者の7割以上が、農業の担い手不足を課題と考えている。

「あまり関心がない」を除くと84.2%の回答があったことから、農業の課題に関心を持つ生徒の割合が高い結果となった。



どの課題についても男女差は少ない傾向だが、「新規参入するハードルが高い」と感じている生徒に男性の方が多く、起業意識の関与が一因として伺える。農福連携事業においては、就労継続支援B型事業所の起業が可能であることなど、社会福祉事業の啓発は重要であると考えられる。

また、「TPPなどの価格競争」については、全体回答数の1割以下ではあるものの、課題を感じているのは男性の方が女性より約3倍高かった

● 「その他」の回答

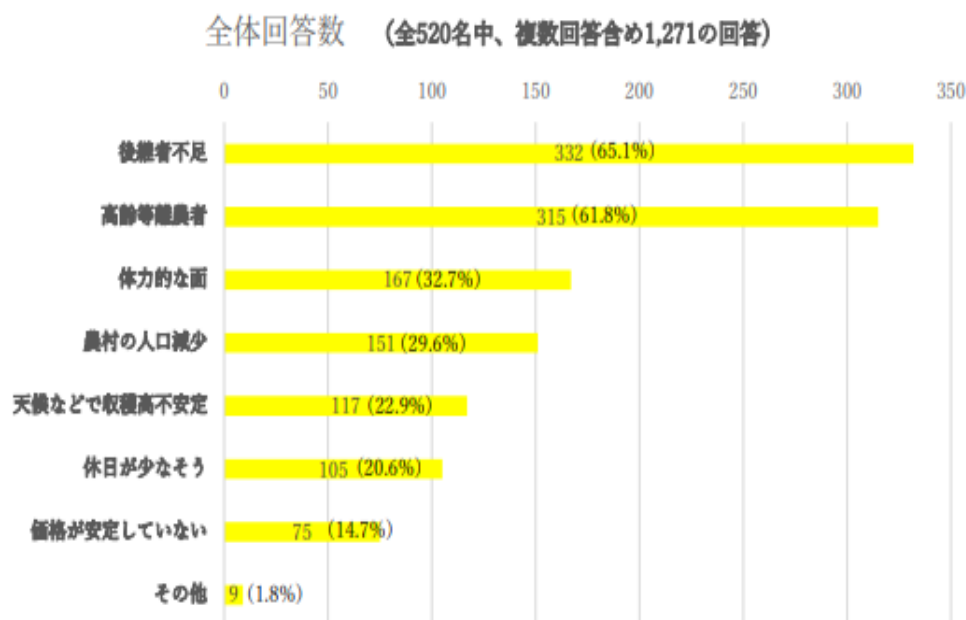
その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
飼料、肥料等の価格高騰	2		2		1	1	2	1	3
森林の在り方や担い手不足	2		2				2	0	2
補助金不足・手当が低い				2		2	2	0	2
あまり考えたことがない		1	1				0	1	1
環境変化による被害		1	1				0	1	1
農業と関わる機会が少ない				1		1	1	0	1
(未回答)				5		5	5	0	5
総計	4	2	6	8	1	9	12	3	15

「その他」の回答では、「飼料、肥料等の価格高騰」と回答した生徒が3名いた。

また、「林業の担い手不足」のほか、昨今の地球温暖化や異常気象の影響と思われる「環境変化による被害」を課題としている生徒がいた。

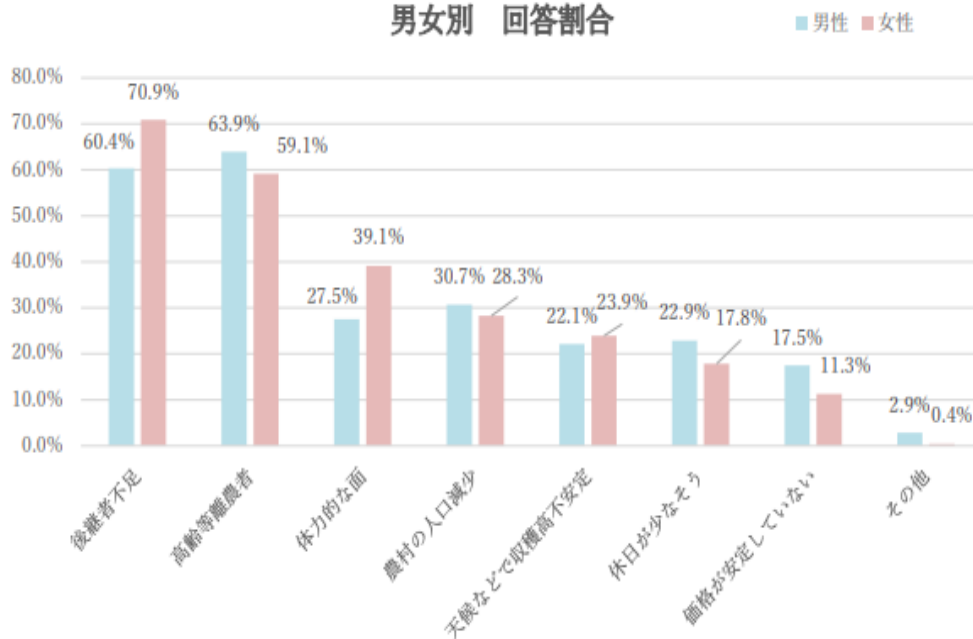
(2) 「農業の担い手が不足している」原因について感じることを教えてください

<複数回答可>



回答者の6割以上が、「後継者がなかなかいないから」「高齢による離農者が多いから」と考えている。また、「若者が都市部へ流出し、農村地域の人口自体が減少しているから」については全体の約3割が感じており、農村地域の過疎化が深刻になっている。

男女別 回答割合



「後継者がなかなかいないから」と回答した生徒は、男性が60.4%、女性が70.9%と1割程度の差があった。

また、「体力的に大変そうだから」については、男性より女性の方が高く、差が開いた結果となった。

● 「その他」の回答

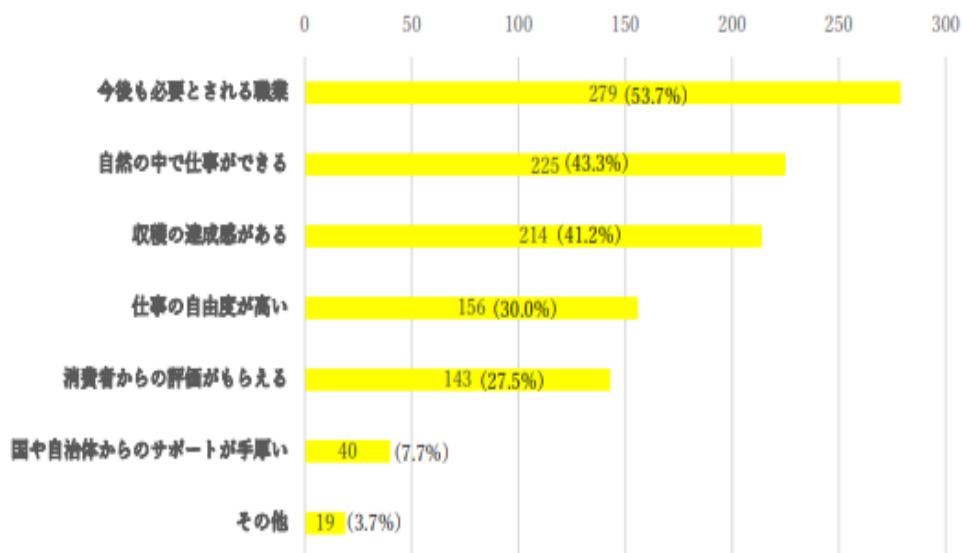
その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
昔の考えが多いから若者と関わりづらい				1		1	1	0	1
汚いなど負のイメージがある	1		1				1	0	1
給料が安いイメージ		1	1				0	1	1
農業を知る機会がない				1		1	1	0	1
わからない	4		4	1		1	5	0	5
総計	5	1	6	3	0	3	8	1	9

「その他」の回答では、「昔の考えが多いから若者と関わりづらい」「汚いなど負のイメージがある」「給料が安いイメージ」「農業を知る機会がない」など貴重な意見があった。

「昔の考えが多いから若者と関わりづらい」との意見については、若者と高齢者の縦のつながりが薄くなっている現状が示す通りとなった。世代を超え、「農業を通じてプラスイメージ」が持てるようなコミュニケーション機会の提供は欠かせないと考える。

(3) 農業分野の仕事の魅力について感じることを教えてください <複数回答可>

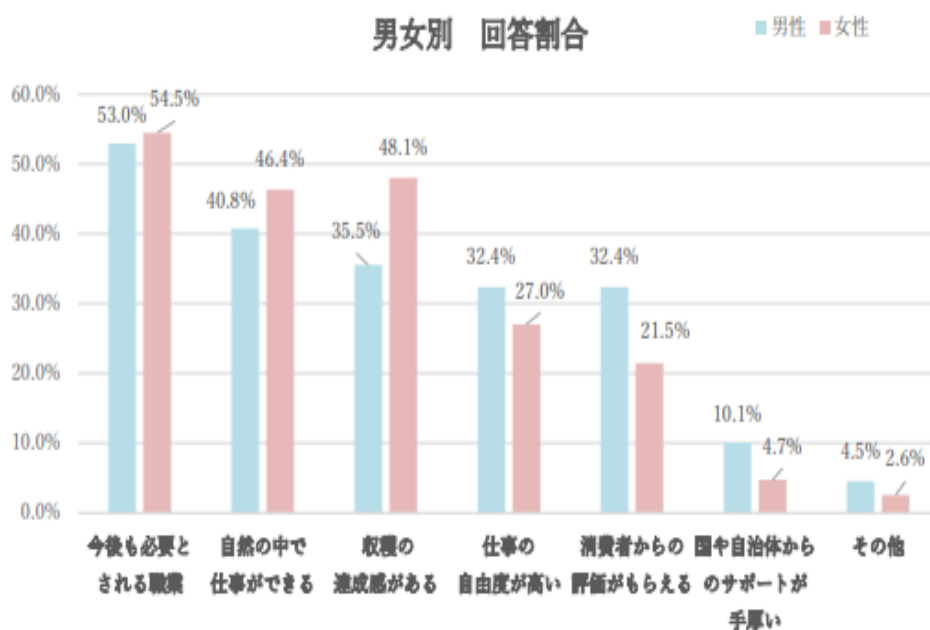
全体回答数 (全520名中、1,076の回答)



回答者の5割以上が、「今後も必要とされる職業」と考えている。

また、「自然の中で仕事ができる」については全体の43%が感じていたことから、都市部の高校生へアピールできる素材（自然の中で仕事ができる）として活用が可能である。

男女別 回答割合



「今後も必要とされる職業」と回答した生徒には男女がほとんどない。「自然の中で仕事ができる」「収穫の達成感がある」については男性より女性の方が若干高く、反面「仕事の自由度が高い」「消費者からの評価がもらえる」については女性より男性が高い結果となった。

● 「その他」の回答

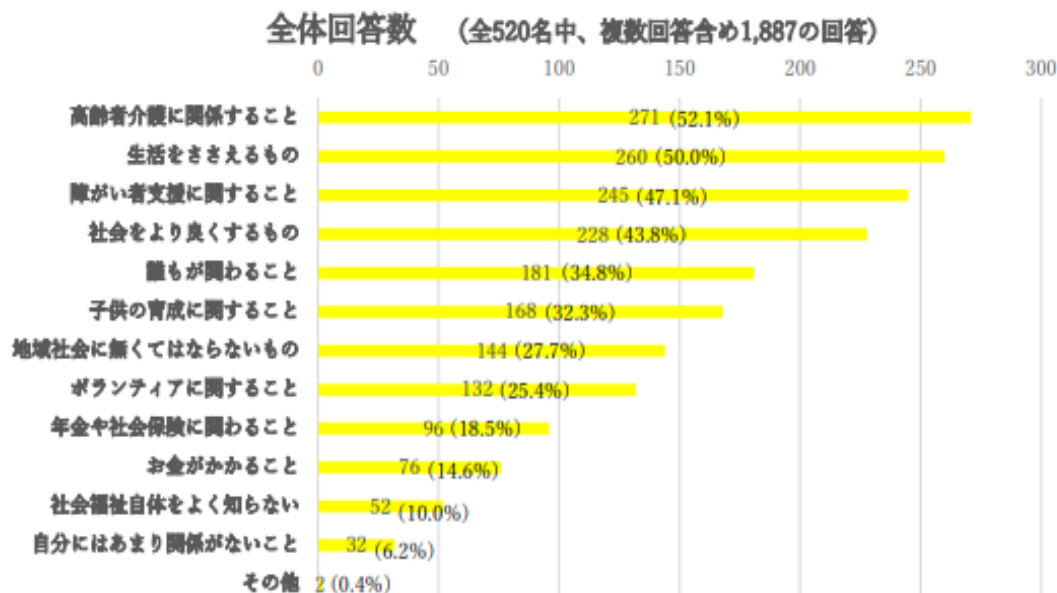
その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
自給自足、食費削減	1	2	3				1	2	3
給料が高め		1	1		1	1	0	2	2
食品の大切さが分かる		1	1				0	1	1
わからない・関心がない	4		4	2		2	6	0	6
魅力を感じない				1		1	1	0	1
(未回答)		1	1	5		5	5	1	6
総計	5	5	10	8	1	9	13	6	19

「その他」では「自給自足、食費削減」が一番多く、「給料が高め」「食品の大切さが分かる」などの回答があった。

2-(2)担い手不足の原因では、「給料が安いイメージ」との回答があったものの、北海道は他の都府県に比べ高めの年取水準であることから、給与面の周知を図ることで農業関連人材の活性化につながる可能性がある。

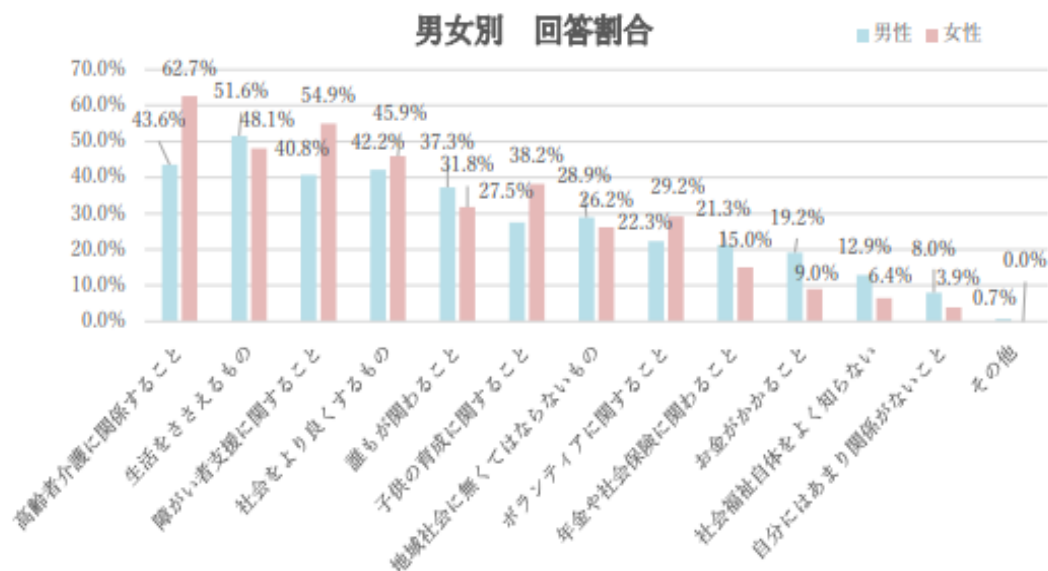
3【社会福祉に関する興味・関心度について】

(1) 「社会福祉」という言葉のイメージを教えてください <複数回答可>



「高齢者介護に関係すること」「生活をささえるもの」が回答者の5割以上、次に「障がい者支援に関すること」が47.1%の結果となった。

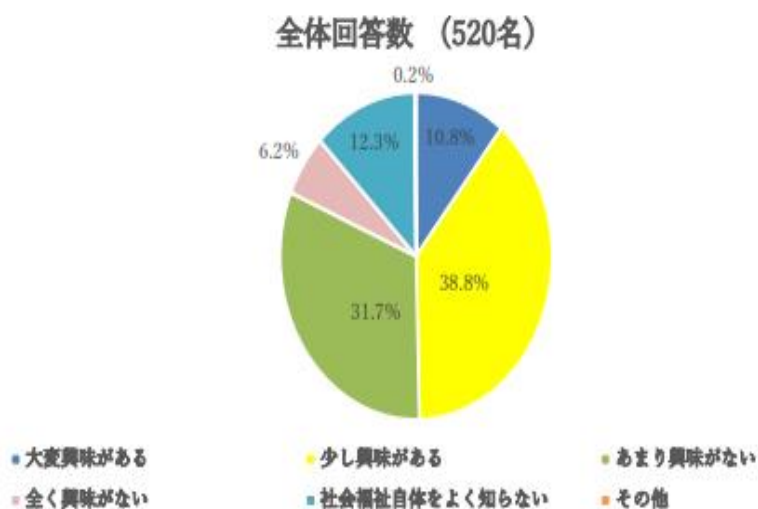
「よく知らない」「自分にはあまり関係がない」がそれぞれ10%以下であり、全体的に社会福祉に対するイメージを持っている生徒が多い結果であった。



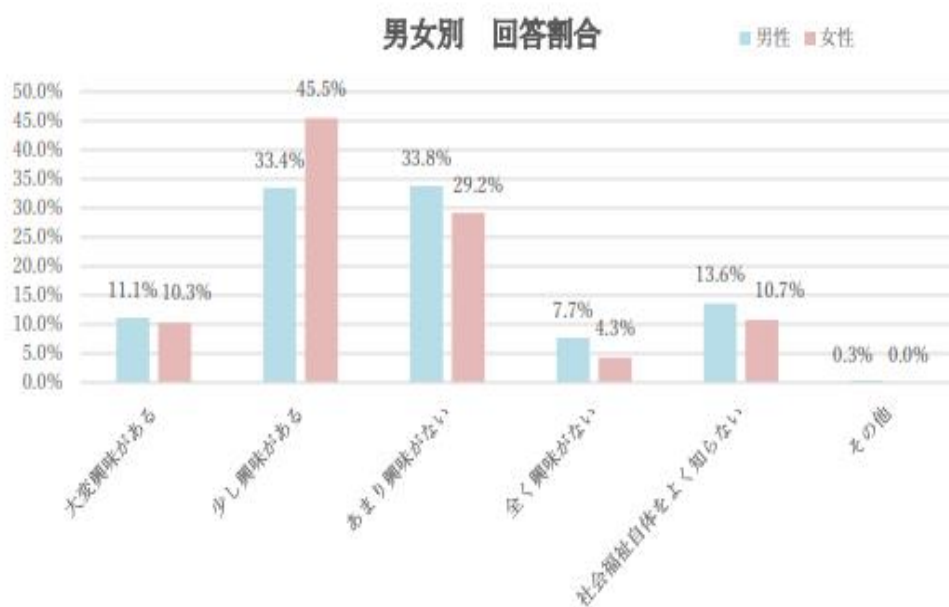
「高齢者介護に関係すること」が全体の5割以上の結果となったが、男性約4割、女性約6割と約2割の差が生じていた。

また、「障がい者支援に関すること」「子供の育成に関すること」についても、女性の方が1割以上高い結果となった。

(2) あなたは「社会福祉」に興味はありますか？ <1つだけ回答>



「大変興味がある」「少し興味がある」が49.6%とほぼ半数を占めた。
また、「社会福祉自体をよく知らない」が全体の12%の結果であった。

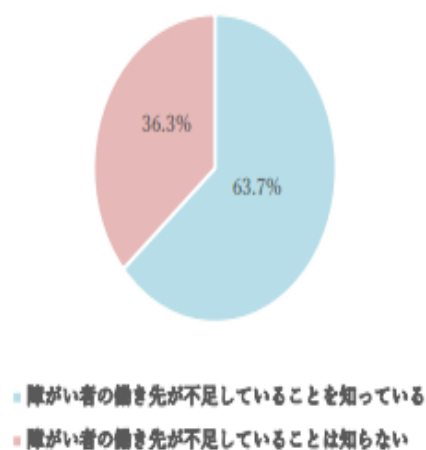


「大変興味がある」は男女ともに1割強で差がなかったが、「少し興味がある」と回答した生徒は、男性より女性の方が1割以上高かった。「大変興味がある」「少し興味がある」を合わせると、男性44.5%、女性55.8%の結果であった。

(3) あなたは障がい者の働き先が不足している課題を知っていますか？

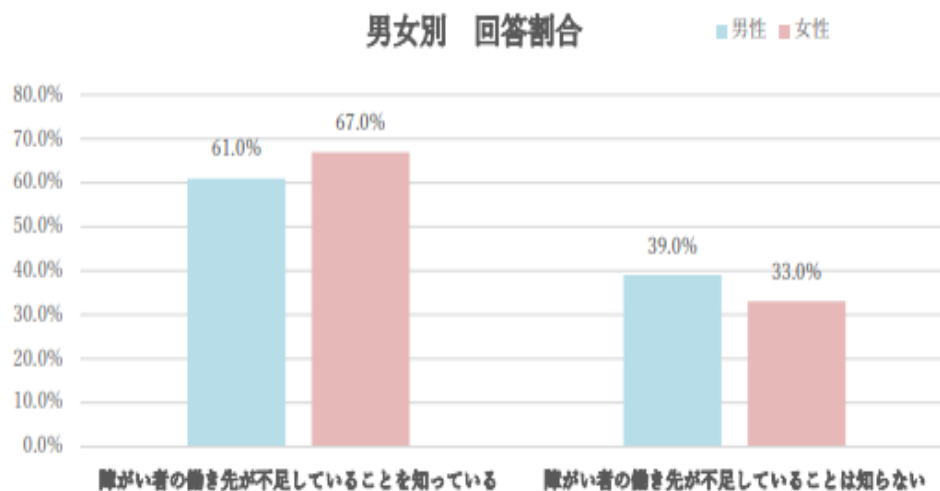
<1つだけ回答>

全体回答数 (520名)



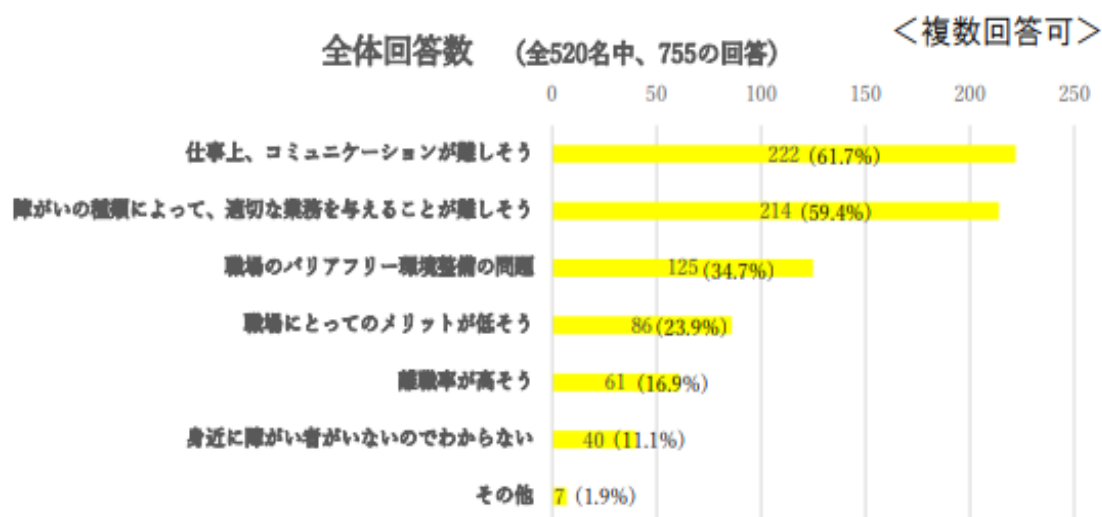
回答者の6割以上(約2/3)が、「障がい者の働き先が不足していることを知っている」との結果であった。

男女別 回答割合



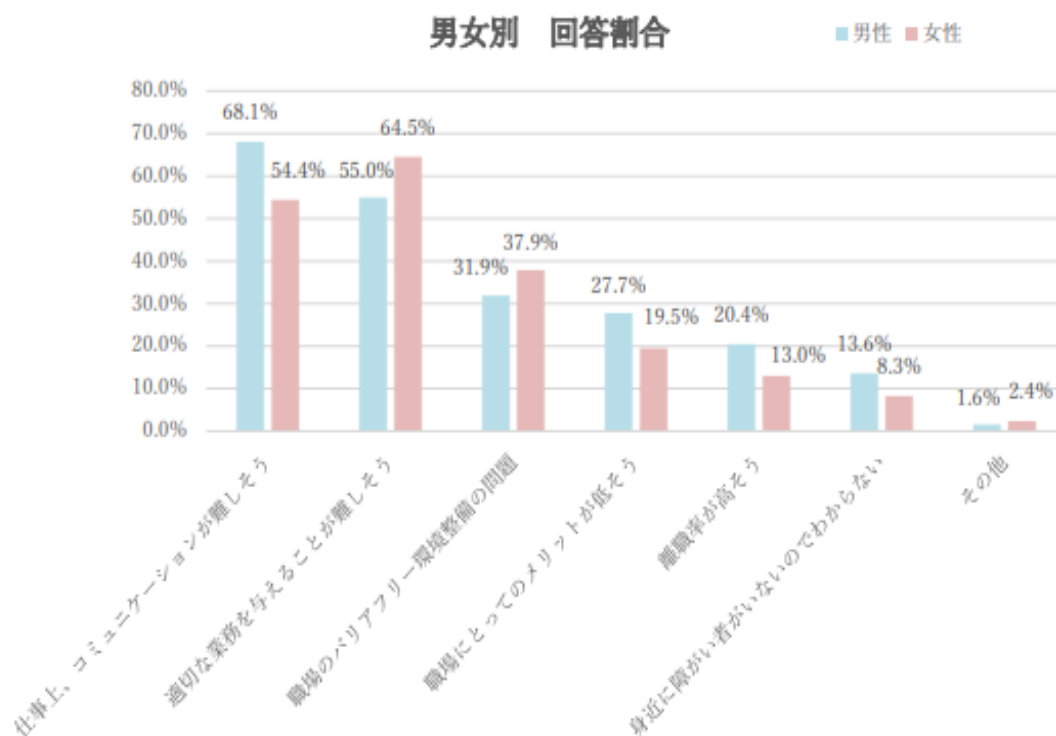
男性より女性の方が若干「障がい者の働き先が不足していることを知っている」割合が高い結果となった。

(4) 障がい者の働き先が不足している課題の原因について感じることを教えてください



「仕事上、コミュニケーションが難しそう」「障がいの種類によって、適切な業務を与えることが難しそう」が回答者の約6割が感じている結果となった。

また、その他と回答した生徒が1.9%と低く、「障がい者の働き先が不足している課題の原因について」は約9割の生徒が何かしらのイメージを持っていることが分かる結果となった。



「仕事上、コミュニケーションが難しそう」は男性の方が高く、「障がいの種類によって、適切な業務を与えることが難しそう」は女性の方が高い結果となった。

● 「その他」の回答

その他の理由	2年生			3年生			全体		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	合計
障害者に対する差別などがあるから		1	1	1	1	2	1	2	3
その人自身の問題ではなく、そもそもの働き先がないから		1	1				0	1	1
わかりません	1	1	2	1		1	2	1	3
総計	1	3	4	2	1	3	3	4	7

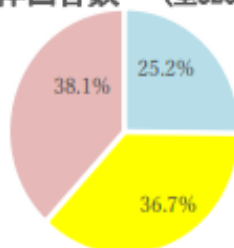
「その他」を選択した生徒は少なかったものの、「障害者に対する差別などがあるから」が一番多く、「その人自身の問題ではなく、そもそもの働き先がないから」といった回答があった。

農福連携を推進するにあたっては、「障がい者の働き先」が北海道内にどのくらいあるのか、「差別のない誰もが働きやすい環境なのか」といった現状の把握を行う必要がある。

4 【農福連携に関する認知度・関心度について】

- (1) 「農業の担い手不足」と「障がい者の働き先不足」の課題を解消させる「農福連携事業」が注目されていることをご存知ですか？ <1つだけ回答>

全体回答数 (全520名)

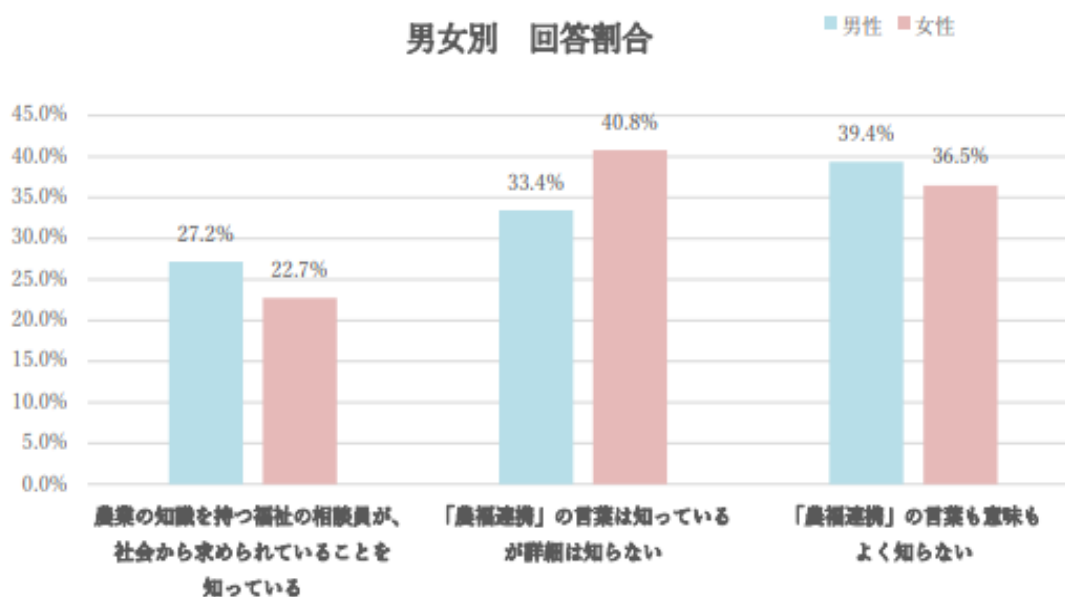


- 農業の知識を持つ福祉の相談員が、社会から求められていることを知っている
- 「農福連携」の言葉は知っているが詳細は知らない
- 「農福連携」の言葉も意味もよく知らない

「農業の知識を持つ福祉の相談員が、社会から求められていることを知っている」が全体の25.2%（約4人に1人）、「農福連携の言葉は知っているが詳細は知らない」が全体の36.7%（約3人に1人）で、合わせると回答者の6割以上が「農福連携」の言葉に触れたことがある結果となった。

反面、「農福連携の言葉も意味もよく知らない」が38.1%であり、まだまだ周知の余地がある結果であった。

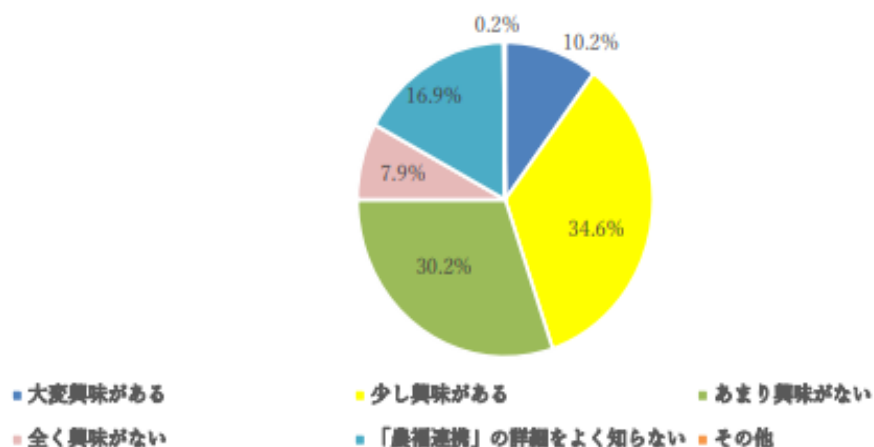
男女別 回答割合



「農業の知識を持つ福祉の相談員が、社会から求められていることを知っている」は男性の方が若干高く、「農福連携の言葉は知っているが詳細は知らない」は女性の方が若干高い結果となったが、合わせると男性が60.6%、女性が63.5%であり、どちらも6割以上の生徒に認知されていた。

(2) あなたは「農福連携」に関して興味はありますか？ <1つだけ回答>

全体回答数 (全520名)

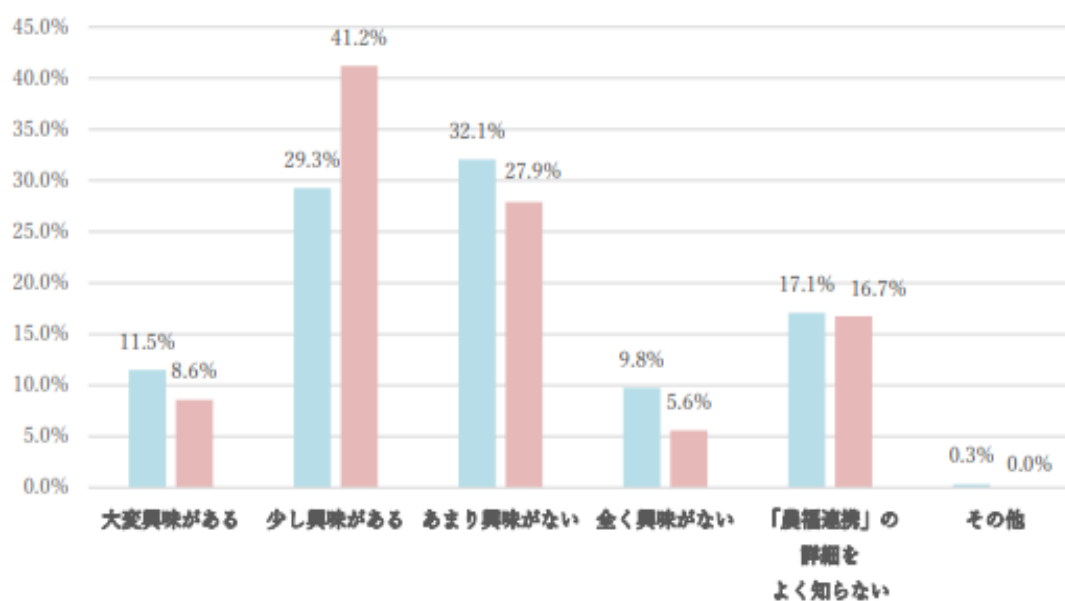


農福連携に「大変興味がある」生徒が10.2%で、「少し興味がある」と合わせて44.8%の結果であった。

また、「農福連携の詳細をよく知らない」が一定数いることから、今後、将来性のある職業としてさらなる周知啓発の必要性が求められる結果となった。

なお、その他1名は未回答。

男女別 回答割合



「大変興味がある」は男性の方が高く、「少し興味がある」は女性の方が高い結果となったが、合わせると男性が40.8%、女性が49.8%であり、全体的に興味を持っているのは女性の方が高かった。

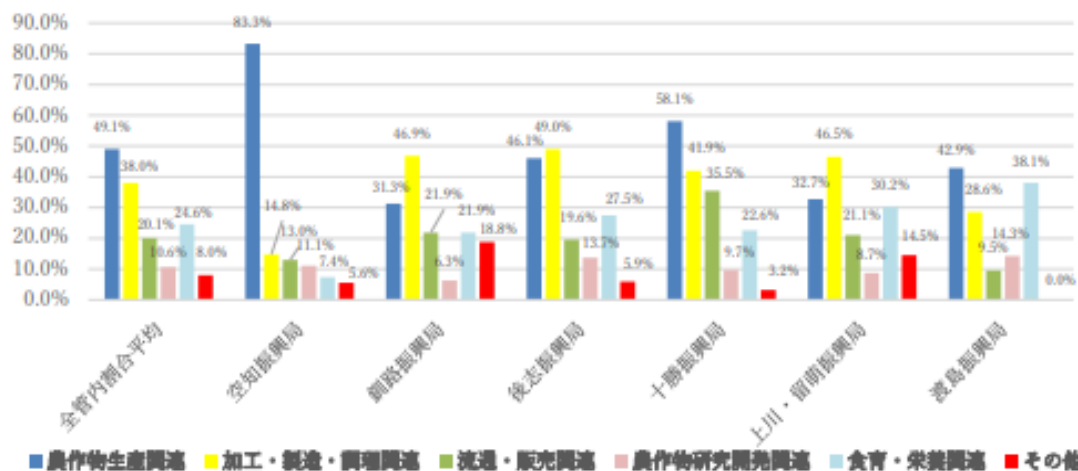
(参考) 振興局別集計

地区	回答数
上川・留萌	275
空知	54
後志	102
釧路	30
十勝	31
渡島	21
合計	515

※ 学年不明、性別不明、高等学校不明は集計から除く（有効回答数515名）

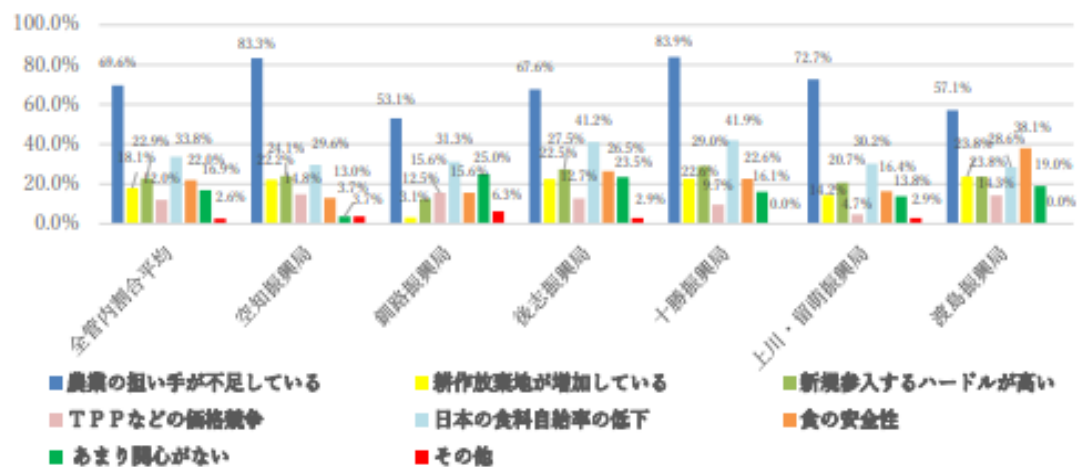
回答いただいた在籍高校から北海道内振興局別に分類し、設問を絞って、地域による傾向を集計した。

● 農業関連の学びの中で、どのような分野に興味がありますか？（複数回答）



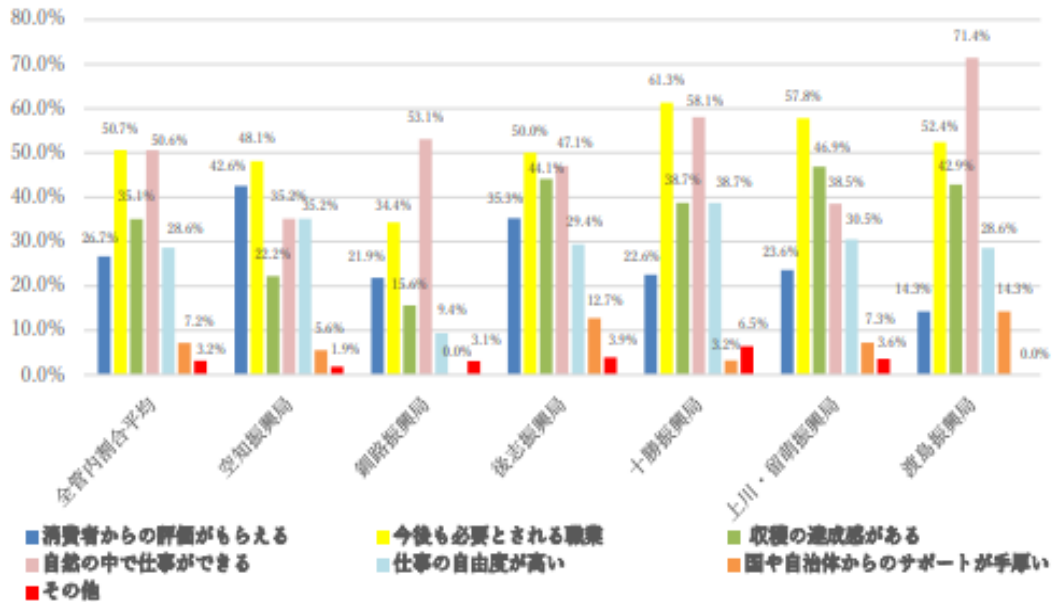
- 空知振興局は「農産物生産関連」に8割以上が回答した。
- 釧路振興局と上川・留萌振興局は興味分野の傾向が似ている（「その他」は林業や酪農が占める）。
- 十勝振興局と渡島振興局の傾向は似ているが、「流通・販売関連」に興味が高いのは十勝振興局。

● 農業分野の課題について感じることを教えてください（複数回答）



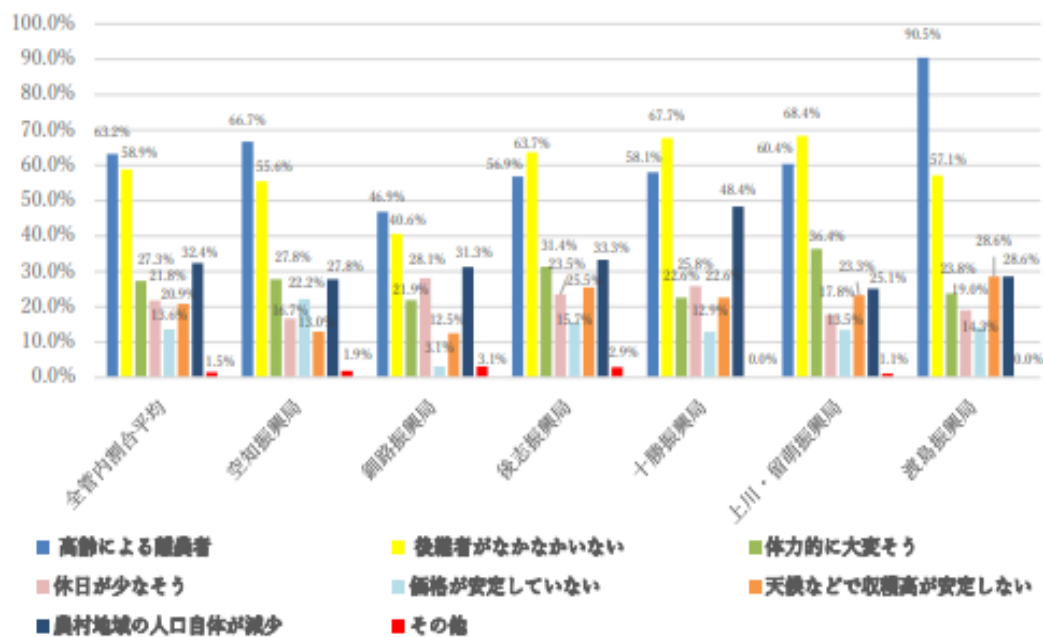
- どの管内も「農業の担い手が不足している」が一番多く回答、空知と十勝振興局は8割を超えた。
- 釧路振興局では「耕作放棄地の増加」を課題としている意識が極めて低かった。
- 渡島振興局は「食の安全性」が高い傾向となった。

● 農業分野の仕事の魅力について感じることを教えてください (複数回答)



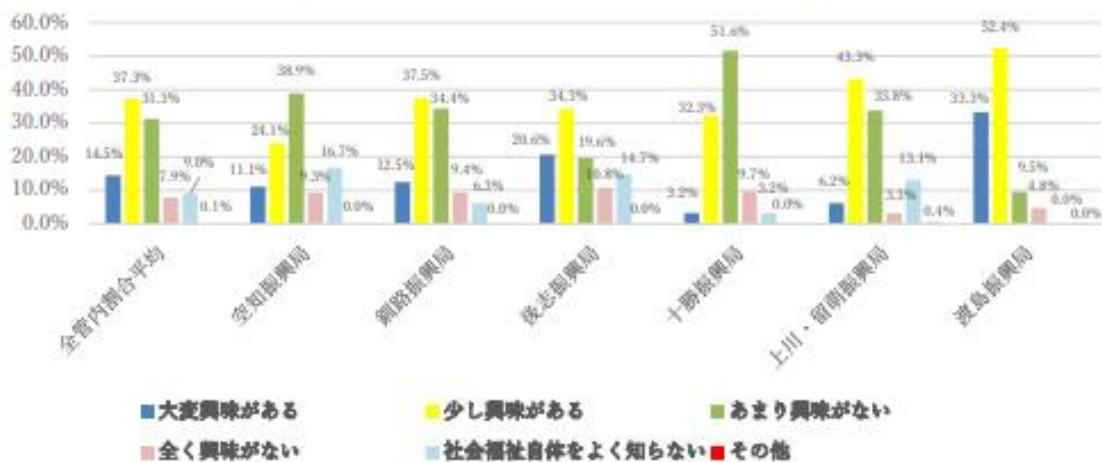
- ・ 「消費者からの評価がもらえる」は、空知振興局が高く渡島振興局が低い回答であった。
- ・ 釧路と渡島振興局では「今後も必要とされる職業」より「自然の中で仕事ができる」が高かった。
- ・ 釧路振興局は「収穫の達成感がある」「仕事の自由度が高い」が低い傾向となった。

● 後継者不足の課題の原因について感じることを教えてください (複数回答)



- ・ 「高齢による離農者が多いから」は渡島振興局が最も高く、9割以上の回答があった。
- ・ 「後継者がなかなかいないから」は、釧路振興局が若干低いが他に大きな差は見られなかった。
- ・ 「休日が少なそうだから」は、酪農のイメージから釧路振興局が最も高かった。

● あなたは「社会福祉」に興味はありますか？（1つだけ回答）



- ・ 「大変興味がある」「少し興味がある」は渡島振興局が高く、合わせて85.7%の回答であった。
- ・ 「あまり興味がない」「全く興味がない」は十勝振興局が高く、合わせて61.3%の回答であった。

● あなたは障がい者の働き先が不足している課題を知っていますか？（1つだけ回答）

- ・ 障がい者の働き先が不足していることを...
- ・ 障がい者の働き先が不足していることは...

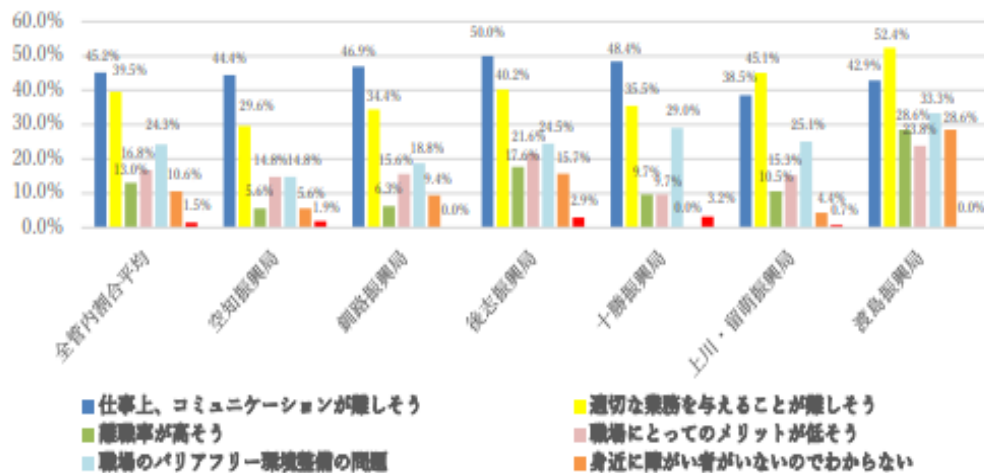


- ・ 「障がい者の働き先不足を知っている」は渡島振興局が高く、8割以上認知されていた。
- ・ 後志振興局、上川・留萌振興局は、6～7割程度の認知度であった。
- ・ 「障がい者の働き先不足は知らない」は釧路振興局が高く、半数以上に認知されていなかった。
- ・ 十勝振興局は釧路の次に認知度が低く、約半々の結果であった。

<振興局別の割合>



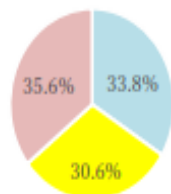
● 障がい者の雇用先不足の課題の原因について感じることを教えてください
(複数回答)



- ・「仕事上、コミュニケーションが難しそう」がどの管内でも約4～5割の回答があった。
- ・上川・留萌と渡島管内は「適切な業務を与えることが難しそう」が一番多い回答であった。
- ・「離職率が高そう」は、後志と渡島振興局で高く、他管内との差が大きかった。
- ・「職場のバリアフリー環境整備の問題」は、空知振興局が最も低かった。
- ・「その他」の回答では、「差別」というキーワードが3つの振興局から見られた。

● あなたは「農福連携事業」が注目されていることをご存知ですか？
(1つだけ回答)

全管内割合平均

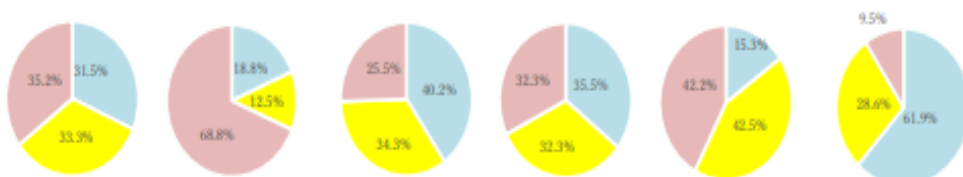


- 社会から求められていることを知っている
- 「農福連携」の言葉は知っているが詳細は知らない
- 「農福連携」の言葉も意味もよく知らない

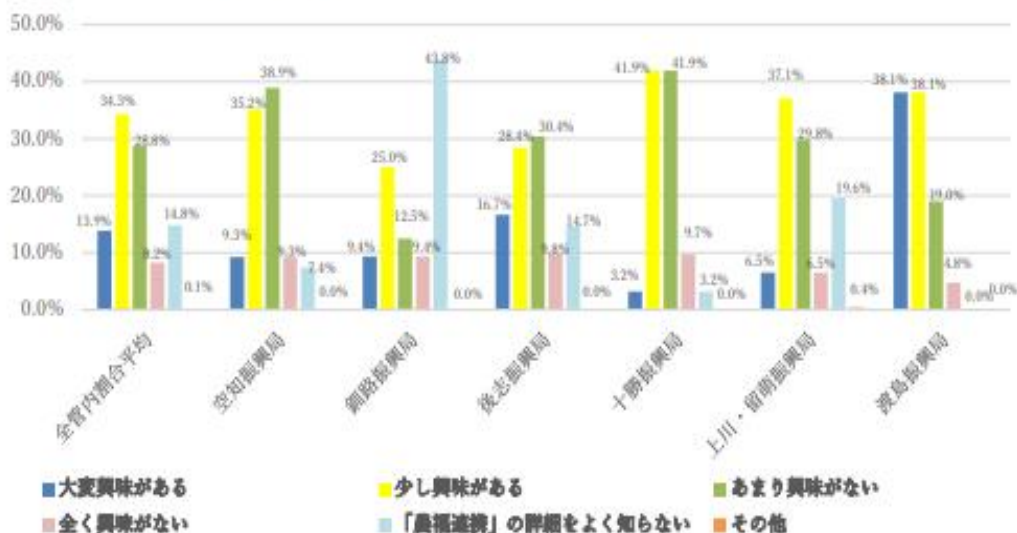
- ・ 渡島振興局では、約9割が「農福連携」の言葉に触れていた。
- ・ 「農福連携の言葉も意味もよく知らない」は釧路振興局が高く、約7割に認知されていなかった。
- ・ 空知と十勝振興局は、それぞれの割合に近い傾向であった。

<振興局別の割合>

空知振興局 釧路振興局 後志振興局 十勝振興局 上川・留萌振興局 渡島振興局

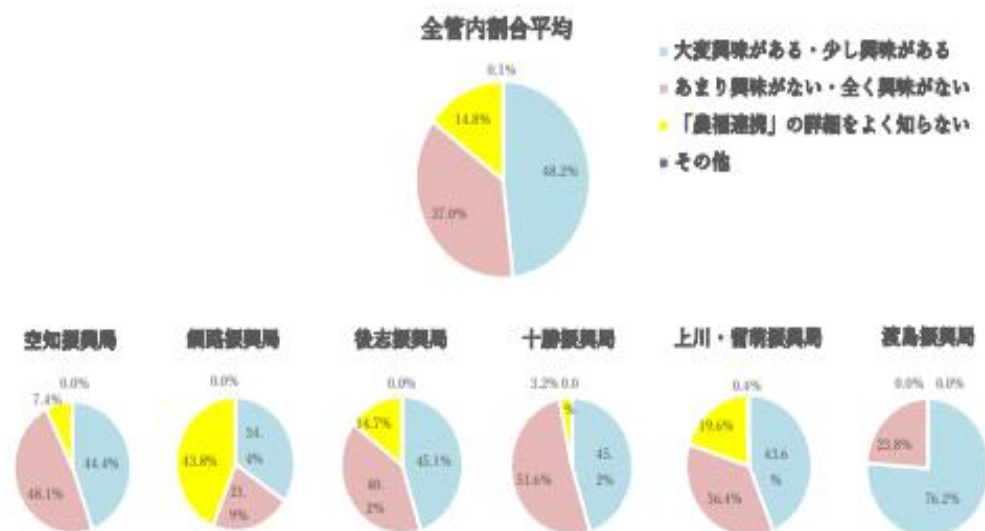


● あなたは「農福連携」に関して興味はありますか？（1つだけ回答）



- ・ 渡島振興局では「大変興味がある」が極めて高く、約4割の回答があった。
- ・ 「農福連携の詳細をよく知らない」は釧路振興局が最も高く、次に上川・留萌振興局であった。

<振興局別の割合> ※「興味あり」「興味なし」「知らない」の3つに分類



まとめ

1 【農業関連の学びについて】

- ① 将来、農業関連の仕事をしたと考えている割合は男性の方が高く、漠然とした興味で農業高校へ進学した割合は女性の方が高かった。
- ② 男性は農作物生産関連、女性は加工・製造・調理・流通・販売関連の学びに関心が高い。
- ③ 高校卒業後に農業関連の進路を考えている生徒は半数前後であった。福祉関連に興味を示している生徒が各学年10名と一定数いることがわかった。(全回答数の3.8%)

2 【農業分野の課題や魅力について】

- ① 農業の担い手不足を感じている生徒は71.7%で、学年・性別にかかわらず高かった。
- ② 新規参入を課題と考えている生徒が22.3%おり、起業に関連する教育を取り入れることでさらなる関心が高まる可能性がある。
- ③ 担い手不足の原因は、「後継者がいないこと」「高齢化」「農村地区の人口減」の回答が多かった。
- ④ 農業の魅力は「自然の中で仕事ができるから」との回答が43.3%であった。

3 【社会福祉に関する興味・関心度について】

- ① 社会福祉のイメージは、「高齢者介護」「生活をささえる」「障がい者支援」がそれぞれ約半数を占めたが、特に「高齢者介護」「障がい者支援」については女性の割合が高かった。
- ② 社会福祉に興味を持つ生徒は「大変興味がある」「少し興味がある」合わせて49.6%と約半数であったが、女性が55.8%と男性44.5%より高い結果であった。
- ③ 障がい者の雇用不足を知っている生徒は63.7%と全体の2/3弱であった。
- ④ 障がい者雇用の課題の原因は、「仕事上、コミュニケーションが難しそう」「障がいの種類によって、適切な業務を与えることが難しそう」が約6割の結果となった。

4 【農福連携に関する認知度・関心度について】

- ① 「農福連携」の言葉に触れたことがある生徒は、61.9%でまだまだ認知拡大が可能。
- ② 「農福連携」への興味は「大変興味がある」「少し興味がある」と合わせて44.8%であった。特に女性は49.8%と回答数の半分の結果であった。
- ③ 「農福連携の詳細を知らない」が16.9%であったため、さらなる周知が必要である。

(参考) 振興局別集計

- ・ 空知振興局 農産物生産関連の学びに興味がある生徒が83.3%、次に興味が多かった加工・製造・調理関連が14.8%であり、大きな差があった。
また、農業分野の課題意識が一番高い地域であった。
社会福祉に興味がある生徒の割合が35.2%で他管内と比較し一番低かった。
農福連携の認知や興味については全道平均に近い割合であった。
- ・ 釧路振興局 酪農・畜産関連の学びに興味がある生徒が2割を占めた。
耕作放牧地の増加という課題についての意識は低かった。
自然の中で仕事ができることに魅力を感じている生徒が多かった反面、収穫の達成感や仕事の自由度、休日のイメージについては一番低い結果であった。
また、障がい者の雇用不足を知らない生徒が53.1%おり、他管内より高かった。
農福連携の認知度は低く、68.8%の生徒が言葉に触れたことがなかったと回答したと同時に、農福連携に興味があると答えた割合が一番低かった。
- ・ 後志振興局 農産物生産関連の学びと加工・製造・調理関連の学びに興味がある生徒の割合がほぼ同じであった。
社会福祉に興味がある生徒が54.9%で高く、障がい者の働き先不足の課題を知っている生徒についても72.5%と高い結果であった。
農福連携の認知や興味については全道平均に近い割合であった。
- ・ 十勝振興局 流通・販売関連の学びに興味を持つ割合が他管内と比較し一番高かった。
農業の担い手不足を感じている割合だけではなく、農村地域の人口減少を感じている割合についても他管内より高い結果であった。
社会福祉に興味がある生徒の割合が35.5%で空知振興局の次に低かった。
農福連携の認知や興味については全道平均に近い割合であった。
- ・ 上川留萌振興局 他管内にはいなかった林業関連に興味を持つ生徒が管内回答者の6%を占めたほか、酪農・畜産関連や花卉・園芸の学びに興味がある生徒がいた。また、加工・製造・調理関連の学びに興味がある生徒が、農産物生産関連の学びに興味がある生徒より多かった。
社会福祉に興味がある生徒の割合が49.5%で回答数の約半数を占めた。
農福連携の言葉を知らない生徒の割合が、釧路振興局の次に高かった。
- ・ 渡島振興局 農作物生産関連とほぼ同じ割合で食物・栄養関連に興味がある生徒が多く、農業分野の課題として食の安全性を回答した割合が他管内と比較し一番高かった。
自然の中で仕事ができることに魅力を感じている生徒は71.4%、高齢による離農者を課題に感じている生徒は90.5%であった。
社会福祉に興味がある生徒の割合が非常に高く、85.7%が興味を持っていると回答し、障がい者の働き先不足を認知している生徒についても81.0%であった。
農福連携は90.5%の生徒が言葉に触れたことがあり、興味を持っている生徒は76.2%の結果であった。

謝 辞

この度は、文部科学省委託事業「地域活性化のための農福連携人材育成事業」アンケートにご協力いただき厚く感謝申し上げます。

今回の農業科を対象とした高校生へのアンケート調査では、北海道農業が抱える課題や魅力、社会福祉に対するイメージなどを確認できただけでなく、農福連携を取組むにあたり多少なりとも興味を持っている高校生が回答者の半数近くいることが分かりました。

また、北海道の課題に真摯に向き合い、肯定的なご意見をお持ちの高校生が多いことも分かりました。

この結果をもとに、本学として農福連携の今後のあるべき形を模索しつつ将来の人材育成に貢献していきます。

【別紙5】令和4年度文部科学省高専接続・分野横断連絡調整業務
第3回合同会議

有識者から（浦崎氏：「高専接続事業の意義」）

高校との接続状況 現状報告

（上記現状報告を受けて議論）

■2023年1月30日（月）

■参加者（敬称略）

沖縄専門人材開発研究会：舟本怜士郎ほか

小山学園専門学校東京工科自動車大学校：佐々木章、影山裕介、二ノ宮

日本eスポーツ学会：笥 誠一郎

宮崎総合学院宮崎情報ビジネス医療専門学校：尾崎勝一、富山和年、花盛和也、飯干賢、
馬場隆、古川幸生ほか

宮崎県立延岡商業高等学校：山口啓一郎

国際総合学園新潟会計ビジネス専門学校：川島淳子、藤井貴志、篠塚、大野麻衣子

NABI コーディネーター：丸善 CHI ホールディングス 三好晶子 ほか

西野学園札幌心療福祉専門学校：飯島英幸、佐藤誉匡

北海道余市紅志高等学校：大野悟

仙台北学園仙台リハビリテーション専門学校：根本峰人

智帆学園琉球リハビリテーション学院：福田聡史、上江洲 聖、井上ほか

東京リーガルマインド：岡本史子、川崎正人

日本航空大学校北海道：山本浩

<有識者会議メンバー>

大正大学地域創生学部教授：浦崎太郎

専修大学商学部教授：渡邊隆彦

日経 BP：高津尚悟、高橋健太郎

<文部科学省>

小江謙太郎、新川佑

（事務局）日経 BP

日経 BP・高津——これより合同会議を開催する。文部科学省からの挨拶に続いて浦崎先生
のミニ講演、高・専の接続状況に関する皆さんの発表というかたちで進めていく。

文部科学省・小江氏——本日はお忙しい中お集まりいただき、感謝する。早いところでおおよそ2年、短いところでおおよそ1年弱、特に今年度からは実証授業も本格的にスタートしてきた。高校と専門学校との接続という事業の中で取り組んできてもらった中から、課題や、連携にあたって改めて確認事項等が各団体で出てきていると思う。今回からは趣向を変え、そういったことを各団体から持ち寄ってもらい、議論の場にしたい。各団体の皆さんには率直に話をしていただき、いろんなことを持ち帰ってもらう、あるいは疑問を解消してもらう場にしてほしい。

日経 BP・高津——有識者会議でも、2年度目を終了するにあたり、いま一度この高専接続事業の一番大切なところを再確認することが大事ではないかという指摘があった。本日冒頭に浦崎先生から約15分程度、高専接続事業に関して再確認してもらいたい重要なポイントについてプレゼンテーションしてもらう。

【高専接続事業の意義】

大正大学・浦崎氏——（画面共有：資料「高専接続事業の意義」）今日改めて伝えたいのは、この事業の原点やレベル感。今、高校は偏差値中毒、専門科でいえば検定中毒で、鍵はこの中毒症状の解消にある。せっかく専門学校が一生懸命行っても、これを解消しないとうまくいかない。この中毒を解毒するために専門学校の皆さんの力をお借りしたいというのが今日の話。

1980年代のサラリーマン思考、これで高校教育がおかしくなってしまうので、これをきちんとした方向に戻すために力を貸してほしい。具体的には「自分・教科・社会」が分断されているので、それを一人一人の生徒の中でもう一回つなぎ直すために支援をお願いしたい。高校を社会に開いていくために一番適した役は、私は専門学校の皆さんだと思っている。

新学習指導要領はこういう学び。自分と社会とそれから学問、教科、これを重ねていく学びというのが今は求められている。これも復習になるが、マイプロジェクト。一人一人がより良い社会を作っていこうとチャレンジをする。それだけでは素人ではできないことは限られているので、学校という場で賢くなってプロジェクトに生かしていく。学校にとって一番大事なものは、この教科の学びが変わることだと思っている。

専門学校の皆さまは本当に貴重な資源を持っている。一つは何かというと、企業と密接な関係性を持っていること。高校が企業とつながろうと思うと、やけどしてしまい、つながらない。しかし、専門学校の皆さまは教職的な専門性、難しいことをきちんとかみ砕いて

伝えていくセンスや力量を持っている。社会で起こっていることを高校生に対して易しく伝えていく、そういう仲介役を果たせるのが専門学校の皆さまの大きなポテンシャル、これをぜひ改めて自覚してもらえるとありがたい。

今、高校は探究や地域連携と言っているが、なかなかうまくいかない。その原因にわれわれの雇用労働思考というものがある。1980年代以降でまとめたのがこの図。専門科でいうと、昔は家業や自営業のために実用的な学びをしてきた。ところがサラリーマンのほうがいいとなると、より良い就職のためには検定や資格を持っていたほうがいいということで、生徒一人一人の興味関心は関係ない、資格や検定を取った者が勝ちみたいな流れになる。保護者も含めて子どもも、より給料の高いより安定した会社となったら、地元には残らず都会に行く。これが今回のこの事業のテーマである「地域の中核的な産業人材をどう作っていくのか」と関係しているところ。地元と関わっていないから、地元に残るわけがない。

次は普通科。昭和40年代くらいまでは好奇心に基づいて学究的な学びというのが普通科で提供されてきた。ところがより安定した会社、収入のいい会社に行こうと思ったら学歴が必要で、そのためには偏差値が必要。そのためだったら、もう興味関心は関係ない。地域で何かやっているとか必要ない。時間があったら受験勉強をやるという教育がまかり通るようになってしまった。それだと高校生は爆発するので、それでなだめるためにニンジンとしての部活動を手放せなくなっているのが実態。地元と分断されているから、地元に残ろうという気にはならないということだ。

要するに大学に向けての予備校になってしまったということだが、一番大事なのは3点目。いくら専門学校の皆さまが興味関心を引き寄せようとしても、基本的な体質として、一番下になっている。高校自体も生徒をより偏差値の高い所に放り込みたいという、これが本心。そういう先生らからすると、専門学校は苦役から逃避した脱落者の受け皿という位置付け。これが本心となっているところに、いくら興味関心を持たせようとしてもなかなか厳しい。だから、キャリア教育的な視点で何かやろうというのは、重篤な中毒患者に塗り薬をつけるぐらいのことでしかない。それぐらいのレベル感だということをぜひ理解してほしい。

もちろん、こうした状況はまずいので、やはり知的好奇心は大事だということで1990年代の終わりに京都市立堀川高等学校を皮切りに探求が導入されていったが、20年経って、ようやくその意味が理解されてきた。

一方で過疎地というのは、都会に人が逃げてしまう。これで困った典型は岩本悠さんが頑張っていた隠岐島前高等学校。地域で課題発見解決学習をするという点では本当にすごい

貢献だったが、まだ残念ながら過渡期だった。週 30 時間ある授業の中で総合的な学習の時間だけ少し変わったことをしても、あとが公式代入型の受験勉強をやっていたら、人材育成効果、地域の産業を担っていくような人材は育たない。そういう限界があった。それが今、この部分がマイプロジェクトに変わっているということなのだ。

ぜひ認識いただきたいのは、(資料) 左側の現状。いくら「総合的な探求」の時間と課題研究の時間にキャリア意識を上げるような出前講座的な取り組みをしても、教科学習が偏差値至上で苦役になっていると、高校と専門学校はうまくつながらない。楽しくて「これを深めていったら、自分も世の中で頑張れるかな」という、そういう感覚が必要。

具体的にそれはどういうことなのかという事例を紹介したい。実は、専門学校の皆さまと私が今勤めている大正大学は生徒の出身校が重なっている。なので、入ってくる学生が高校時代にどんな経験をしてきたのか。高大接続の課題も専門学校の皆さまとわれわれ大正大学はまったく一緒だと認識している。大学生から「どんな高校教育を受けてきたのか」というのを探っていると、すごいことが起こっていて、本来あるべき方向に改革できた高校はほんのごく一部。両極端。出身校格差が本当に壮絶で大半は本来高校でつけるべき力をつけずに大学に入学しているのが実態。ということは、学び直しを大学でやらざるを得ないということだ。

もう一つ、私どもがこういうことをやっている価値というのは、地域創生学科というのは地域自習という時間を持っていて、社会と理論を行き来する学びを作れるということ。先ほど示したように、その点は専門学校の皆さまとまったく同じカリキュラムの構造をしているので、私どもで試してみたことは、専門学校の皆さまが高校に対して連携を探っていく時の何かヒントになるのではないかという思いを持っている。

具体的にやったことの一例を紹介する。「とにかく君たち、リアルな社会で活躍してみようよ」ということで、東京・池袋にサンシャインのアイランダーという離島関係のイベントに参加した。学生たちはイベントの前、夏休みに一回島へ行って見て、それを土台に現場と理論をつなぐような学びを実習で提供し、それを踏まえてイベントのブースで貢献しようと、大学1年生を対象として島に送り込んだ。当然、一般教養がほとんどなので、まだ専門科目をやっていない段階。そういう学生に対して「君たち、2年生、3年生になったらこういう学びをしていくんだよ」ということで、具体的には地域経済分析という授業があり、RESAS を使って分析する。経営学の授業だと、STP 分析、Segmentation Targeting Positioning という、こういうことを専門科目の授業でやる。より社会にがっつき関わっていこうと思ったら、君たちは学問的にも強くならなければいけない。一度、それらの科目でやることを組み合わせて旅行プランを作ってみよう。これは先輩が作ってくれたひな

形とまったく同じことをなぞる形でやっていく。そうすると、行く先の島ごとに特性が違うので、自分が担当する島ならではのプランができてくる。こういうワークを通し「自分が今やっている学びというのは、将来こういうふうに学問的にも社会につながっていくのだ」という実感が持てるようになる。この写真は実際にアイランダーというイベントで彼らが活躍している光景だ。

こういうことを丁寧にやっていくと、学びと社会はつながっているという実感や、学ぶことは楽しいという実感を持つことができる。楽しいということが土台にあると、いろんなことをどんどん自分で考える。苦役だったら考えるわけがない。なので、こういう経験が高校の時にたくさんできていれば、専門学校に来た時に学び方は変わってくる、さらに社会に出た時の例えば離職率が変わってくる、活躍の度合いも変わってくる。

以上、今日申し上げた高専接続の核心は、高校教育の基調を変えること。えげつない言い方をすれば、偏差値中毒、資格や検定の中毒になっているのを解毒することだということ。その核心というのが、自分と教科と社会をつなぎ直していくということ。それはいくつかの学校で考えているような出前講座では解消できるような代物ではない。

志願者増も、残念ながら高校は専門学校に（生徒を）やらせたくないという本音も持っているので、なかなか効果がない。本当により安定的に学生をゲットできて、それより高度な教育を施していこうと思ったら、高校生の学びを変えていかざるを得ないということ。実は、そのために絶大なポテンシャルを持っているのが専門学校の皆さんだ。ただ、これまでも何度か申し上げてきたように、一つの専門学校、一分野の学校だけで変えるのは限界がある。なぜなら生徒はいろんな興味関心を持っているから。なので、同じ地域の中で横にネットワークを作って対処していくというのが本質だと思っている。

今日は時間の関係で、超特急で話をしたが、大正大学の月刊誌『地域人』1月号がたまたま高専や高校の特集号で、今の内容をテキストにしているので、ぜひ活用して、来年度に向けた計画を立ててほしい。以上。

【高校と専門学校の接続状況 現状報告】

日経 BP・高津——では、事前の宿題で提出してもらっている資料について。まずは高等学校との接続状況、連携状況について、現状どういうポジションにあるのかについて説明してほしい。順番は整理番号順で。

沖縄専門人材開発研究会・舟本氏——現状、計画書どおりにわれわれは動いている。4月から連携事業を行い、特にここまで何かトラブルというのはあまり大きくは起きていない。

台風の影響でできるかできないかという調整はぎりぎりあったが。

日経 BP・高津——高校とのビジョンの共有という観点でいうとどうか。

沖縄専門人材開発研究会・舟本氏——基本的に、進路が明確でない高校1年生段階の生徒たちが3年間を通して自分で進路先を決めていける、これが、われわれが高校側ともずっと共有しながら話し合いは続けられているという状況。

小山学園・影山氏——高校との共有は二つの軸があると考えている。一つは高校生、生徒たちをどう育成していくか、どういう状態を作っていくかという点。今回は高校が主語なので、事前のシートでも大学進学や専門学校進学を選択進路ごとのワークシートがあったが、どの進路であっても専門学校のことを知った上で、社会のことも、仕事のことを知った上で納得感を持って進路選択をしてもらう状態にしていきたいと思っている。

今回は1、2、3年生と積み上げていくので、1年生は分野に対する理解度やワクワク感、期待感を持ってもらう。2年生はそこを少し社会や仕事とつなげていく。3年生は大学なのか、就職なのか、専門学校なのか、その他なのかという進路選択。高校生という主語のビジョンとして、その辺についてしっかり知ってもらう状態を作ること、そういった納得感が一つキーワードになると思っている。

一方で高校を主語にしたビジョンもこの取り組みでは必要。先ほどの浦崎先生の話にもあったが、われわれも今苦勞している点でいうと、そもそも高校の先生自身が専門学校のことをあまり知らなかったり、仕事の経験がなかったり。その中で高校の先生自身にもそういった社会のことも状況、企業の声、その辺りを知ってもらう中で、少しスパイス的にはなるかもしれないが、教科指導、進路指導、面談であったり、そういったところに一つ寄与ができればと思っている。

この実証は定量的な検証を中心にやっていくわけだが、実証でやっていくと一人一人のエピソードという意味では、生徒と担任の先生との面談みたいなシーンも一つのキーワードになるのかとも思い始めている。そのあたりで高校との連携では課題もあるし、高校の先生方にどう理解してもらうか。経営ボードの先生方とは共有できていても、現場の先生方との共有はまだ課題も残しているので、取り組みの中で少しずつでも浸透させていければと思っている。

日本eスポーツ学会・笈氏——私どもは対象となる高校が通信制という高校の形態がほとんどで、eスポーツ業界自体がまだ2018年のeスポーツ元年を経て、そのあたりから出て

きた高校がほとんど。どういった事業、カリキュラムをやっていくか、高校側も割と手探りみたいなのところもある。そういった中で今回、さまざまなかたちで高校生からアンケートをとり、入ってくる人たちに対しても「全員がプロゲーマーになれるわけではない」という現実も見せつつ、e スポーツ業界にはこういう仕事があり、こういうキャリアに関する知識が必要と提示したことによって、興味関心を持ったという人たちが非常に多い。

通信制教育のe スポーツの授業は1~3年が全部ごっちゃに行われているので、そういった意味では積み上げというよりは、この教育の中でどのように学生に社会に出てからのイメージを持たせることができるのか、それから専門学校と連携して「さらにいろんなことを学ばないと社会に出る時も中途半端に出てしまったらまずい」ということも含め、カリキュラムを作っていくことが必要なのかなと。それに対して高校も「確かにここら辺は入れていかなければいけない」という共有をできている部分は非常に大きいと思っている。

新潟会計ビジネス専門学校・川島氏——実践的な経理事務の授業による早期スキルアップ事業ということで、日商簿記3級から1級のオンライン講座の開発とともに、就労意識醸成講座ということで産業チケットゲームを使いながら、企業がどうなっているだとか組織の成り立ち、そういったことも含め、専門学校と高校と実証をして進めている。やはり資格だけということになると、学習指導要領のところもあるが、商業高校では実際に全商の簿記が展開されている中で、当校が日商簿記になると、またカリキュラムの中に含まれることがなかなかできない。そこでの連携に関しては、日商簿記の必要性などを今後は伝えながら、まずは受験をしてもらうことを、折り合いをつけながら進めている。

そもそも、私たちが実際に目指しているKGIのところでは「入社後短期間で戦力となり、さらに従来よりも高いスキルとポテンシャルを有した企業の利益創出に貢献できる人材の輩出」となっているが、やはり商業高校ということもあり、新発田商業高校自体のビジョン・教育目標が「勤労と責任を重んずる有為な産業人を育てる」ということで、もともと社会で活躍できる力を養う取り組みを商業高校自体が推進しているところもあり、その中ではビジョンのすり合わせができていく状況ではある。

ただ、生徒の進路選択に関しては就職もあれば、専門学校や大学進学ということでもさまざま、全ての生徒が当事業のメリットを享受できるようにするためには、たとえ高専接続事業であっても専門学校進学者に限定するのは得策ではないということで、これに関しては高校と専門学校、県の教育庁の方とすり合わせをし、三者で判断をして、「高校で学んだ技能を生かして進路を決定していく」という目標を同一にして決めている状況だ。

西野学園・飯島氏——本日、連携事業で実際に連携をした高校の先生も参加している。

本校は、北海道の余市紅志高等学校（以下、余市紅志高校）、札幌圏域の札幌大通高等学校、札幌あいの里高等支援学校と連携事業の実施をしている。まず、余市紅志高校は総合学科で、そちらのバリアフリー農園の共同造園の過程において、というテーマで本校の学生が余市紅志高校に伺い、高校生と一緒にバリアフリー農園に関していろいろと考え、授業を進めていくという内容だ。ビジョンとしては、五つある。一つ目は、課題を発見し解決する力を身につけ向上をすること。二つ目に、専門学校生や地域住民などの交流によって相手に対して自分の考えを分かりやすく話すコミュニケーション能力および協調性を向上すること。三つ目、計画性を高め、いつまでに何をどのようなかたちにしていかなければならないのか見通しを持って自主的に行動できるようになること。四つ目は、地域貢献、共生社会の実現を意識し、自分ができることは粘り強く取り組もうとする使命感や責任感を高めて積極的に行動できるようになること。最後五つ目は、専門学校生との直接的な関わりにより、高校生自身が今後どのような人材になりたいのか将来像をつかめるということを経験として、高校生と本校の学生が連携事業を行っている。

もう一つは札幌圏域。こちらは「農福連携」という大きなテーマで、今度は本校の教室をメインにし、高校生に来てもらい、農場にここから出掛けて行くなどしている。こちらのビジョンとしては、精神障害、知的障害、発達障害等の障害がある人も含め、誰もがそれぞれの力を発揮できる場を整えることを学ぶ。主にこの授業では農業に関連する場で調整していくことを学んでいく。「誰もが安心して農業に取り組むことができる環境は、障害の有無によらず誰もが過ごしやすい環境となり、いろいろな人が互いに支え合って充実した生活を送ることができる共生社会を目指す視点を獲得する」というテーマで今年行った。

琉球リハビリテーション学院・福田氏——今年度は、沖縄県内4校と宮城県で2校の計6校が実証校となっている。その中で特に連携をしっかりと年間を通して行っている所は、総合学科である陽明高等学校。キャリア教育の一環として、「産業社会と人間」という科目の中で職業の選択決定に必要な能力、態度、将来の職業生活に必要な態度やコミュニケーション能力を養うことや、自己の充実や生きがいを目指して生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を育てることを目標として共有をしている。担当の先生とも相談しながら、今年度からその科目の中で一緒にプログラムを進めていき、その中でコミュニケーションの科目であったり、マナー講座、キャリア教育の中の職業講話であったり、企業訪問といった体験など、いろいろなものを取り組んで実施している。

今月25日には、そのキャリア教育の発表会が高校であり、そちらに参加した。今年度のこういうキャリア教育が高校生の学びになったのかという報告があったので、そちらも参考にしながら、次年度に向けては、2~3年生も含め、さらに医療福祉関係の対人援助職としての必要な技術スキルを身につけるようなプログラムに移行していくかたちで進めてい

きたいと考えている。

また、福祉科に関しては、県内では中部農林高等学校と一緒に進めている。こちらは最初から福祉科ということで対象が医療福祉分野なので、医療福祉分野に必要なスキルや対人援助職として基礎になる部分でコミュニケーションスキルを高めるプログラムのニーズが高校からあったので、それを共有しながら実際にプログラムの中で進めた。先生方からはコミュニケーションスキルや、教育プログラムを導入したことによってさらに生徒のモチベーションや意識が非常に変わってきたということで評価をいただいている。

仙台北学園・根本氏——私どもでは、宮城県および福島県の特別支援学校と連携を進めており、宮城県の高等学園3校、福島県の支援学校高等部2校と実証講座を進めている。コロナ禍もあり、なかなか思い通りに進まないところもあるが、おおむね計画通りには進んでいる。今日の話であるビジョンの共有という点においては、私どもとしてはキャリアデザインをしっかりと目的意識として高校生に植え付け、専門学校は地域の人材を非常に重要視している。ぜひ支援学校の生徒たちも地域にとって有効な人材になってほしい。

その中で一点あったのが、これはコーディネーターからのキーワードだが、生徒の個性に合わせた「ライフデザイン」も大切ではないかということ。当然、専修学校だからキャリア教育に関しては自信を持って提供できるが、やはりそれ以外に生徒が自立して将来社会でやっていく上では、そういったライフデザイン的な部分についても専修学校のノウハウを含め、高校との連携は重要なのではないかと指摘があった。次年度に関してはそのあたりもキーワードとして折り込んで進めていきたいと思っている。

東京リーガルマインド・岡本氏——私どもは埼玉県下の情報系専門学校と工業高校、さらに業界企業の賛助を得て、電気通信工業業界に人材を輩出するべく、教育関連のプラットフォーム、高校または専門学校もしくは就職という、それ以後のキャリアパスの形成を明確にし、人材育成モデルを構築するということを行っている。ビジョンについては、各教育機関とコンセンサスを得て、総論部分は賛同いただいている。ただ、各論という部分になると、時間的な経過もあると思うが、これはなかなか足並みがそろうような状況にはいまひとつ至っていない。教科のフレームと学習のストーリーの構築から当初、入っていこうと打ち合わせをしたのだが、なかなかこれではスタートが切れないということもあり、既存のフレームに置き換えが可能なコンテンツを投げる、入れる、そこから新たなストーリーを展開していくということで今は進めている。

最近、私どもは通信制の高校とも連携を始めている。皆さん、高校ということになってく

ると、選択肢は就職か進学か、大別するとそこになる。さらに就職ということになってくると、今専攻している科目の延長上にその職を求めるのかということになってくると、結果そうではないという現実がある。まして専門性を高める大学進学ということになると、極めて数的には比率として減ってくる。取りあえず専門学校と。冒頭、浦崎教授からあったように、ともするとその受け皿ということに専門学校がなっている感は今現在、高校とやり取りをする中で実感として持っている。

今後、この業界に人材を輩出していくにおいて、まずは関心を持ってもらえるコンテンツから、そこに誘導するための資格、あるいは情報関連のグループワーク形式の教育コンテンツを中心にやっていくことで、各教育機関の教員の方たちから困りごとに対応する手だてとして賛同いただき、次年度以降には実稼働を広げていく段取りにしているところ。コンセンサスをどこまで得られているかは、題目上は通っているが、実際の具体的施策に関してはまだまだ壁があり、一つずつ剥がして進めていくという状況にある。

宮崎総合学院・尾崎氏——高校とのビジョンの共有という問いには、私どもはなかなかできていないところがあるのかなという回答をした。今のところ、高校1年生のビジネス基礎とプログラミングの科目をどうしていくかに力点を置いていたので、全体的なビジョンの協議が不足していたと思っている。ただ、その中でもビジネス基礎については、高校、企業、私どもでどういう授業内容にして生徒をどういうところに持っていきたいかについては共通認識もある程度でき、授業もやり、成果もある程度出ていたと思っている。

もう一つ、今度はプログラミングの実証講座。こちらも今年度並行してやりたかったのだが、なかなか進捗が難しかった。ビジネス基礎の1年生に対するキャリア教育と比べると、プログラミングという授業はいろんな要素がある。例えば高校としてはプログラミングの全商の検定対策をやる。その一方でコーディングの時間をどのくらい取れるのか。同じ高校1年生でも、最初の頃は導入の分かりやすい授業でいいけれども、どんどん進んでいったらある程度レベルアップもしていけないといけない。今回、情報ソリューション科で、プログラミングで終わるのではなく、プログラミングで学んだことを基礎にし、AIやデータサイエンス、2~3年生の学科につながっていくという部分もある。今思えば、プログラミングの科目を通して高校生をどういう姿に持っていくのかの共通認識がうまくまとまらなかったのかなと。そういう意味で、ビジネス基礎のようにスムーズにプログラミングの実証講座は計画がなかなかうまくいかなかったのかと、今のところは感じている。

日経BP・高津——皆さんから一通り、ビジョンについての共有をしていただいた。ビジョンの共有については、きちんと高校と共有している所もあったが、まだそこが甘いという認識を持っている所、両方あるというのが現状かと思われる。本来ビジョンを共有

していれば、それに伴い、高校の先生方も共有したビジョンに向かって日常の学科についても、そういったことを意識したところによって変わっていくのだと思う。実際、浦崎先生に指摘していただいたような、中毒になっている高校の姿勢が少しでも改善される方向に動いているということを実感として持っている団体はあるか。「あるよ」ということであれば手を挙げて「例えばこんな変化があった」と示せるところがあれば教えてほしい。

では、発表を聞いたところで浦崎先生から感想も含めコメントをお願いしたい。

【高校と専門学校の接続状況 現状報告を受けて】

大正大学・浦崎氏——抽象的なところでは共有できると思うが、現場の第一線に立つホームルーム担任や教科担任の立場になった時に、共有されているかどうか大きな鍵になってくると思われる。目の前にいるこの生徒がどんな学び、関わり、経験を通して、どんな状態からどんな状態に変わるのだという、この具体性が欲しい。誰か一人具体的な生徒を描き、この生徒がこういう学び・体験をしたら、こういうふうになって、こういう状態で専門学校に来てくれたら、こういうふうに関われるから、今までの学生とは違ってこういう伸びを示して、卒業後は地域でこういうふうに関われるという、その具体性をもって情報交換や対話をしていただけるとありがたい。

日経 BP・高津——おっしゃるように、やはりまだ理念のレベルでのビジョンの共有で、踏み込みがない状態になっているところも多々あるが、実際に実証授業を見させてもらい、高校生に興味関心を持ってもらえるようなものの提供をし始めている所はいくつもある。共通のビジョンで一番多いのは「自分で進路をきちんと選択できるようにする」という設定だが、そこを実際一人一人の生徒、誰か一人でもいいから、この授業を受けることによって、その生徒が具体的にどういう進路の選び方をしていったのかをきちんとストーリーとして描けるものを皆さんの中で設定するのが大事なポイントになってくると思った。この点について、渡邊先生はどうだろうか。

専修大学・渡邊氏——問題意識としてはまったく同じ。冒頭、浦崎先生がおっしゃったように、今の高等教育の問題は、社会と遊離してしまっているということで、社会との結びつき、社会との連続性、つながりというものを意識した教育を若い人たちに施していかなければいけない。そして、またそれが「重要だ。やりがいがある。楽しい」という思いをかき立てていかなければいけない。それがビジョンということだ。そのビジョンは、高校生をどう社会と結びつくように成長させたいかという成長イメージだが、こうした会議は時間的制限があるから、つるんとした抽象的な表現しか受託機関の方から聞くことができない。浦崎先生のお話のような具体的なものでないと、そこは魂が入っていないということになる。受託機関、専門学校の皆さんが「高校教育を変えるんだ」という思いの下、こ

のビジョンの共有ということ、いま一度高校としっかり膝詰めでやってほしい。

コンテンツをしっかり制作している専門学校は、もともとこのビジョンはもやもやとしたものでは持っている。すなわち、専門学校はエグジットが社会に近い存在、企業に近い存在だから、持っていると思っている。それを反映したコンテンツがしっかりできていると私も見ていて思っているが、そこがしっかり言語化できないと、なかなか高校の先生にも理解してもらえない。もともと持っているビジョンを具体的に言語化し、高校の先生方、高校の当事者の方と膝詰めで共有して行ってほしい。

また、内容が受託機関によって千差万別。資格系の所もあれば、医療系の所もあれば、スポーツ系の所もある。実証授業の後に高校の当事者の方と専門学校の方が必ずレビューをし「こういうところは具体的にイメージが合っていたけど、ここは合っていないよね」ということをすれば、そのうまく言語化できていないところも補えるのではないかな。

このあたりの高校とのビジョン共有は、基本的に高校マターだろうと専門学校の方は考えるかもしれないが、最初の浦崎先生のプレゼンにあった現在の高校の置かれている状況を見ると、やはりそのところは受託機関たる専門学校の方が高校サイドを手伝ってほしいと思う。彼らに腹落ちしてもらおうのだということで、そのビジョンを言語化していく。これが実際にちゃんと言語化して、本当に高校の先生たちが腹落ちしたのかどうかというリトマス試験紙になるのではというのがわれわれの有識者会議でも出たのだが、高校に『われわれ、こういう専門学校との連携プログラムをやっているよ』ということのをわが高校のセールスポイントとして保護者の方に説明できますかと。説明できるレベルまで腹落ちしてもらえば、それはかなり説得性の高いかたちで腹落ちできていて、巻き込めているということになるのではないかな。そこがリトマス試験紙になる。そうやってしっかり高校との共有ができる、腹落ちさせることができたとなれば、これは横展開もできるということ。現在展開していない他の高校とも連携しやすいという非常に Persuasive なもの、説得性の高いものにプログラムがなっていくということなので、ぜひそのところは注力してもらいたい。

最後に一言。やはり跛行性はあると思った。プログラムも千差万別なので、同一条件でないものをただスピード感で比べるのはおかしいかもしれないが、高校側とのビジョン共有についてもうまく進んでいる所と進んでいない所があるのだろう。そこは事務局を介してでもいいので、好事例の具体的なノウハウを後れている所は学び、後れている所は逆にその悪事例、なぜうまくいっていないのかということを事務局経由で広げるといいうのをやって行ってほしい。

日経 BP・高津——小小学園は高校の先生の巻き込みで苦勞はしているが、かなり頑張っていると聞いている。今の話を受けて「こういうやり方は効くんじゃないか」と思っていることがあれば、教えてほしい。

小小学園・影山氏——（画面共有：資料①）セミナーでこんな発表をしようかなと思っているとところも少し共有しつつ。先ほど、浦崎先生や渡邊先生が言われたことに重なるかと聞きながら思った点で少し。今年のプログラムはメタバースや映像の教材を事前教材としてやり、その後に体験をしっかりとってもらう。ビジョンの共有とは違うかもしれないが、一つ可視化したいのが生徒の気持ちの変化。変化とエピソードを可視化し、これを積み上げていきたいと思い、今年の検証ツールとしてこのようなアンケートを活用している。

日経 BP・高津——これは生徒個別にとっているのか。

小小学園・影山氏——個別にとっている。これは本当に面白い。これはインテリアを受けた方が書いたもののコピーだが、気持ちとしては上がる、お金についても「すごいいいな」と思うだけではなく「こんなに高いんだ」と理解が深まったと。インテリア系はもともと興味を持っている方が多いので、そういった仕事や実際の物という実感に落とすところが次のポイントになるのかなと感じた。一方でデータサイエンスをキーにすると、最初の期待はめちゃめちゃ低い。そもそもデータサイエンスって何？、聞いたこともあるようなないようなところ。その分野自体の体験を通して少し期待が上がったなど、そういったところで一人一人のエピソードが積み上がっていく。これを分析するのは大変だが、実証を通して、われわれも学んでいる。

当然ボードの先生とは「こういう実証をしましょう」と話をした上で実証するのだが、高校の先生たち、担任の先生は最初「何しに来たの？」という雰囲気。ただ、実際に受けている生徒の顔や、終わった後「なんかこんなすごいことやってくれてありがとうございます」みたいな声をかけてもらうことが積み上がってきていると実感値として持っている。

全体のビジョンを共有して、そこから逆算的にプログラムをやっていくということも大事だが、やはり生徒を育てて、専門学校と連携して社会人を出していくという中で、生徒一人一人のエピソードや反応を共有するシーンをどこまで高校と作れるかというのがすごく大事なポイントだと思っている。われわれは高校生に対しても、あえて社会に必要な力からと逆算で入らず、まずは体験しようというところから入っている。そういった実感値をどう共有できるかというのが非常に大事なポイントではないか。

併せて補足をすると、渡邊先生のご指摘にある、高校から保護者の方をどう巻き込んでいくか。先行的にやっている練馬工業高等学校に、高校側から PTA の方の専門学校体験ツアーを組んでもらった。これも会話の中で企画になったものではあるが、起点は、何回か積み上げると「なんか生徒、楽しそうだな」といったところで先生方にも少しずつ理解をいただいているとわれわれは捉えている。リトマス紙という表現を渡邊先生がされていたが、確かに保護者の方に高校の先生が専門学校や、専門の学びをどう伝えていけるかは大事なポイントだと思っている。取り組みの紹介にとどまってしまったが、こういうかたちで進めている。

日経 BP・高津——いかに高校の先生を巻き込んでいくのかというところ。高校の先生からしてみると、生徒そのものがどう変化するのかというのは、やはり一番効く。そこは教育者なので、生徒たちにとってプラスになるようなところを実感として持つということだと思う。進路指導にも先ほどの個別のシートみたいなものを生かしていくことを検討していると聞いている。突破口になるアイデアの一つではないか。

大正大学・浦崎氏——こういう具体性がとてもよい。生徒がこういうエピソードで成長していくのだという、これこそが先ほど申し上げた具体性の典型例だと思う。ぜひこれを参考してもらいたい。

日経 BP・高津——われわれも進路別ということで聞かせてもらったが、最終的には生徒一人一人によって当然進路等も変わってくる。場合によっては、そのカスタマイズも含めて、きちんとやっていかなければいけないだろう。データとして計測できるところで、こういったやり方は非常にいいと事務局としても考えている。

日経 BP・高橋——そもそもこの事業は何のためにやるのかというと、生徒のためにやるのだということ。生徒の潜在的なニーズをどうやって引き出すのかが専門学校の役割だと思っていて、先ほどの小山学園の紹介はそういうところだと思う。

たまたま本日、ある所に視察に行った。職業講話だったのだが、生徒のニーズは何かと聞いたら「年収と休みと人間関係を知りたいということ」だと。職業講話は「自分の所はこういうことをやっていて、こういうスキルが必要」という話をすると思いがちだが、実はそこで生徒とのギャップが起きていて、生徒のためになっているようではない。今回の事業をやることによってそこが見えてきて、専門学校が役に立つことを高校の方々に知ってもらうという流れができてくるといいのかと思った。

興味深いデータを取ったので紹介したい(画面共有)。これはこの事業と関係なく弊社が独

自で行った調査だ。1万6000人ぐらいに対し、高校、専門学校、大学のイメージを聞いたものだ。ポイントになるのは、「高校の卒業生」を「先生方がどういうふうに見ているのか」を聞いたところ。「高校の卒業生」のイメージとして「夢を持っている」と回答した人は全体で31.4%、それに対して高校の先生方は37.8%。当然、高校の先生方のほうが「高校の卒業生」に対して「夢はきっと持っているよね」と思っていると。「専門学校の卒業生」のイメージになると全体が24%に対して高校の先生は20%。全体よりも高校の先生のほうが専門学校の卒業生は夢を持っていないと思っている。大学の卒業生と高校の卒業生の夢を持っているというイメージは、全体よりも高校の先生のほうが高いのだが、専門学校だけは夢を持っていると思っている高校の先生は少ない。

ここから、もしかしたら現場の高校の先生が専門学校に対してあまりいいイメージを持っていないのではないかという推察ができる。冒頭の浦崎先生の話にもつながると思い、このデータをぜひとも紹介しようと思っていた。ブランディング的な要素でいうと、この事業だけでは何ともならない要素もあるかと思うが、一方で専門学校も努力していかなければいけない。

先ほどの小山学園のような取り組みをしていくと変わってくるのではないか。世の中的にはまだまだこういう状況だが、ここを何とか打破していくことが必要。今回やっている専門学校の取り組み、もう一つには文部科学省が専門学校のブランディングをやらなければいけないのかなというところもある。

日経BP・高津——川崎さん、今までの話を受けてどうか。特に高校の先生の巻き込みというところに関しては苦労しているのかなというところはあるようだが、例えば通信制の高校の先生でかなり前のめりの方がいるのではないか。

東京リーガルマインド・川崎氏——そうだ。通信制の高校の教師たちは、私たちが持っていく話あるいは情報、ビジョンの共有に関しても非常に前のめり。なぜかというと、入ってきた生徒たちへの出口戦略を比較的具体的に作り込みやすい、ストーリーの立て方が、われわれと一緒にする上では、ステージとしては遊びがいがある、そういう部分では非常に早い。

また、まず座学よりも体験含めてグループワークを進めていくということに関して、生徒たちの年齢はばらばらだが一つのチームとして、グループとして教育が進んでいく。そのゴールの選択肢の中に「こういうふうな業界があって、それに向かってこういうふうなことを学習する」ということは何もない。まだそういう部分では感性がみずみずしいので、自身たちに響いたものから動き出すという強みはあると思っている。

逆に公立高校のようにカリキュラムがかっちり出来上がってしまっている中でいくと、持っているコンテンツで入っていけるものをまず取り上げてもらうという施策からでないとか動かしていくことにはなかなかつながらないというのが今の実感だ。先ほどのエピソード、それと意識の変化を体系づけて数値化する、可視化する、これを学校の先生と共有するというやり方は非常に参考になったので、取り入れていきたい。

日経 BP・高津——高校の先生との取り組みということで好事例になると思うので、琉球リハビリテーション学院と東北高等学校（以下、東北高校）との連携の話を紹介してほしい。

琉球リハビリテーション学院・井上氏——担当の福田が席を外しており、代わりに井上が報告する。

東北高校は普通科なので、本来は実証校ではないのだが、今回は仙台リハビリテーション学院の協力を頂き、実施している。開始時にスポーツやリハビリに興味のある人も対象に、どんなところに興味があるのかなどアンケートをとって、リハビリに対してどんな思いがあるか、どういったイメージがあるのかを確認している。その後、年間を通してプログラムを実施し、前半と後半の2部構成で行い、現在は1年生を中心に2年生、3年生へと実証講座をブレも含めて実施している。前期に関しては、実施が終了したものに関しては終了後のアンケートも実施しているので、調査報告の後にまた取りまとめて報告したい。

日経 BP・高津——先般、琉球リハビリテーション学院が東北高校と連携して仙台でやった時の実証講座を見た。東北高校の教頭先生のほうで、専門学校との連携ということで18ぐらいの分野のどこに興味があるか生徒たちに選ばせているのだが、その各分野で実際に専門学校に高校側から専門的な授業やキャリア教育につながるようなものをオーダーしているというケースがある。理解の仕方が偏差値的なものではなく、子どもたちが社会に出ていく時に実感として「どういう仕事があるのか」といったものを学べるきっかけを作るという意味でかなり希少な事例になる。プログラムの中身については、まだまだこれからのかもしれないが、そういった意識を持っている高校の先生もいることに非常に驚いた。こういった先生を見つけて、タッグを組めれば、いろんなやり方ができるかと思っている。おいおいその先生にはこういう場に参加していただき、考えを聞いてみたいと思っている。

琉球リハビリテーション学院・井上氏——一点よいか。本学院で大切にしているのは、高校のニーズをまず必ず調査し、希望に添えるような形で「専門学校としては、こういったことが提供できる」というのを、何度も足を運んでプログラムを検討しているところがあるので、まずは先生方との関係性を大切にスタートしていくことが大事だと考えている。

日経 BP・高津——続いて、西野学園は専門学校生と高校生が一緒になってワークショップをしている。ここも一つポイントになると思うので、その辺について話をしてもらいたい。

西野学園・飯島氏——本校は大きく2つの高校と連携をしている。本日は余市紅志高等学校の先生にも来ていただき、一緒に会議に参加している。「総合的な探求」の時間で学生がすべて交流して一緒に授業を展開しているというかたちなので、高校の先生方とわれわれ専門学校の先生がゴールをちゃんと見据えて進めることが必須。密に連携を取り合っている状況だ。

日経 BP・高津——加えて、バリアフリー農園は地域に開いてやっている。

西野学園・飯島氏——そうだ。余市紅志高校で関わりのある高齢者施設の方たちを招き、共同で開発したバリアフリー農園を実際に体験してもらって、アンケートもとって、次につなげていくという取り組みをしている。来年度、今度はわれわれが考えている農園を高齢者施設に持っていきこうという話で、今教員間で連絡を密にして進めている。

日経 BP・高津——若干補足を。先ほどの小山学園のようにシートにまではなっていないが、生徒一人一人に対して個別にヒアリングを綿密にしているのは共通しているところかと思う。同時に先生だけではなく、専門学校の学生と高校の生徒の連携というところ、少し年上のお兄さんお姉さんたちから学べるようなところはプラスになってくるのかと考えている。

先ほど「単なるキャリア教育だけではなくライフデザイン」というキーワードが出てきたが、仙台リハビリテーション専門学校から、この辺の必要性について話をしてもらいたい。

仙台北学園・根本氏——先生方の指摘のとおり、給料など待遇を気にする高校生が非常に多いというのはある。本学の場合、これはコーディネーターからの意見だった。職業教育に関しては、専修学校としていろいろキャリアデザインを形成していくことはもちろん得意だが、やはり生徒自身が自立して社会で生きていく上では、そういったライフスタイルに関しても検討していく、教えていく必要があるのではないかということで、高校の先生とも共有しながらやっている。

日経 BP・高津——高校の現場では、ライフスタイルや将来のライフデザインなどについての情報提供が少ないということか。

仙台北学園・根本氏——そうだ。どうしても保護者の意見が昨今はとても強いので、そのあたりも含め、いかに生徒自身が社会に出ていけるかをイメージさせたいというのが高校の先生の思いになっている。

日経 BP・高津——新潟会計ビジネス専門学校は、生徒に与える情報ということでいうと、キャリア教育以前に職種やお金の問題ということについても、できるだけバイアスのかからない形で情報を提供していると聞いているが、その辺についてはどうか。

新潟会計ビジネス専門学校・川島氏——今回、高校で行ったのは就労意識醸成講座。自分が学んでいることが会社のどこで生かせるのかなかなか知ることができない。企業の部署がどのような構成になっていて、例えば「ヒト・モノ・カネ」だとか、そういったところで、その構造は高校生もプレ実証したところでの私たち専門学校生もなかなか分からない部分があったので、そういった部署の内容を伝えた。そうすると、自分の持っている資格でどこで活躍できるのか、あとは異動の話もある。就職はしたが、自分がやりたい部署に行けなくて、すぐに辞めてしまうなど、会社とマッチングがうまくいかないということもよくあるが、初めから「会社の成り立ちというのはこういうふうにいるなとところで絡み合って成り立っている」ということを学生に分らせることで、自分のイメージが広がるような講座を実証していった。

日経 BP・高津——日本 e スポーツ学会もライフデザイン、ライフプランに近いものを情報提供していると思うが、その辺についてはどうか。

日本 e スポーツ学会・笈氏——e スポーツに関していうと、まだまだ需要と供給のバランスが一致していない。まだ全然卒業する人のほうが多く、業界がそれを受け入れきれない。ただ、今後そういう業界がどう広がっていき、ここで学んだ人たちがどういうかたちで役に立つようになっていくのかを見せていくことが必要。まだ考えがまとまっていない人たちに対してそこを丁寧に見せて、必要なものを提供していく。デジタルの世界で生きている人たちに対して、一番近しいかたちで提供していくことが重要だと思っている。

日経 BP・高津——時間も押してきているので、総括して渡邊先生からコメントをお願いしたい。

専修大学・渡邊氏——うまく皆さんの発言を引き出してもらったので、われわれもイメージが湧いてくる。e スポーツとリハビリの世界ではアプローチの仕方が違うということもよく分かった。進路指導を活用するとか、高校にあらかじめ行って、専門学校が何をできるかを膝詰めでするとか、いろんな好事例の紹介があった。本当にトライアンドエラーい

いているので、今日出た話を基にいろいろと試し、高校とのビジョン共有をしっかりと深掘りしていただきたいと思います。

大正大学・浦崎氏——終盤に出てきたこと。専門学校に来たら、どんな若者になれるのかをリアルに学生の姿を通して高校生に伝えていくことは、とても大事だなと思っている。高校の教員、先生方は専門学校にあまりいいイメージを持っていないというのは、本当のところは自分たちで痛めつけるだけ痛めつけて、ぼいっとやっているだけ。だけれども、実態はそうではないので「専門学校に行ったら、これだけチャレンジして、こんなに成長して、こんなきらきらした姿になれるんだよ」というリアルを高校生に届ける、あるいは高校の先生に届けていくことはとても大事だと思っている。そういう姿を通して、高校生にこっちに向いてもらったり、先生方に向いてもらったりというアプローチも従来の手段に併せてとると、より一層活路が開けてくるのではないかな。

日経 BP・高津——次年度の計画も踏まえた上で、今日の合同会議が皆さんに新たなトライのきっかけになればと思っている。宿題として出したところも、改めてビジョンの共有というところをきっかけにしながら、いかにそこに具体性を持たせていくのがポイントになってくる。そこを今後も深掘りをしていき、専門学校に行くかどうかという生徒になるのか、その魅力を高校生や高校の先生方、ひいては高校生の保護者の方までうまく伝えるようなアイデアを出し合いながら、進めていければと思っている。

来年の事業計画をまとめるにあたって、2月のセミナーの後でも構わないが、今日出たテーマを踏まえ、どんなアプローチをしていけばいいのか、具体的にどうやっていくのかについては、必要であれば引き続きヒアリング等でまた皆さんとお話をしようと思っている。セミナーが終わると「もう今年度は終わり」というような感じになるかもしれないが、来年度に向けて、必要であれば事務局にリクエストをしてほしい。最後になるが文部科学省から一言お願いしたい。

文部科学省・小江氏——今日、冒頭から高校とのビジョンの共有という大きなテーマがあった。その中で方法論、心の持ちよう、どうやっていくのかというところを含め、いろいろと皆さまから実践していること、それから浦崎先生、渡邊先生からもアドバイスをいただいた。今日、出てきたことはいずれも大事だと思うが、専門学校に対する高校の先生からの期待というところは、担当としては言いにくいところもあるが、現状ではあまり期待されていないところもあるかなと思っている。

一方で琉球リハビリテーション学院が連携している東北高校の先生のように専門学校をうまく使ってもらえるようなことをやっている高校もあった。高校の先生にも今、実践し

ている授業をじっくり見てもらうことが大事なのかと感じた。高校とのビジョンの共有という大きな話から始まったが、細かいところでは新たな課題も発見できたのではないか。要は高校の先生にどうやって今やっていることを知ってもらうか、それにどう関わってもらうかが大事なところ。しっかり関わってもらえればそのうちにビジョンの共有もできてくるだろうし、共有というよりも一緒に作っていくことも可能になるとも思っている。

これから来年度に向けて事業計画等も作ってもらうことになるが、そういった中でどう高校の先生を巻き込むか。最終的には高校の先生方にも「なんか専門学校がやって来て、何かやってくれているよね」という話ではなく、高校の先生側から「専門学校を使って何やってもらおうか」と思ってもらえるような関係になれば、一番いいのではないかと今日改めて感じた。そういった高校と専門学校のいい連携に向けて、引き続き取り組んでほしい。

日経 BP・高津——今日は複数名、ライブで高校の先生にも視聴いただいている。今回レコーディングしたデータについては、後ほど高校の先生方にも視聴できるかたちで皆さんにお送りする。高校の先生を巻き込んでいく時に、合同会議等の場に参加していただくようなかたちを今後も引き続きとっていきたい。浦崎先生の資料についても皆さんに共有していいと了承いただいている。高校の先生方に「あなたたちが一緒になって変わってくれないと、日本の高校の現場、子どもたちにとって非常に不幸なことになっていく」ということを認識してもらうためにも、必要に応じて資料を活用し、高校の先生方を巻き込むことにトライして行ってほしい。

本日はこれで終了とする。

(以上)

(資料①)

検証ツール (アンケート)

8

	映像を見る前		映像を見た後	
	期待指数【 -3 】	期待指数【 2 】	授業前 期待指数【 0 】	授業後 期待指数【 4 】
今の気持ちを 数字で表してみよう！ 高 5 4 3 2 1 0 -1 -2 -3 -4 -5 低 自分 の 気 持 ち (期待指数) を「-5から+5」 の10段階で表 して、グラフに して、グラフに してみよう。				
【期待指数】について どうしてその数字に しましたか	・何を見せられるのかわから ないから付き合い程度	・思ったより楽しかった ・車の変化についていることが できた		
受講前と後で思っていた より違っていたことなど	・興味はないが何となく見てみ ることにする	・自分にあっていくと考えてい きたい	・自分にあっていくが受けてい たい	
印象に残ったこと、気づ きなど		・テクノロジーがごろ集結し ているとは思わなかった		・思っていたより自分に合っ ていた。将来の仕事として考え てみたい。

← 「期待指数 (=分野への興味
度合い、ワクワク感)」の変化
を可視化

← 変化の背景や理由、プログラ
ム自体の印象を記入

アンケート一例

15

【インテリア】

	映像を見る前		映像を見た後	
	期待指数【 3 】	期待指数【 3.5 】	授業前 期待指数【 4 】	授業後 期待指数【 5 】
今の気持ちを 数字で表してみよう！ 高 5 4 3 2 1 0 -1 -2 -3 -4 -5 低 自分 の 気 持 ち (期待指数) を「-5から+5」 の10段階で表 して、グラフに して、グラフに してみよう。				
【期待指数】について どうしてその数字に しましたか	前からインテリアに 興味あるから。	→ 興味が増えた。		インテリアの 魅力を知りた いから。
受講前と後で思っていた より違っていたことなど		難しかった。		値段の高さにびっくり した。でも高くてもいい 知人から聞いた話と 違った。
印象に残ったこと、気づ きなど				デザインと材料 の違い、価格の差 が大きいことに 気づいた。

- もともとインテリアに興味があった
- 映像を見て興味度は増したが「難し
そう」という不安も感じる
- 体験を通して興味が上がり、またお
金の話も聞く中で仕事のイメージが
少しだけ具体的に

令和4年度文部科学省委託事業 専修学校による地域産業中核的人材養成事業
専門学校と高等学校の有機的連携プログラムの開発・実証
地域活性化のための農福連携人材育成事業

令和4年度 成果報告書

令和5年3月

学校法人西野学園（札幌心療福祉専門学校）
〒064-0822 北海道札幌市中央区北2条20丁目2-28
TEL:011-643-8241 FAX:011-643-8292